



造形

2010年

北海道造形教育連盟創立60周年記念誌



造形

CONTENTS 目次

連盟誌発刊に寄せて	第22代会長 菅原清貴	1
歴代委員長の言葉		
二十一世紀の造形教育をめざして	第16代委員長 白井 剛 毅	2
創立六十周年に想う	第17代委員長 吉田 倭 雄	2
連盟の思い出	第18代委員長 芝木 秀 昭	3
次代を見据えて	第19代委員長 藤井 正 治	3
私と連盟との出会い	第20代委員長 冨田 泰	4
造形でつながる 人・夢・未来	第21代委員長 今 裕 子	4

つながる造形

北海道造形教育連盟創立60周年 造形教育連盟の明日に期待する！ 在札顧問会	5
---------------------------------------	---

美術館・PMFとのコラボレーション

「子どもの作品が美術館に！」～近代美術館と連携のコラボ～	札幌市立福住小学校長 今 裕 子	9
カゴラの森の夢のなる実～KINPROさんとのコラボ～	札幌市立星置東小学校 森 實 祐 里	10
本物に触れ、育まれる感性～つながりを意識した造形活動～	札幌市立中央小学校 八 田 博 之	11
夢のなる森～アーティストが学校にやってきた～	札幌市立観北小学校 福 島 由 紀 子	12
「個性的でアートな四季美術館」の誕生	札幌市立円山小学校 宮 田 珠 世	13
創造的な想像力を引き出す美術鑑賞教育の力	札幌市立伏見小学校 湯 浅 大 吾	14
美術館と学校をつなぐ～連携授業を通して見えた成果と課題～	札幌市立柏中学校 大 高 雅 子	15
今を生き、未来を創る	札幌市立啓明中学校 平 井 步	16
PMFとのコラボレーション～音楽とつながる～	札幌市立観北小学校 福 島 由 紀 子	17

「ひと」と「ひと」がつながるネットワーク	札幌市立観西小学校 小 林 友 広	18
----------------------------	-------------------	----

第51回～60回 研究大会のあゆみ

連盟60年の歩み	21
51回大会～60回大会までの歩み	23

造形ひろば

ずっと 気になっていることを書いてみたくなりました	札幌市立光陽小学校長 土井善範...	65
「時間の庭」を回想する	北海道教育大学岩見沢校准教授 阿部宏行...	66
子どもたちに真の楽しさを	札幌市立稲積中学校教頭 勝田真塩...	66
嗚呼「山水長巻」～対話型の鑑賞の学習を深めて	札幌市立稲積中学校 高橋久美子...	67
授業を共につくる楽しさ	札幌市立観南小学校 山 薫...	68
一冊の大会集録を手にして	札幌市立平岡中央小学校 東 尚典...	68
「子どもにつけたい力」	札幌市立中の島小学校 小野博史...	69
美術は心の運動	札幌市立米里中学校 細川亜矢子...	70
全道大会とのかかわりを振り返って	函館市立中の沢小学校 佐郷谷 滋...	71
回想	天塩町立天塩小学校長 橋 溝 裕美子...	71
六十周年とは、本当にすごいこと	弟子屈町立昭栄小学校長 奥 田 泰 朗...	72
子どもの絵は聴くもの	旭川市立近文第一小学校長 渡 辺 盛 二...	73
みんなが楽しく学べる図工の授業を目指して	苫小牧市立糸井小学校 宮 下 肇 彰...	73
心を開く	旭川市立旭川小学校教頭 菅 原 良 和...	74
子どもに学び、互いに磨きあうなかまに囲まれて	岩見沢市立第二小学校 中 澤 孝 仁...	75
「六十周年の節目に」	帯広市立西陵中学校 根 岸 邦 昌...	75
オホーツク造形教育連盟と私	北見市立常呂中学校長 光 岡 光 彦...	76

平成22年度 北海道造形教育連盟名簿	77
地区サークル役員名簿 2010	81
北海道造形教育連盟規約	85



造形



連盟誌発刊に寄せて

第二十二代会長 菅原清貴

(札幌市立幌西小学校長)

北海道造形教育連盟は、昭和二十六年十一月二十四日に北海道図画工作連盟として設立されました。六十年の長きにわたり多くの先輩諸氏が北海道の造形教育を支え、その振興のためにご尽力いただいた事は衆目の一致するところで

す。
創立五十周年誌「虹色の造形」で第十八代委員長芝木秀昭先生は、「本連盟は、造形教育の基本理念を人間育成の基本教科・科目と位置づけ、感性・感覚・感情・表現という心の奥底の生き方そのものに関わることで研究・実践を積み重ねてきました。」と述べられています。私達は子どもと共に、経験や体験を積み重ね、自らの感覚を研ぎ澄まし、感性を磨いていくことが大切です。そして、みずみずしい豊かな感情を抱いてじゅくじゅくと、表現に結び付けていく。これが芝木先生の述べられている「心の奥底の生き方」なのだと思います。まさに「人間育成の基本教科・科目」であるわけです。

さて、平成二十三年七月は北海道で全国大会が開催されます。この大会は、全国造形教育連盟と日本教育美術連盟の共同開催という画期的大会となります。人間でいえば遺暦を迎え、「第二の人生」を迎えた次の年に、六十年間生きてきたその真価を問う場としてこの大会が開催されるわけです。大会は、造形教育を通して、子どもたちにもどのような資質や能力を培うのかを、広く社会に発信する場にしたと考えています。この取組を単なるイベントとしてではなく、造形教育というものが「人間育成の基本教科・科目」であることを、子どもにも寄り添う価値ある授業の構築を通して、広く世の中に訴えるものと考えています。

さて、その授業ですが、子どもたちが造形活動を通して「楽しいなあ」「素敵だなあ」「美しいなあ」と呟く数を増やす授業を積み上げていく事が大切だと

考えています。その先には「人間っていいな」と感じる「人間育成」が広がっていると確信します。

子どもは本来、他の子の表現をも認めるあたたかな存在です。表すことに願った時、教師や友達からの「助け舟」(支援)が、推進力となり「もう少し頑張ってみよう」という気持ちが湧いてきます。その頑張りの先に「できた！」を味わわせてあげたいのです。そして、次への表現にさらなる自信と意欲を持たせてあげたいと望んでいます。

この授業中心の大会は、子ども中心の大会でもあります。二つの全国団体がその持てる力を出し切って、次へのステップとする場が、北海道であるのです。私達連盟は、困難を乗り越え全力でそのステージを創ることが、六十周年の祝いであります。

この記念誌が私達の六十年間の足跡を辿る貴重な資料であるとともに、これからの造形教育をさらなる高みに押し上げる原動力となることを願っています。最後になりますが、六十周年記念誌の発刊にあたり、六十周年企画委員同編集委員に心から感謝申し上げます。





二十世紀の

造形教育をめざして

第十六代委員長 白井 圀 毅

北海道造形教育連盟創立六十周年、おめでとうございます。

私は、五年前、体調をくずし、しばらく連盟の会合にご無沙汰している次第です。私は五十周年よりかなり前の役員ですから寄稿するのはおこがましいのですが、依頼されましたので、一筆後輩のために筆をとることにいたします。

一九九六年、第四十六回全道造形教育研究大会は、五年振りの札幌での大会になりました。私の現役最後の年でした。常にユニークな発想と豊かな個性を発揮されている大会実行委員長の伊藤善彬先生（札幌連盟委員長、現顧問）、研究部長の菅原清貴先生（現 道会長）を中心に常任委員一同「新たな造形教育の可能性を探る二十一世紀に向けての札幌の主張の場にしよう。」を合言葉に様々なアイデアを出し合いました。（当時の紀要をご覧ください。元気が出ます）中教審からは、これからの教育の目標を「生きる力」の育成と「ゆとり教育」の確保を掲げ、完全週五日制の導入を提言された年でもあります。

札幌の研究主題「愛・感・美・遊・創 in 札幌」は、まさに「生きる力」そのものです。（アイ・キャン・ビー・ユー・ソーと読むと調子良い）約六〇〇名の参加者を迎え、盛会でした。その後のレセプションも当然盛り上がりました。これも連盟の大切な伝統の一つです。

ところで、六十年間も分裂することもなく発展し続けているのは、強烈な個性を持つ教員が多い集団でありながら、それは子どもを愛してやまない人達と豊かな感性の持ち主の組織だからです。

「ゆとり」が今、学力低下を招いていると報道され、教科書も平均二五%増になると聞きます。しかし、「ゆとり」がなくなったとしたら、どうなるのか心配です。今後、造形教育連盟の役割は、益々増えてきそうです。



創立六十周年に想う

第十七代委員長 吉田 倭 雄

現職中には大変お世話になった連盟なのに、退職後は会合の案内をいただいても欠席ばかりで、特に最近では教育美術展の審査会に参加するだけになってしまい、申し訳ない気持ちでおりますが、歴史と伝統のある北海道造形教育連盟が創立六十周年を迎え、菅原清貴会長を中心に委員の先生方が力を合わせて、日常の実践を通して造形教育の発展に活躍されていることを、大変頼もしく思っています。

私が連盟にかかわるようになったのは、西野小に異動して辻悦平先生に巡り合ったことからでした。高橋栄吉先生が委員長をされていて事務局長が辻悦平先生の時代でした。

新設校の西野小学校長でご多忙だった辻先生には、日頃いろいろな面で、大変お世話になりました。全国大会の授業を仰せつかったり、また、教育美術展が始まった頃で、審査の会場校だったこともあり、地方の学校からチェックで届く作品を国鉄琴似駅まで受け取りに行ったりと、忙しくはありましたが、充実していたのも連盟のおかげという強い思いがあります。後に白井圀毅先生の後任として委員長を務めさせていただいた時には、連盟本部や根室造形教育連盟の皆さんのご尽力で、根室市では初めてという全道大会を無事開催できたことも、心に残る思い出となっています。

北海道造形教育連盟が六十年の長きにわたって全道の造形教育あるいは全国の造形教育に果たしてきた功績は、言うまでもありませんが、それは連盟に携わっている先生方が、幼・小・中・高・大を網羅していて、いつの時代においても造形教育に対して先進的で熱心な実践者であることが、連盟発展の原動力になっています。

連盟に感謝の気持ちを込めて、ますますの発展を祈念しております。



連盟の思い出

第十八代委員長 芝木秀昭

北海道造形教育連盟六十周年記念誌の寄稿を受け、四十余年を連盟の一員として関わらせていただき、多くの方々との出会い、いただいた数々のご指導ご支援を想い感無量のものがあります。

この四十余年の中で、私の心の中には数多くありますが、中でも忘れられないのが、第五十四回全国大会札幌大会です。

私が尊敬する第七代委員長の辻悦平先生が三十周年記念誌に述べられた「造形教育のあり方が人間そのものの生き方になることを再確認し、互いに意欲を燃やし、心と心結び合いはだかになって人間としての夢を探求し続けることを願う。」という一文が、今でも私の脳裏から離れません。そして、この全国大会では、連盟の先生方が皆、この一文の通り大会の成功を目指し取り組みました。休日を返上しての打ち合わせ、各局ごとの進捗状況等の確認、作品を持ち寄っての研究授業の話し合い等、辻委員長の言われた通り皆が心を一つにして取組んだ、私の心に残る素晴らしい全国大会でありました。

また、全造連の事務局は東京にありましたが、東京で全国大会を開いてもなかなか授業も行われず、子どもの姿が見えない大会でした。代議員会では、各県から連盟の会員数が減ってきている状況で、全造連の活動がなほ崩しに消えていくのではないかと心配である等の意見も出されてきました。私は当時、西日本の美術研究会で多くの研究授業を行い、毎年研究大会を開催していた日本教育美術連盟と全国造形教育連盟が一つになり、本当の全国大会を開催して欲しいと願っていました。その夢が、来年の第六十四回全国大会・札幌大会で実現されるということから嬉しく思っています。この夢をかなえてくれた道造連の先生方に心から感謝申し上げますとともに、これからの連盟の益々の発展を祈念し改めてお礼申し上げます。



次代を見据えて

第十九代委員長 藤井正治

創立六十周年を迎える北海道造形教育連盟は、その草創期の熱いエネルギーを連綿とつなぎ、今日まで引き継いできました。第一回の研究テーマ「情操教育の一環としての本道図画工作教育の進展をはかるため」から、本年度（平成二十二年）総会で確認された研究主題「わたしを創る／自立と共生の造形教育をめざして」まで、それぞれの時代背景の中、実践をもとに子どもの姿で授業を見つめ、研究を地道に積み上げてきた努力は会員一人一人が自負してよいものと思います。

私が事務局長や委員長を務めた頃は、平成十年改訂指導要領の実施の時期で、時数減に伴う指導内容の見直しを迫られる中、連盟では、「心豊かに未来に生きる造形教育」を研究主題として子ども像、授業像が熱く語られていました。平成十三年に開催された札幌での全国大会は、そのような時期の大会で、教科の先行きに不安を感じつつ、全国的な視野で大会を組織しようと芝木委員長のもとに取り組んだのを思い出します。

講演の講師には、全国大会では初めて文部科学省視学官の遠藤友麗氏に依頼しましたが、これも研究を全国のレベルで共有する柱の一つになったのではないかと思います。図画工作科・美術科の存在意義を広く訴え、心の教育の大切さを実践発表したこの大会は、造形教育の未来を見つめるという北海道の姿勢と相まって、全国大会の在り方を動かし始めたように思います。その十年後の来年二十三年に全国大会が再び北海道の地で、しかも、全造連と日美連の共同開催という形で開催されることに感慨深いものがあります。

私たちの研究は、北海道を足場にしながら、常に次代を見据え、子どもの姿で語り合うという姿勢を貫いてきました。そのことを創立六十周年を機に再確認し、さらなる前進へとつなげていってほしいと願っています。



私と連盟との出会い

第二十代委員長 富田 泰

連盟の歩みが六十周年を迎えて、心から喜びを感じます。このように節目を迎え、北海道の美術教育が連盟を基に脈々と続き、広い北海道の各地での日々の実践研究交流が行われていることは素晴らしいことです。また、幼保・小・中・高・大学の関係者で構成された連盟組織で北海道を一つに束ねていることは、全国に誇れるものです。この六十年を振り返り、連盟の歩みや研究内容を知ることが大きな学びとなることは当然であります。これからも私たちは常に研究の反省・推進に身を置かなければならないと思います。

私と連盟との出会いは、二十五才頃です。札幌市教育研究協議会図画工作部の会合で、ある先輩が声をかけてくれました。札幌大がまだ南二十二条にあつた時、電車道路をはさんだ向かい側の庭に桜の木のある館に、出向いたのが最初です。例年行われる春の総会時にその桜の咲き具合を見て一年の寒暖を談笑し、前年度の反省と新年度の計画が協議されたものです。若かった私は、先輩の方々が熱心に語り合い研究に向かう姿をみて、多くのことを学びました。全道から集まる方々とお会いするのも楽しみでした。私は会場係やお茶くみ役でしたが、諸先生方の情熱を肌で感じ喜びを得たものです。

札幌に赴任した当初のことで思い出すのは、札幌研図工部会の初の案内状が来た時、職員室で「図工部会に行つて来ます！」と話しかけると「くだらないから行くな！」と、とっさに出た私の返事は「くだらないことを学んできます！」です。研究に対して否定的な人もいた時代です。学ぼうとする者には「くだらないことはない！」のです。これがきっかけとなり、その後、部会欠席をほとんどしませんでした。これが私の「美術の教育」の始まりです。「くだらないこと？」に学ぶことは、自分なりの考えを得ることにつながり、多くを学ぶことが出来るものと思います。



造形でつながる

人・夢・未来

第二十一代委員長 今 裕子

(札幌市立福住小学校校長)

学校、そして子どもたちの周りはいつにもぎやかです。そして子どもや学校を包み込む時間はどんどん気ぜわしくなり、忙しい日々です。

「子どもたちはゆっくり大人になる」のであって、「大人にする」のではないと思います。しかし、時間の進み方がわかりにくい時代になっています。たくさん遊んだり、不思議に思ったことを素直に表現するとたしなめられたり、本当に必要な「子どもの時代」を大人のスピード感で進めさせられたりしているように思えてなりません。

忙しい、と言ってパソコンと向き合う先生。時間の経過がわかりにくくなりました。教材の「旬」は季節感と子どもの発達段階だと思います。

全国一律の造形活動ではなく、北海道は北海道の「旬」があり、魅力的な題材が豊富な先生たちから生まれた実践は大変嬉しいものでした。

たとえば毎年開催される全道大会は「ここから始まる造形の未来」を託しながら、各地区の先生方の夢のある実践が交流されてきました。

「ここ」とは教室の子どもたち一人一人に寄り添った温かなかわりが造形活動を通して伝わってくる実践。また教育ボランティアの方々やアーティスト、あるいは美術館との連携などにみられる、より深いつながりがみられる実践など、ここ数年の造形大会は開催地の試行や新たな挑戦がみられ、時にはパフォーマンスのある多彩な実践が見られました。

「ここ」とは、子どもが真ん中において、主人公として生きる造形活動であって欲しいものだと思います。

元気な学校は、教師自身も子ども達と一緒に心がときめき、わくわくしながら好奇心を持ち続けて生まれるものと思います。

子どもの未来をぜひあなたと子どもたちの共同で創り出してください。

つ

ながる

造形



北海道
造形教育連盟
創立60周年

造形教育連盟の

明日に期待する！

在札顧問会

札幌の街が「よさこいソーラン祭」に賑わう六月、本連盟の歴代委員長をはじめ、札幌近郊に在住されている顧問の皆様にお集まりいただき、今年創立六十周年を迎えた北海道造形教育連盟への願いや期待などを、語っていただきました。

顧問会の開会にあたり、菅原連盟会長より、組織を新しい時代の要請に委早く対応できるように改編したこと、地方各支部との連携・協力を強化してきていること、この夏、新たな支部サークルが設立されることなどが報告されました。

また、来年には、全国図画工作・美術教育研究大会を「北海道大会」として全国造形教育研究連盟と日本教育美術連盟との共催で行い、造形教育の重要性、素晴らしさを全国にアピールする場にしていきたいとの強い決意を述べました。

さらに、このような大会を開催できるのも、連盟六十年の研究実践の積



み重ねと諸先輩のご指導のおかげと謝意を表すとともに、九月の連盟創立六十周年記念式典に合わせてプレ大会を行うことを報告し、引き続き力強いご支援をお願いしました。

会の中では、顧問の皆様から、連盟での懐かしい思い出話と大会開催をはじめとした北海道造形教育連盟の会員への激励のお言葉をいただきました。



◇造形遊びが入った頃から、「カラクダでカラクダを作らせてはいけない、何でもいから作ろうではなく、美しいものを大事にする造形教育を実践しなければ」と感じています。これからは、連盟の先輩たちが作った「指導の構築」をもう一度振り返り、活用していくことを考えたいのではないかと思います。



芝木 秀昭 先生

◇「ゆとり教育」が学力の低下を招いたと言われ、小学校の教科書のページ数も平均二五%増となったとか。そこで、新たに造形教育の在り方が問われることになるのではないかと。全国的に造形教育の考え方が同じ方向に向けられるのか、また、どのように評価されるのか楽しみながらです。



白井 國毅 先生

◇二つの流れが一つになり、心の教育、真の人間教育の本流として、さらなる大河となるよう、一人一人の力を合わせていってください。研究の深まりこそが、日々の実践を確かなものにします。子供の姿が、研究の結果です。大会の成果が、大きな実となることを念じています。



藤井 正治 先生

◇六十周年を一つの転機としてとらえ、全国的な視野に立ち、全国に跨れる組織機構を今まで以上に活用して、さらに発展することを願っています。何といたっても留段の先生方の子供相手の授業実践を大切にすることを期待します。



富田 泰 先生

◇造形連盟は外と繋がる組織として大きな意味があります。全国、中央、各地域の状況と自分たちの置かれている位置の確認ができる場でもあり、図工・美術の教科としての存在意義を本当の意味で広く研修し合えます。これらのことを今後も大事な柱として取り組んでほしいと願っています。



寺嶋 文恵 先生

◇時代の変化により美術教育への社会の要請も変化することは否めないが、子供たちを人間らしく心豊かに育てる目的は変わりません。これからの教育で大切なことは、学校・家庭・社会の連携。全国大会でも、このような視点に立ち、特に家庭と手を携え、家庭を支援する大きな広がりが見られることを期待しています。大会の成功を祈ります。



関 建治 先生

◇美術・図工教育がないがしろにされると、人間教育はみじめな状態にあるときです。人間性豊かな子供を育てるためにも造形教育を衰退させてはならないのです。全国大会、ぜひがんばってください。



森川 昭夫 先生

◇あつという間に六十年を経て、最初の常任委員で健在なのは小生一人になりました。古い顔がなくなつて、新しい人に入れ替わりました。六十年は、人に課題があるように、連盟もこちらで、新しい考え方を展開するとかかと思えます。時には、そういう話に随々阿々と議論することがあつてもよいのではと思います。



伊藤 恵 先生

◇どんな先生でもできる美術教育、子どもがあつと驚くことこそ美術教育。連盟の先生一人一人が整致になつてほしい。分故になつてはいけない。全国の思いを熱くする先生方から多くのことを存分に学んで、子どもに役立ててください。



金井 秀男 先生

◇昔と比べて、コンピュータをはじめとした教育機器の発達が著明らしく、授業に、研究に、交流に十分生かされている様子に驚いています。これからは、子どものいろいろな機器を用いての表現はどうあるべきなのかということが問題になるかなと思つているこの頃です。



松島 輝男 先生

◇かつて、連盟の中で実践事例などを作り上げてきました。美幌や余市で全国大会が開催されたことが思い出されます。小さな力もしっかりとまよとまれば大きなエネルギーとなることを教えられました。今後とも、連盟の活動に期待しています。



船着 昭弘 先生

◇六十年前から、造形教育の実践を積み上げる組織や教師を育ててきました。今、またこうして全国大会を迎える北海道造形連盟の現役の皆さんの英知と実力に敬意を表します。日頃培った力を十分に発揮してください。



鹿島 健 先生



〈参加して下さった顧問の皆様〉

- | | |
|----------|----------|
| *伊藤 恵 様 | 創立期 会員 |
| *森川 昭夫 様 | 第10代 委員長 |
| *松島 輝男 様 | 第11代 委員長 |
| *金井 秀男 様 | 第12代 委員長 |
| *鹿嶋 健 様 | 第14代 委員長 |
| *船着 昭弘 様 | 第15代 委員長 |
| *白井 園毅 様 | 第16代 委員長 |
| *芝木 秀昭 様 | 第18代 委員長 |
| *藤井 正治 様 | 第19代 委員長 |
| *富田 泰 様 | 第20代 委員長 |
| *関 建治 様 | 元 副委員長 |
| *寺嶋 文憲 様 | 元 副委員長 |

〈同席した会員〉

- ・菅原 清貴 会長
- ・稲實 順 事務局長
- ・中居 正光 事務同次長
- ・湯浅 大吾 道造連研究部長
- ・森實 祐里 札造連研究部長
- ・加藤 正幸 60周年委員会副委員長

湯浅 道造連研究部長と森實 札造連研究部長から、「わたしを創る」自立と共生の造形教育をめざして」の研究主題と大会に向けての研究の進捗状況を説明いたしました。



現職への熱いエール、ありがとうございました。ご出席くださいました顧問の皆様にご心より感謝申し上げます。9月3日の60周年記念祝賀会でお待ちしております。

美術館・PMF との コラボレーション

「子どもの作品が美術館に！」

「近代美術館と連携のコラボ」

札幌市立福住小学校長 今 裕子

「Born in HOKKAIDO」

北海道立近代美術館は三十周年を迎える二〇〇七年「次代をになう子どもたちの作品も視野に入れて」という企画をし、北海道造形連盟に誘いがありました。それまでも、図工・美術の教育活動のなかで道内各美術館の学芸員の方々の協力や支援をいただきました。がら授業づくりを行ってきた実践はありました。

しかし、今回は、近代美術館の三十周年の企画とともに参加させていただくという素晴らしいことであり、北海道造形教育連盟の私たちにとりましてもまたとないよい機会と積極的に受け入れ、札幌市内八校の教師によるプログラムづくりの段階からの参加が実現しました。

「実り行く未来」

児童・生徒の作品が美術館に数ヶ月にわたり展示される、そのこと自体画期的なことで、造形・美術の活動が、教室はもとより学校の門を出るきっかけにもなりました。

「ワークショップ型のプログラム」

学校にアーティストを派遣していただき、子どもたちと一緒に作品を制作し、その活動を通して生まれた作品を美術館に展示する鑑賞と表現のプログラムです。

国際的に幅広く活躍されているアーティスト、Kinkoさんと新矢千里さんは三つの小学校を訪問し、それぞれの学校の児童と「夢」「森」をテーマに創作活動をともしながら物語を展開しました。学年、学校、住んでいる環境も異なる子どもたちはそれぞれの思いで創り上げた「夢のなる森」を近代美術館「実りゆく未来」で大きな森となつてつながりました。一人一人の子どもの夢や願いが実った森を齎さんと親しみをもって見つめていたのでした。

「鑑賞・造形プログラム」

近代美術館所蔵作品の鑑賞や、「Born in HOKKAIDO」

DO」での展示作品を鑑賞し、そこから得た子どもらしい感動をもとに自分なりの表現方法で制作するプログラム。

美術館に来館し、鑑賞したインスピレーションをもとにその子らしい表現で「もうひとつの〜」といった、マイワールドを表現し、来館者ともに楽しむ姿が見られました。

いずれの活動にも当時の学芸員、鎌田さん、浅川さん、久米さんには大変お世話になり改めてお礼申し上げます。目的、評価、時間などの課題はありますが、この活動を通して、造形活動の未来を予感することができたのではないのでしょうか。



カゴラの森の夢のなる実

「KINPROさんとのコラボ」

札幌市立星置東小学校 森 實 祐 里

夢の森

「一緒に夢の森をつくろう」と当時動いていた三角山小学校の一年生(四十七名)にKINPROさんからお手紙が届きました。

子どもたちは、突然届いた手紙に驚き、

「KINPROさんって、どんな人なのかな?」と会う日を楽しみにしていました。

二〇〇七年に北海道立近代美術館では「Born in HOKKAIDO」で連携事業として、学校にアーティストを招聘し、子どもたちと一緒に作品をつくるワークショップを企画しました。三角山小学校には、札幌市在住のイラストレータ・KINPRO(新矢千里)さんが来ることになりました。ワークショップのタイトルは「夢のなる森」と設定され、参加者全員で想像の森をつくるというプランが立てられました。この「夢のなる森」は澄川西小学校の四年生と中央小学校の一年生と、三校合同でつくることになりました。一年生は、KINPROさんがデザインした木に実らせる「夢の実」をつくりました。

この活動では、本物(作品やアーティスト)に触れることで子どもたちの感性を揺さぶり、作品に対する思いや願いを膨らませることがねらいでした。また、今までにない作品が生まれることを期待しました。

夢のなる実

「夢のなる実」を子どもたちにとどのように投げかけたら理解してもらえるのか、美術館の学芸員さん、KINPROさんと話し合いました。

子どもたちは、入学してまもなく体育の授業で、「カゴラ」と出会いました。

「昔、三角山にはカゴラという生き物が住んでいたんだよ。今年、三角山小学校が三十周年のお祝いをしていて、目を覚ましてしまったんだよ。」と聞いて、カゴラが襲ってくる!と思った子どもたちは、何とかやっつけようと考えました。

運動会で、かごを背負った先生がカゴラに扮しました。逃げるカゴラを追いかけて、子どもたちがたくさん玉を入れ、動けなくなるようになりました。

その後、何度もカゴラと学習することにより、カゴラが大好きになり、子どもたちの学習に欠かせない存在になっていました。また、学校の裏山を「カゴラの森」と名付け、学習の場としていました。

そのカゴラの住む森でカゴラも食べた「夢のなる実」と設定することで、子どもたちの想像を広げていくことにしました。



KINPROさんと一緒に

十月十七日、いよいよKINPROさんと会う日がやってきました。緊張気味の子どもたちは、仲良くなるために「仲良し大作戦」と題して、サイン交換をしました。緊張がほぐれてきたところで、KINPROさんの絵を見せてもらうことにしました。

たくさん動物が描かれている絵にすっかり夢中になりました。子どもたちは「ここに、ぞうがいるよ!」

「これは、動物園なの?」と次々と絵の中に描かれている物を発見しながら、KINPROさんの世界にのめり込んでいきました。

素敵なお絵を見せてもらったお礼に、子どもたちはKINPROさんを「カゴラの森」に招待しました。得意になって、「カゴラの森」を案内し、一緒に遊びました。

その後、カゴラの森の木に実らせる「夢のなる実」を描きました。「甘酸っぱい味」「幸せな味」「ほんのり甘い味」など味を考えながら、想像を膨らませました。叶えたい夢は「KINPROさんみたいに友達がたくさんできるといいな」「ポケモンカードを〇〇、〇〇枚ゲットできる」「羽を生やして空を飛びたい」など、願いを込めて描いていきました。どの子もKINPROさんの木に自分の「夢のなる実」を实らせて、大満足でした。



終わりに

学年レクリエーションとして、たくさん保護者が参加し、美術館に作品を見に行きました。子どもと作品鑑賞を楽しみながら、子どもたちの作品がとて素敵に展示されていることに感激していました。大変貴重な経験になり、子どもたちにとっても保護者にとっても、大切な思い出となりました。

本物に触れ、育まれる感性

つながりを意識した造形活動

札幌市立中央小学校 八田博之

北海道立近代美術館との連携事業で、澄川西小学校、三角山小学校とともに、新矢千里氏を講師にワークショップを行いました。一年生の子どもたちには、新矢氏のアーティスト名、〈Kirino〉から、「きんぶろ先生と夢のなる森をつくろう」という題材名を伝え、朝から一日新矢氏と過ごせる時間を楽しみにしていました。

子どもたちは、自分の夢をかなえてくれる動物をそれぞれつくり、準備万端。当日、授業会場で子どもたちを迎えたのは、新矢氏デザインの発泡スチロールの木。円を基本としたその美しくかわいらしいデザインが子どもたちの心をしっかりと掴みます。子どもたちの口々から思わず、「わぁ」「きれい」との声が上がっていました。



そしていよいよご本人が登場。挨拶、自己紹介、質問タイムなどで心の距離を縮めた後は、作品を映像で鑑賞しました。彼女の自然を大切に作る気持ちや「本当はありえないことを表せるのが園工のいいところなんだよ」という言葉聞き、子どもたちの表現への意欲の高まりが、うなずきあう姿から見えていました。

続いて「夢のなる森」の制作が始まります。10m以上の長いロール紙を床に広げ、まずは新矢氏がサインペンでイラストを描いていきます。次々と生まれていく木々や山並みに子どもたちは感嘆の声をあげるばかり。「さすがプロ!」。クレヨンを手にしたまま、見とれている子どもたちに、新矢氏が「ここに花を咲かせて」とか「あのね、ここは湖」などと声をかけてくれます。作品に描かれた木を真似て何本もかいたり、雲から雨を降らせたりと、子どもたちの描く力にも確かな広がりを見ることができました。また、誰かと一緒にものをつくりあげる喜びや楽しさを十分に味わい、人への共感的で柔らかいかわり方も育まれたと思います。

最後に、「夢のなる森」の木に、自分たちが生み出した「夢の動物」を住まわせます。願いを込めてつくった動物を大切に木に吊るしていく姿を、新矢氏が優しく見守ってくださいました。

この活動は、その後も引き続き他校との交流へと展開しました。一緒につくる喜びを、今度は同じ一年生で「夢のなる森」に参加した三角山小学校と味わおうと、同じくロール紙に自分たちの「夢の森」を描き、その作品に加筆してもらうことにしました。美術館に飾られた「夢のなる森」を鑑賞する日時を合わ



せ、それより前に届けていた「絵のお手紙」の「お返事」をもらった子どもたち。ともにつくり上げ一体となって展示された「夢のなる森」を一緒に鑑賞し、自然な交流が生まれていました。帰校後、「絵のお返事」をみんなで鑑賞すると、「ほかの動物の横に友達ができる!」「私の描いた湖に魚が住んでる!」など、より素敵な作品になったことを喜びました。何よりも、自分が伝えたかったことが伝わったということを実感したことで、「表す」ことに「伝えよう」という気持ちももてるようになりました。

貴重な機会をくださった、連盟と近代美術館の皆様、そしてきんぶろ先生に感謝します。

夢のなる森

「アーティストが学校にやってきた」

札幌市立観北小学校 福島 由紀子

学校に作家活動をしているアーティストの方が来て、子どもたちと一緒に造形活動をしてくださる…それも国際的に幅広く活躍している Kinpro さんという方。作品はとて



ポップでかわいらしく子どもたちも喜びそうでホームページを開くと海外の美術館での作品がたくさん載っています。とてもすごい方の方です…。

道庁所在地美術館からいただいた「Born in HOKKAI DO」の企画、アーティスト・イン・スクールで私たちは学校に「夢のなる森」を Kinpro さんと創り出すこととなりました。場所は澄川西小学校の玄関前、全校児童が必ず通る玄関前ホールです。

Kinpro さんにいただいた一枚の手紙からこのワークショップは始まりました。

「Kinpro さんでどんな人なのかな。」

子どもたちは、まだ見ぬアーティストの Kinpro さんに思いを馳せながら、インターネットで調べます。総合の学習で学んだ検索の仕方を使って、やっ

とホームページを見つけました。なんとそれは英語のホームページで、国際的に活躍しているすごい人らしいとますます Kinpro さんへの思いがふくらみます。

作品だけの交流でなくアーティストの方と直接一緒に交流し造形活動ができるワークショップは、人にも、ものにも、そしてそのこと（できごと）にも同時に出会える素晴らしいチャンスだと思い、出会いを大事にしたい、特に Kinpro さんとの出会いを大事にしたいと思っていました。

そして迎えたワークショップ当日。まずは Kinpro さんの作品を解説つきでたくさん見せてもらい、その中で興味の出たことをいっばい質問しました。Kinpro さんと学年テーマでもある「心のあくしゅ」ができた子どもたちは、夢のなる森に思いを巡らせます。



「思ったことがかなう森かな。」

「夢は夜見る夢と昼見る夢があるんだよ。」

「みんなが仲良くなれる森がいいね。」

四年生が見る夢の森はやさしさにあふれ、一人一人が思い思いの夢をふくらませていきました。

玄関ホールに現れた夢のなる森…。作品には一つ一つ森へ来た人へのメッセージが書かれました。

学校で全校児童や来校者の目を惹きました。「夢のなる森」は美術館では他の二校と一緒に飾られ、より大きな森になりました。子どもたちと美術館を訪れた日には、Kinpro さんもうっしやっついて、再会を喜ぶ子どもたちの笑顔があふれました。

「個性的でアートな四季美術館」

の誕生

札幌市立円山小学校 宮田 珠世

「子どもは私たち大人の予想を時としてはるかに上回るほど豊かな感性を秘めている。」

その一端が見えたのは学芸員の方をお迎えして行った最初の鑑賞授業の時でした。本校と北海道立近代美術館との連携授業は、子どもたちが特別展「Born in HOKKAIDO」を鑑賞し、その中で感じたことをもとに自分のテーマを表現するというものです。学芸員の方と相談し、事前に教室で鑑賞の授業を行うことにしました。



展示会に

出品する十六名の作家たちの作品や、美術館の所蔵品の中から選んだものを画面で見ながらの鑑賞。音・かくれているもの・季節・時間・色・形・場所・作家の思いなど、



がしました。

一つの作品に対して子どもたちの見方や感じ方はその人数分あるといっても過言ではないでしょう。教室の仲間と交流することによって見方や感じ方がさらに広がり、子どもたちの発想や感性が豊かに広がっていくことも多くあります。そのような過程を大事にしながら、この連携授業を進めていきたいと考え、学芸員の方にアドバイスをいただきながら制作のテーマを「自分のお気に入りの季節」としました。

美術館で展示会を鑑賞した時、子どもたちの目はまさに作品にくぎ付けでした。目の前に次々と現れる本物の作品が放つパワーに圧倒されるような一瞬。このように色々なタイプの作品を一度に見る機会が

子どもたちは様々な見方で作品に親しんでいました。

時にはいい教師も楽しくなったり驚いたりしてしまうような発言もあり、子どもたちの豊かな感性に心揺さぶられる思い

そうそうないでしょう。しかし、子どもたちはそれぞれの感性を働かせ、まるで作品と、または作品を通して作家の方とお話しをするように鑑賞を楽しんでいきました。それが次第に憧れへと変わり、「自分もこんな表し方をしてみたいな。」という意欲へつながっていきました。

制作を開始するにあたり、この取組を「個性的でアートな四季美術館」と名付けた子どもたち。箱の中にイメージの世界を凝縮して表します。材料や技法も様々。しかし、どの子どもも自分が小さな芸術家になった気分を取り組んでいきました。また、図工室の掲示板を「おためし美術館」と名付け、制作の途中の作品を一度飾り、少し距離を置いて見ることでできるコーナーとしました。美術館で鑑賞したように、今度は友だちと互いの作品から伝わるイメージなどを語り合う姿が見られ、自分の表現をより高めていくきっかけとなることも多くありました。

美術館に展示していただいた写真を見た子どもたちは、どの子も「個性的でアートな四季美術館」の完成の姿に大きな満足感を感じることができたようです。



創造的な想像力を引き出す

美術鑑賞教育の力

札幌市立伏見小学校 湯 浅 大 吾

数年前から暗中模索の中、横浜美術館に連絡を取るなどして美術鑑賞教育に取り組み始めていた私にとって、二〇〇七年に道立近代美術館と連携したことは、大変大きな意味がありました。

学校との連携企画「実りゆく未来」の中で私は、美術館での鑑賞から作品を制作するというプログラムに四年生の子どもたちと参加しました。ほとんどの子が美術館に行ったことがないという実態から、美術館と子どもたちとの距離を縮めることから始めました。

五月 まず美術館から絵がプレゼントされたという設定で、当時の常設展の作品八十点余りを教室で投影し鑑賞しました。その後、A4版に印刷されたお気に入りの一枚に、びったりの細線をつくらうという実践をしました。

六月 これも当時の常設展に展示されている全長三十メートルに



も及ぶ八つの場面から構成された「道産子追憶の巻」

の四分の一に縮小した図版

を作成し、浅川学芸員から

寄贈していた

だくという設定を基に取り

組みました。

八枚の中から一枚をグルー

プで鑑賞し、絵のお話をつくり発表し合いました。お互いの発表を聞き終えた子どもたちは、絵がつながる

ということに気付き、並べ替える活動を通して改めて一枚の絵として鑑賞するとどんなお話が聞こえてくるかという活動が始まりました。

七月 浅川学芸員に招待していただいたという形で、子どもたちと美術館を訪れました。「先生、自分の絵がある。」「美術館のより自分の顔縁の方が絵に合っている。」など、この時点で美術館の作品は子どもたちのものになっていました。「小さな花の一つ一つにおしべまで描いてある。」「本物は色もつときれい。」子どもたちは本物のもつ魅力を十分に味わいながら、道産子追憶の巻の前で自分たちのつくった絵のお話を発表しました。

十月 再び浅川学芸員から招いていただき、美術館の宝庫、収蔵庫で掛け軸の鑑賞をしました。木箱



から作品が取り出され壁にかけられ、ゆっくりと紐解かれていくという雰囲気満点の演出の中、学芸員さんの巧みなギャラリートークに誘われ、子どもたちは作品の中で風や音を感じたのでした。作品が定山溪を描いたものだとは知った子どもたちは、自分たちも北海道の好きな風景を掛け軸に表現してみたいという実践に取り組みました。縦長の画面に絵を構成することは必然的に遠近の表現につながりました。

布や英字新聞など思い思いの材料で飾られた表装は、まさに現代版の掛け軸といえるものでした。

十一月 開館三十周年記念「ゴーン・イン・ホッカイドゥー大地に実る、人とアート」特別展の中で作品が美術館に展示されたことは、子どもたちにとって一生の思い出となるでしょう。

道立近代美術館との連携は、鑑賞が創造的な想像力を子どもから引き出すものだと思わせてくれました。

また、北海道は美術鑑賞教育にとって素晴らしい作品や人材が豊富であること、地域にある作品を対象にすることが生涯教育の面からとても重要であることにも

気付かせてくれました。

また、北海道は美術鑑賞教育にとって素晴らしい作品や人材が豊富であること、地域にある作品を対象にすることが生涯教育の面からとても重要であることにも

気付かせてくれました。

また、北海道は美術鑑賞教育にとって素晴らしい作品や人材が豊富であること、地域にある作品を対象にすることが生涯教育の面からとても重要であることにも

気付かせてくれました。

また、北海道は美術鑑賞教育にとって素晴らしい作品や人材が豊富であること、地域にある作品を対象にすることが生涯教育の面からとても重要であることにも

気付かせてくれました。

また、北海道は美術鑑賞教育にとって素晴らしい作品や人材が豊富であること、地域にある作品を対象にすることが生涯教育の面からとても重要であることにも

気付かせてくれました。



美術館と学校をつなぐ

連携授業を通して見えた成果と課題

札幌市立柏中学校 大高 雅子

「Born in HOKKAIDO」という企画展で、近代美術館とかかわる機会がやってきました。私は美術館と、中学校との連携授業を行うにあたって意識したことがあります。一つはこのような取組みを、今回だけにとどまらないものにしたということ。一年間の教育課程は過密であり、特別活動として扱う事は難しいので、単発の行事でなく必修の学習として扱う工夫が必要だったので。中学校は教科担任制をとっています。そこで、時間を調整し、二クラスと三クラスの二時間に分けて連携授業を行いました。

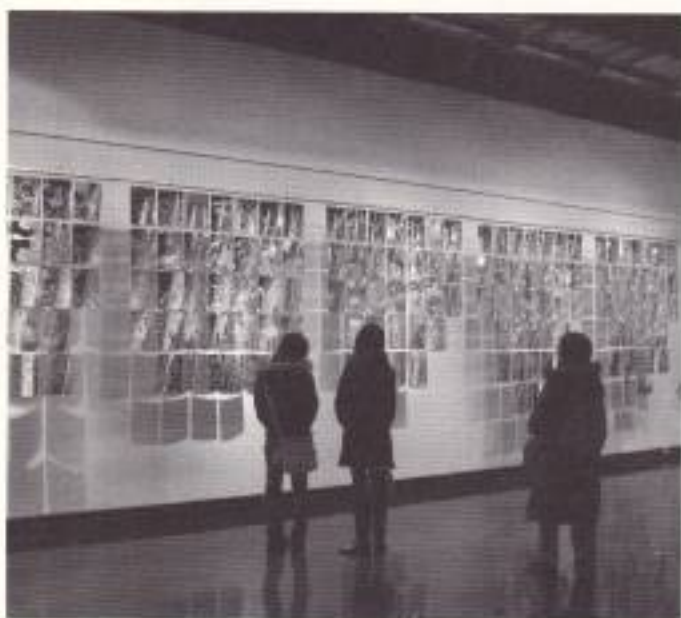


いました。学芸員の久米さんには、二回の来校をお願いしました。この方法だと、次年度以降も美術館の方と時間を調整しながら連携授業を行うことが可能です。同様の方法で、平成二十一年

度は、彫刻美術館との連携授業を実践することができました。二つめは、三学年を対象に選んだことです。三年間の集大成として、最高学年だからできる深まりのある表現を展示したいと考えました。

作品は、「ミラーアートであらわすわたしの北海道」を題材としました。生徒がイメージする北海道が、雪、自然、雄大さ、などが多かったことから白さや輝きをイメージする素材にしたいと考え、試行錯誤の結果、これまで教材として扱われたことのない表現方法としてミラーアートを考案しました。デザインの構想では、「わたしの北海道」をテーマに、まずは「Born in HOKKAIDO」と同時開催で展示されていた北海道と共に人生を生きた画家の作品を題材として対話型の鑑賞授業を行いました。学芸員の久米さんには、近代美術館所蔵の北海道美術史に基づく作品、小川原脩「雪」、三岸節子「摩周湖」など六作品を選んでいただきました。古典的な名画ではない作品を前に、子どもたちはどのような反応を示すのか未知の試みでしたが、その思いこみは見事に裏切られました。雪山の遭難者を描いた小川原脩の「雪」では、遭難者の向こうにそびえるニセコアンヌプリの頂上にかすかに見える青空を、人生の希望を意味するものにとらえました。三岸節子の「摩周湖」では、その深い緑と青から太古の地球と読み取りました。情報が無いからこそ、また、中学生生だからこそ表現できる深い読み取りであったのです。

久米さんの授業では、各作品の制作背景や北海道史とのかかわりについて話していただきました。北海道美術史は北海道開拓史を抜きに語れません。そ



れは、この地に生きた作者の人間形成と結びついているのです。子どもたちは自分と北海道の関係についてしっかりとイメージをつかむことができました。完成作品は、一学級ごとにリングでつなぎ、ゆれて輝くように展示しました。冬休み中ではありましたが、多くの生徒や保護者が来館しました。当初のねらい通り、三年間をしめくくる取組みとなったことが嬉しく思いました。

美術館との連携授業を、必修の時間として実施するための「制度の連携」の構築が、今後の課題ですが、小さな道筋をつけることはできました。芸術文化都市札幌に住む子どもたちの未来にとってこのような学習は意味を持つということ。そのことを強く実感できた機会となりました。

今を生き、未来を創る

札幌市立啓明中学校 平井 歩

この企画のお話をいただいた時、北海道の今を生き、そして未来を創る中学生に自分の故郷について作品制作を通して考えるよいきっかけになると考えました。また、中学生である今の自分たちをいろいろな人達に作品を通して知ってもらうよい機会だと考えました。

今回の取組みは近代美術館と共同で授業を進めていくという企画の性格上、全学級での授業展開が困難だったことから、選択学習の授業で、一学年・二十一名での取組みとなりました。

この題材では二つの視点で授業を展開しました。一つ目は北海道の過去・現在の作家と作品について鑑賞し、理解を深めること。

そして、もう一つはその鑑賞を生かして作品を制作することでした。

鑑賞は導入段階で北海道立近代美術館の学芸員・久米淳之さんにお手伝いを頂き、佐藤忠良、



本田明二、中江紀洋、安田侃、砂澤ビツ

キの作品を画像で紹介しながら、制作までのエピソードを交えつつ作家の思いと「かたち」と

のつながりについて学習をしました。また、砂澤ビツ

キの《樹華》の模型を生徒たちで制作する体験も行いました。

作品の制作については、一回目の鑑賞の授業を生かして木材で「北海道のイメージ」を抽象彫刻で表現する事に挑戦しました。木材を使ったのは素材的な北海道とのつながりを意識した結果でした。また、具象での表現ではなく生徒の発想をより幅広くしていく意味で抽象表現での制作としました。中学一年生にとって、木材を加工することも抽象作品をつくることもかなり難しい挑戦となりました。

生徒たちは、「北海道」から「自然」「大地」「生命」などにイメージを膨らませ、そこからアイデアスケッチを行い、木材加工をしていきました。実際に木を扱いなが



ら、スケッチでのイメージをさらに洗練させかたちを変化させていくことのおもしろさを感じていたようでした。

そして、でき上がった作品はどれも個性豊かにそれぞれの考えた北海道のイメージを「かたち」にしていきました。

制作後、『Born in HOKKAIDO』会期中に現代作家と小・中学校の児童生徒の作品を鑑賞することで、さらに多様な表現や考えを学びました。そして、一度目の制作と近代美術館へ出向いての鑑賞を経験した後、もう一度作品を制作しました。二度目の制作は絵画表現を行いました。今までの制作や鑑賞を通して培った「北海道」についてのイメージを別な形で表現していきました。

最後になりましたが、このような良い機会を与えてくださった北海道立近代美術館や北海道造形連盟、啓明中学校の教職員の方々に深く感謝申し上げます。



PMFとのコラボレーション

音楽とつながる

札幌市立曙北小学校 福島 由紀子

図工の学習と音楽…造形連盟の北海道大会でPMFとのコラボレーションの話をいただいたときには、あまりにも大きな話で正直言ってどうしていいかわからないという思いでいっぱいでした。

毎年夏の札幌に、世界各地から音楽家が集まって行われる音楽祭。さすがに本番のコンサートとのコラボレーションではないのですが、そのリハーサルと一緒になかでできないか、とのこと、期待はふくらむものの、実際にはどうしたものか…。

コラボレーションの前日には全校図工で、学校の体育館をみんなで楽しい空間につくりかえる活動を行います。その空間づくりを、ここ芸術の森アートホールにもってこることができればいいと考え、活動が始まりました。

子どもたちは、三メートルほどのガーゼをたくさん使って学校の



玄関ホールを遊ぶ空間につくりかえる活動を前年度に行っています。また、ガーゼの質感をうまく使ったライト作りも行っていました。

音楽を聴きながら、まずは、ガーゼを思い思いにつ

くっていきます。子どもたちの言葉から五年生の頃よりは具体物より抽象的な感覚に慣れていっているのがわかります。音楽の中の「くんな感じ」からこんな色にしたとか、この形になったとか話のですが、それが去年のような夏だから団扇だったり、火花だったりという具体物ではないのです。また、音楽の強さだったり、速さだったり…そこに合わせて、活動していく子どももいます。

子どもと話し合っ、体育館も、アートホールも室内であることから、ライトをうまく利用したいということになりました。ガーゼは自然光もよく通し、その感じも素晴らしいのですが、ライトがともったときに醸し出される一体感を子どもたちも去年の学習から感じていたことと思います。



ガーゼをかけていくものになるもの、ライトは向井先生があの里東中の子どもたちとつくってくれたものを一緒に利用させて頂きました。

前日、学校体育館での音楽とライトと子どもたちの作品のコラボレーションは、他学年の歓声と、その場にいる人々の一体感で素敵な空間をつくり出すことができました。

さて当日、子どもたちは布の可変性をうまく利用して、つくったガーゼを体に衣裳のようにまとうて会場に入りました。そして一緒に作品をつくってくれた中学生のみなさんや演奏してくれたPMFのみなさんと一体感をもってその空間をつくり楽しむことができました。

演奏後はPMFのみなさんからの言葉ももらって、充実感いっぱい、この活動を終えることができました。

「つよ」と「つよ」がしながるネットワーク ～TEAM HOKKAIDOのあゆみ～

ネットワーク担当部長 小林 友広
(札幌市立幌西小学校)

平成五年の旭川大会において、全道造形教育ネットワークの設立が承認されました。毎年、数回のネットワーク会議・HPの運営を行い、各支部・サークルとの連携を積み重ねて現在に至ります。その歩みと現状を紹介します。

1 趣旨

北海道の造形教育に携わる人や各地区の連携を深め強化していくために

- ① 各地区が日常的に連絡や交流するための名簿を年度毎に作成する。
- ② 各地区の研究や実践を交流する。
- ③ 北海道共通実践題材の開発を行う。
- ④ 北海道造形教育連盟ホームページの内容を充実させる。
- ⑤ 五年に一度見直される北海道造形教育連盟の研究主題について、各地区の意見を交流する。

以上の内容を推進するために年三回のネットワーク会議を開催する。

2 組織

全道造形教育ネットワークは、全道十八サークルのネットワーク担当者で本部ネットワーク担当者で組織される。

3 ホームページ・ メーリングリスト

北海道造形教育連盟としての情報発信としてホームページ（HP）を運営する。ホームページは、各地区サークルや他団体とリンクし、全国につながりのあるものにしていく。また、全道大会の情報や教育美術展の奨励賞作品に関してなど、全道各地から集まった情報を発信する場としていく。

同様に、北海道造形教育連盟の会員同士の情報交換の場としてメーリングリスト（ML）による発信も行っている。会員同士が、Webを通して自分の意見を自由に発信し合える場とする。
《現在の状況》

HPのアクセス数 ……九〇〇〇アクセス
MLの参加者 ……九八名
(二〇一〇・八・十 現在)
MLの参加者は随時受付ます。

HP、MLのアドレス
URL <http://hokuzou.kir.jp>
E-mail hokuzou.post@kagoya.net

4 今年度の重点と活動経過

《今年度の重点》
[TEAM HOKKAIDO] を含め
○ ネットワーク会議の充実
○ HP、MLを活用した情報発信・交流
○ 道内の美術館との連携事業・教育普及事業への参画

① ネットワーク会議を通して

年三回行われているネットワーク会議では各サークルの実践を交流したり、実施してきた作品展・研修会などといった事業の交流を行ったりしてきた。そこで、昨年度大きな話題になったこととして、各

サークルの研究主題と北海道造形教育連盟の主題との関連である。交流の中では「子どもたちの声が聞こえてきそうな作品」を生み出すための授業というキーワードが話された。各サークルの研究主題に関する情報がネットワーク会議の中で交流されたことに加え、MLを使って多くの人の声を聞くことで、新研究主題の構想を全道で創り上げていくことができた。

また、ネットワーク会議では「ひと」と「ひと」の結びつきに重点を置き、各地区サークルで行われた実践の報告だけではなく、成果や課題、地域性や学校の実態などといった、率直な意見交換を行っている。そして、互いの現状を交流することで、今後の方法を模索している。

②HP、MLによる情報交流

MLをより効率的に活用できるように、今年度写真を活用し、視覚的に活動を伝えるものにリニューアルした。また、MLに関しても、今まで以上にみなさんの声が発信しやすくなるように、使い方や便利さを伝えていきたい。今後、さらにMLを活用し公開授業の情報や各地区サークルでの事業・作品展などの様子も紹介したい。

③美術館との連携事業

二〇〇七年度に北海道立近代美術館で行われた「Born in HOKKAIDO」に北海道造形教育連盟として共同企画を行ってきたことをきっかけに本連盟と美術館との共同企画が本格的に動き出した。

子どもたちが美術館を利用して授業を行ったり、

学芸員さんを学校に招待したりと互いに共同で行うことによる教育効果を実感している。この流れは、全道各地で実践され大きな成果となっている。昨年度は、道立旭川美術館や釧路市立美術館でも中学校の美術部との共同企画を実施し、実践を積み重ねている。

今後、道内にある美術館と連携し教育普及事業に関する業務を行い、学校教育との連携を推進していきたい。

5 「1010「函館大会」の役割 〜TEAM HOKKAIDO のじれから〜

昨年度の旭川大会で行われた、夏のネットワーク会議で、全道で行われている各地区サークルの活動を紹介する場として、今年度から大会会場で、各地区サークルのブースを掲示していくこととなった。十八の地区サークルの活動を一度に紹介できる場、そして、ネットワーク担当者が集い、各地区サークルの実態や今後の方向性を情報交換するなど、とても大きな意味のある大会となる。

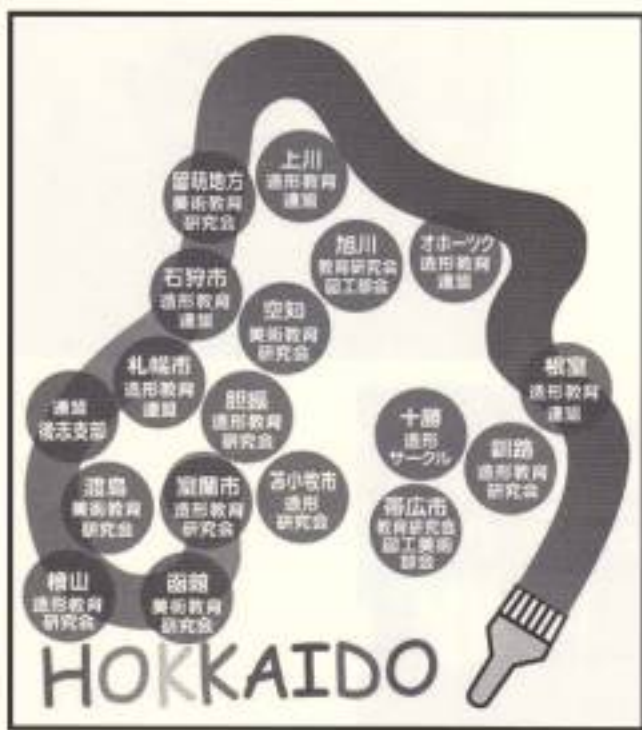
また、北海道教育美術展の奨励賞作品、百点も展示し、ご覧頂けるようになっていく。同様に、ネットワーク会議もたくさんの方にご参加いただけるような形式やプレゼンテーションの方法を考え推進している。

ネットワーク会議にお立ち寄りいただき、全道の活動の様子を一緒に支えていただける

とTEAM HOKKAIDOの輪が広がっていくと考えている。

6 HPについて

造形教育に関する情報を誰もが取り出し、一人でも多くの子どもたちが、造形活動のよさを感じていけるような環境づくりを目指しHP運営している。インターネットでアクセスすると、欲しい情報が蓄積されているようなHPを最終目標に、今後コンテンツの充実を図ってきたいと考えている。今年度は、次年度開催される全国大会に向けて、より見やすく使いやすいHPにリニューアルを行う。各地で行われている情報につながるHPを目指している。







第51回~60回

研究大会のあゆみ



連盟60年の歩み

年	回	開催地	テ　　マ	委員 会長	備　考
1949年			(札幌美術連盟組織 全道図画工作教育講習会)		
1950年	第1回		情操教育の一環としての本道図画工作教育の進展を図るため		北海道美術教育会と改称 第1回全道図画工作教育教育集会
1951年		札幌		第1代 野村 英夫	北海道図画工作連 盟創立
1952年	第2回	札幌	図画工作教育の新思潮である創造主義美術教育の諸問題について	〃	
1953年	第3回	旭川	美術教育の指導とは何か	〃	
1954年	第4回	函館	図画工作教育実践上の諸問題について	〃	
1955年	第5回	釧路	図画工作教育における学習指導上の問題の解明	〃	
1956年	第6回	札幌	造形教育において、つくり出す力を養うにはどうしたらよいか	〃	
1957年	第7回	室蘭	のぞましい造形教育における具体的諸問題について	〃	
1958年	第8回	小樽	図画工作学習によって児童生徒の人間性がどのように培われるか	〃	
1959年	第9回	帯広	新段階における造形教育のあり方	〃	北海道造形教育連 盟と改称
1960年	第10回	網走	本道における造形教育の実践を通して今後のあり方を見出そう	〃	
1961年	第11回	滝川	子どもたちの芸術性を育てるために私たちは何を与え何をすべきか	〃	
1962年	第12回	名寄	子どもが生活を見つめて造形的に高まっていくために私たちはどうしたらよいか	〃	
1963年	第13回	余市	子どもが生活を見つめて造形的に高まっていくために私たちはどうしたらよいか	〃	
1964年	第14回	札幌	子どもの創造能力とは何か	第2代 新妻 清	
1965年	第15回	稚内	子どもの創造能力とは何か	〃	
1966年	第16回	室蘭	子どもの造形能力とは何か	第3代 赤石 武士	
1967年	第17回	函館	指導の構築を具体化する	〃	
1968年	第18回	苫小牧	指導の構築を具体化する	〃	
1969年	第19回	札幌	造形能力は、どのような指導によって育てられるか	第4代 和田 芳郎	
1970年	第20回	旭川	ゆたかに生きる子どもの造形能力をどう育てるか	〃	
1971年	第21回	札幌	造形能力は、どのような指導によって育てられるか	第5代 伊東 将夫	
1972年	第22回	帯広	未来に生きる子どもの造形教育 (生活に根ざした造形教育をどう高めるか)	第6代 高橋 栄吉	
1973年	第23回	室蘭	未来に生きる子どもの造形教育 (たしかな表現力をどのように育てるか)	〃	
1974年	第24回	美幌	未来に生きる子どもの造形教育 (ひとりひとりの子どもの表現力をどう高めるか)	〃	第1回 教育美術展
1975年	第25回	江別	未来に生きる子どもたちの造形教育 (自ら創り出す力をどう育てるか)	〃	
1976年	第26回	岩見沢	未来に生きる子どもの造形教育 (すべての子どもに造形のよろこびを)	〃	第1回 立体造形展
1977年	第27回	札幌	みずみずしい中味でしなやかな子どもを育てる造形実践	〃	第30回全国造形教育 研究大会をかねる
1978年	第28回	函館	みずみずしい中味でしなやかな子どもを育てる造形実践 (すべての子どもが生き生きとくむ学習)	第7代 辻 悦平	
1979年	第29回	旭川	生き生きとしたゆとりのある子どもを育てる図工美術教育のあり方	〃	

年	回	開催地	テ　　マ	委員 会長	備　　考
1980年	第30回	苫小牧	ひろがりと深まりの造形教育を求めて	第7代 辻 悦平	
1981年	第31回	釧 路	創り出す心をよびおこす造形教育	〃	
1982年	第32回	室 蘭	見る、知る、感ずる、そして創りあげる喜びを	第8代 遠藤 久男	
1983年	第33回	留 萌	生活とふれ合い、創る心のひろがりを求める造形活動	〃	
1984年	第34回	札 幌	知恵とエネルギーをわきたたせる造形活動 (わきたつ発想・たしかな表現・つくりだす喜び)	第9代 種市誠次郎	
1985年	第35回	函 館	知恵とエネルギーをわきたたせる造形活動 (心をこめてつくりだす子どもを育てる)	〃	
1986年	第36回	旭 川	子どもの心をゆり動かす造形教育 (つくる心のひろがり求めて)	第10代 森川 昭夫	第39回全国造形教育 研究大会をかねる
1987年	第37回	紋 別	子どもの心をゆり動かす造形教育 (表現のよろこびにひたる子どもを育てる)	第11代 松島 輝男	
1988年	第38回	滝 川	子どもの心をゆり動かす造形教育 (ひたむきに創る心を育てる)	〃	
1989年	第39回	帯 広	子どもの個性的表現を授ける造形教育の充実 (君はいま創造のとりこに)	第12代 金井 秀男	
1990年	第40回	苫小牧	広がり、深まり、そして感動を！	〃	
1991年	第41回	札 幌	子どもの個性的表現を授ける造形教育 (子どものつくる喜びをひらく)	第13代 佐々木理温	
1992年	第42回	函 館	子どもの個性的表現を授ける造形教育の充実 (感動、そして創造する喜びを)	〃	
1993年	第43回	旭 川	思いをあたため心をはずませる創る喜びを	第14代 鹿嶋 健	
1994年	第44回	釧 路	心ときめく、創造の喜びを求めて	〃	
1995年	第45回	千 歳	豊かな心と確かな力をはぐくむ造形学習を	第15代 船着 明弘	
1996年	第46回	札 幌	～造形=愛感美遊創 in 札幌～ 自らの心を拓く造形学習の在り方	第16代 白井 園毅	
1997年	第47回	根 室	感性から発し躍動する力を育む造形学習を！	第17代 吉田 俊男	
1998年	第48回	留 萌	楽しさにひたり伸びやかに表す造形活動と共感し寄 り添う指導	第18代 芝木 秀昭	
1999年	第49回	オホ ツク	オホーツク発 思・創・喜・感 ～一人ひとりが創造的な喜びを実感するために～	〃	
2000年	第50回	函 館	心の風景(ビジョン)の発信を！ ～豊かな自分づくりを生かす想創活動～	〃	
2001年	第51回	札 幌	風よ、大地よ、夢よ、北からはじまる造形の未来 ～(いま) (ここ) (わたし) を基軸にして造形の未来をつくる	〃	第54回全国造形教育 研究大会をかねる
2002年	第52回	帯 広	広い大地に紡ぐ夢 豊かな感性をはぐくむ造形教育	第19代 藤井 正治	
2003年	第53回	空 知	つくる喜びを実感できる造形教育	〃	
2004年	第54回	旭 川	豊かに感じおもしろさをふくらませあらかず喜びを 生の造形教育～身体で感じ、感性を磨くための出会いを求めて～	第20代 富田 泰	
2005年	第55回	函 館	めざめる感性(こころ)きらめく個性(かたち) 地域空間がいざなう造形活動のひろがり	第21代 今 裕子	
2006年	第56回	札 幌	楽しさあふれ、確かな表現を実感する造形教育	〃	
2007年	第57回	釧 路	「できた!」「いいね!」の喜びが息づく時間を求めて ～つくる喜び、感動する心をつなげていく造形教育～	〃	
2008年	第58回	いしかの 北広島	豊かな心と確かな力を育む造形教育を！	第22代 菅原 清貴	
2009年	第59回	上川・旭川	身体で感じ・心はずませ・創造する喜びを ～「いま・ここで」「つなげる」造形教育を求めて～	〃	規約改正により委 員長を会長に改称
2010年	第60回	函 館	創造!ときめき! 実感! ～感性と知性の出会い 心うるおす造形活動～	〃	

第51回 札幌大会 第54回 全国造形教育研究大会北海道大会 in 札幌



日時 二〇〇一年九月六日・七日・八日
会場 なかのしま幼稚園
札幌市立幌南小学校
札幌市立三角山小学校
札幌芸術の森
道新ホール



2001. 9. 6日7日8日
第54回 全国造形教育研究大会北海道大会 in 札幌
第51回 全国造形教育研究大会

研究主題

〈いま〉〈ここ〉〈わたし〉を
基軸にして造形の未来を
つくる

『風よ、大地よ、夢よ、北から
はじまる造形の未来』

◆喜びに満ち溢れる「教室」を基点として、
一人一人の子ともと教師とが共に創造の
喜びを分かち合う心豊かな営みを公開
する。

【幼・小・中・高等学校授業公開、
課題別分科会】

◆新学習指導要領実施を次年度に控えて、
図工・美術教育のあり方を地に足つけて
考える方向性を探る機会とする。

【講演者と共に考える】

◆児童・生徒ともに、実際にものをつくる
ことを通して共に喜びを感じ分かち合う
機会とする。

【芸術の森の自然の中でワーク
ショップ】

◆今の造形教育で問題となっている事柄を、
実践を交えて大いに話し合う。

【パネルディスカッション、実践
バザール】

1 研究主題について

現代、「わたし」という存在は不確かなものとなっている。そして、その「わたし」というものは「わたし」が感じた記憶によって形づくられている。したがって、感じることを重視した教育が必要なのである。今大会は、仮想の体験ではなく、直接会う、直に見る、手で触るといった直接体験こそを重視した大会と位置付けた。私たちは、人やもの、自然などとの直接の体験、豊かなかわりこそが「いま」(「ここ」)であり、その中で新たな「わたし」を見出し、出していくことが目指すべき造形活動と考え、今大会を開催した。

2 研究主題の具現化

① 『感じて』『つくって』『ひらく』造形活動

実際の授業で目指すべき、「いま」(「ここ」)「わたし」を基軸としながら子ども、教師の未来を見据えた授業を構築するために、「感じてつくる」ことで「わたし」を「ひらく」造形活動という授業像を設定した。研究主題と関連させて、「いま」「感じてほしいこと」、「ここ」で「つくってほしいこと」、「わたし」に「ひらいてほしいこと」を授業構築の柱とし、各研究授業を「造形ボックス」として表にまとめてきた。私たちは「ひらく」という言葉に、題材の目標や美的価値にとどまらない、今までのと違う世界に降り立った「わたし」による表現という意味を持たせた。それは子どもの側からすると、

「高まりの自覚」とも言えるものであり、自己有能感や自己の可能性の広がりを実感するものと考えた。同時に、それは私たちの授業評価の重要な観点ともなった。

② 『五つの扉』

私たちは、子どもの「ひらく」姿を生むために、具体的な造形活動の観点となり、その後の分科会の切り口となる『五つの扉』を設定した。各扉にはキーワードを設定し、子どもが「ひらく」姿を具体的に検証した。

◆ 「遊びと造形」→【ひたる】

自分の世界にたっぷりとひたっているか

◆ 「もの・材料(環境)と造形」→【かかわる】

繰り返すものにかかわり、つくりつづける姿が見られたか

3 研究会から

◆ 「くらしと造形」→【うるおう】

自分の生活をより豊かにしていこうとする姿が見られたか

◆ 「コミュニケーションと造形」→【わかちあう】

互いに理解し合い、心を伝え合う姿が見られたか

◆ 「個性と造形」→【むきあう】

主体的に問題解決に向かうことから、新しい「わたし」に気づく姿が見られたか

これらのキーワードが表す子どもの姿を生むことで、「今までとは違った世界に降り立った「わたし」の表現による夢や願いが実現された状態」、「つまり、「未来に向かって生きるより豊かな「わたし」づくり」を目指したのである。

◆ 遊びと造形、もの・材料(環境)と造形(幼稚園分科会)

授業者【なかのしま幼稚園】

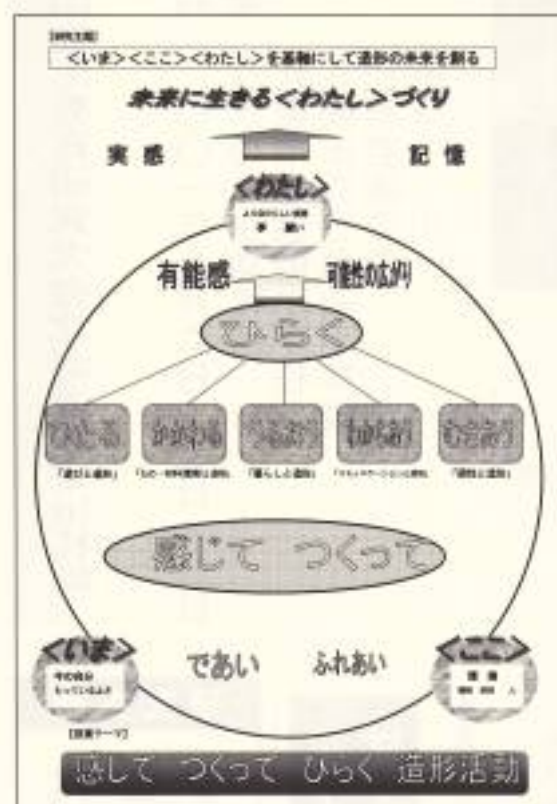
横山 美恵、鳥羽 和美、
関口 真美、小野 旬子、
藤原 朋美

提言者【大地太陽幼稚園】

中本真美子、平間 直樹

○ 分科会から

・幼児が主体的に直接かかわれる環境作り、教師の一人一人に寄り添った指導の重要性を再確認したい。



◆遊びと造形〈小中合同分科会〉

授業者【札幌市立幌南小学校】

沼田 玲子

【札幌市立新設中学校】

楢野 衣江

提言者【旭川市立光陽中学校】

川原 潤

○分科会から

・小学校と中学校の違いがあるが、泥んこ遊びのように、行為そのものを楽しむことを出発点とし、小中の連携を深めていきたい。

◆もの・材料（環境）と造形〈小中合同分科会〉

授業者【札幌市立山鼻小学校】

齊藤 志保

【札幌市立あいの里東中学校】

豊田 ゆき

提言者【函館市立旭岡小中学校】

瀬本 伸幸

○分科会から

・素材と出会うことで子ども自らが気付く、かわるなど、教師の素材へのこだわりが豊かな発想や感性を培うのではないか。

◆暮らしと造形〈小中合同分科会〉

授業者【札幌市立新陽小学校】

湯浅 大吾

【札幌市立北都中学校】

西川 紫葉子

提言者【深川アートホール】

渡辺 貞之

○分科会から

・暮らしの中に大人の価値観が入ってくるのはよくない。子どもが内発的に考えられる教材開発が必要である。

◆個性と造形〈小中合同分科会〉

授業者【札幌市立幌南小学校】

能登谷治恵

【札幌市立柏丘中学校】

宮崎 亨

提言者【恵庭市立和光小学校】

寶島 裕二

○分科会から

・技法に力を入れすぎると子どもが図工嫌いになることがある。技法がないことで失敗することはないと考えると、子どもの思いが広がり、それが表れる題材をつくっていくことが必要である。

・図工・美術では、子どもの感覚をどう引き出し、どう価値づけられるかが重要である。

◆遊びと造形〈小学校分科会〉

授業者【札幌市立四山小学校】

小林 充裕

授業者【札幌市立発寒小学校】

八田 博之

提言者【女満別町立大成小学校】

里見 貴史

○分科会から

・もっと「遊び」というものをとことん突き詰めていかなければならない。

○参加者の声

・教師が体験させたかったことは何なのかというところが見えてこなかった。

・つくりながら考え、考えながらつくるという流れがよく見えてよかった。

◆コミュニケーションと造形〈小学校分科会〉

授業者【札幌市立三角山小学校】

藤森 久美

提言者【札幌市立桑園小学校】

福島由紀子

○分科会から

・思いとは、自分との対話、そして相手にどう伝えるかである。

・造形の始まり、一番大切なものは、感じ取り方である。

○参加者の声

・コミュニケーションの中に鑑賞の能力が働いている。

◆コミュニケーションと造形〈中学校分科会〉

授業者【札幌市立大倉山小学校】

佐藤 真史

【札幌市立宮の森中学校】

高橋久美子

提言者【札幌市立札幌北中学校】

中川原信生

【札幌市立東栄中学校】

白崎 博

○分科会から

・本当に面白いもの、楽しいものを与えることが大切である。

・総合的な学習などを活用して、コミュニケーションのとり方の計画的な学習が必要である。

○参加者の声

・コンピュータの活用によって、画面を通して自分の内面との葛藤が生まれる。さらに他人からのヒントが得られ、また教えてあげられる。そこに人と人とのコミュニケーションが生まれるのではないか。

◆個性と造形へ中学校分科会

授業者【札幌市立山鼻中学校】

小澤 香子

提言者【北広島市立大曲中学校】

山崎 正明

○分科会から

・理想を生かした「本物を鑑賞する素晴らしい授業」でお互いに高まりがあった。二十一世紀型の授業であった。

・新教育課程を考える上で大変とまどった提言で、参考になった。

○参加者の声

・「グリグリネズミみたい」というような、その子ならではの感想が聞けてよかった。

◆個性と造形へ高校部会

授業者【札幌市立丘珠高等学校】

本田 勝哉

提言者【札幌市立新川高等学校】

吉岡 隆

【北海道音威子府高等学校】

平田 昌也

○分科会から

・抽象の導入としてとてもよい授業であった。

○参加者の声

・自己理解、自己発展が自己実現につながる。

・地域を含めたコーディネーターとしての役割もこれからの我々の課題である。

4 講演会・パネルディスカッションから

講演会は、文部科学省視学官である遠藤友麗氏に「夢と感性と創造性をはぐくむ図工・美術教育」という演題で、心豊かに生きる美術教育の教科性についてお話をいただいた。学校教育における美術の必要性を、「三つの教科性」を中心に論理的にわかりやすく説明してくださった。

パネルディスカッションは、岩崎由起夫氏（大阪教育大学助教授）、水島尚喜氏（聖心女子大学助教授）、金井秀男氏（北海道造形教育連盟顧問）をパネラーに、村瀬千穂氏（北海道教育大学教授）をコーディネーターとして行われた。

テーマは、「未来に向けて、自分を『ひらく』子どもの姿とは？」であり、札幌大会について、造形教育に関わる実践やその課題について、造形教育の今後の方向と教科性、図工美術教育を啓発していく

ために、三つの柱のもと活発なディスカッションが展開された。水島先生からは、授業論、研究テーマ論という点では、子どもの姿にシフトしようとする

姿勢が見られ素晴らしいが、「五つの扉」については、数が多くなり分かりにくくなる、との指摘を受けた。岩崎先生からは、子どもの持っている「聞いていく力」を重視する姿勢を、金井先生からは、共同で仕事ができるような素地を造形学習の中で取り入れていくべき、ということを教えていただいた。

パネルディスカッションは、「いいテーマはいろんな所から出ている。これからは、どう実行するか、どう方法論化するか、どう見える形にするか、という時代に入ってきている。つまり、現代は実行の段階ということだ。」という方向に集約されていた。コーディネーターの力であると思う。

5 終わりに

詳しく紹介できなかった芸術の森での「ワークショップ」「実践バザール」を含め、開催した我々が一番学んだ研究会となった。幼稚園、小学校、中学校、高等学校、と異校種の教師たちが一つの課題別分科会で学んだ意義は大きく、その後の北海道の理論作りや教師のネットワーク作りに多大な影響を与えたと思う。一つの都市で大会を請け負うのではなく、全道各地区の代表で北海道大会に取り組み、という現在の連盟の形は、本大会がその出発点であったのかも知れない。

第52回 帯広十勝大会



大会シンボルマーク

日時 二〇〇二年七月二十七日
会場 帯広市立広陽小学校

第52回

帯広・十勝大会

豊かな感性をはくくお造形教育

広い大地に紡ぐ夢

全道造形教育研究大会

2002・7・27(土)

帯広市立広陽小学校

研究主題

豊かな感性をはくくむ
造形教育

大会テーマ

広い大地に紡ぐ夢

1 研究主題について

二〇〇二年、新しい学習指導要領実施の中で、小学校の図工科では、中高学年の時数削減とともに、高学年に造形遊びが導入された。中学校の美術科でも同じように時数の大幅な削減と、指導内容の変更が求められている。それを受けて、各学校では教材や制作方法についての研究や、指導方法の研究等、創意工夫のもとに造形教育の実践がされている。このような状況からみて、ここ数年は、造形教育の大きな転換期であるといえよう。

しかし、たとえ作品制作にかける実質的な時間が少なくなったり、作品の規模が変わったとしても、造形教育自体の本質が変わることはなく、人間形成に関わる重要な教科であることは確かなことである。また、この時期だからこそ、私たち造形教育に関わるものが、よりこの教科を大事にし、熱意をもって、研究・実践していかなければならない。そして、この教科はその成果が作品という形となってあらわれることはもちろんだが、子どもの表現の願いや思い・創作過程・心の成長など形にあらわれないものが数多くある。私たちは、そこにもしっかりと目を向け、くみ取っていくことが、大切だと考えている。

また、そのためには、指導する側の意識の改革や発想の転換も必要である。

ここ数十年間の間に人々の生活は大きく変化し、たくさん情報や物にあふれている。ややもすると、本当に必要なものや、大切な物を見失ってしまいがちである。このような中で子ども達も少なからず大きな影響を受けている。だからこそ、造形教育には大きな役割がある、造形教育だからこそ出来る事があるのではないだろうか考える。

今回の研究会では、北海道造形教育連盟の研究主題「心豊かに未来に生きる造形教育」をもとに、豊かな感性をたくむ造形教育を研究主題に設定し、帯広十勝における過去数十年の研究の積み上げのもとに、本大会テーマを「広い大地に紡ぐ夢」とした。この広い大地に透き通った空気が、さわやかな青空、その光輝くさまは、ともすれば、私たちの内なるものを呼び起こしてくれる力を持っている。その中にある様々な素材にある題材を、横糸とし、造形の不変である基礎・基本を縦糸とした子ども達の創造活動は、十勝平野のバッチワークのように様々な色合いの織布として、織りなされていく。このようなことをイメージして、「みる」・「つくる」・「いかす」を授業テーマに創造活動のあり方について考えてみたい。

みる

見る・観る・ふれる・
感じる・想う・空想
する・遊ぶ…

つくる

作る・造る・創る…

いかす

生かす・活かす・伝
える・つなげる・共
感し合う…

2 研究テーマの具現化

みる

（見る・観る・ふれる・感じる・想う・空想する・遊ぶ…）
子ども達が様々な物に出会う時、五感を通して「みる」事を行い、新しい発見をして行く。教師はその支援者として人や物、自然、伝統、地域の良さ等と子ども達をつなぐ。出会いのコーディネーター。となりたいたく。

つくる

（作る・造る・創る…）
どの子も自信を持って取り組み、つくる喜びや、つくりあげた時の満足感、成就感を味わう事ができたらと考える。さらに、「つくるの大好き！」「かくの大好き！」という思いが教室にあふれる瞬間をつくりだしたい。

また心の教育にふさわしい「手づくり」の良さについて考えていきたい。

いかす

（生かす・活かす・伝える・つなげる・共感しあう…）
造形活動は題材によって様々な活かし方がある。心の中で活かされる面があれば、実生活の中で、直接的に、あるいは間接的に活かされていく事もある。さらに鑑賞を通じて、共感し合う、互いを認め合い再発見していく事を含め、造形教育が生活に浸透していき、生涯にわたって活かされていくものであってほしい。これらの「みる・つくる・いかす」という事が相互に関わり合い、最終的には「自分大好き！友達大好き！」という、自他ともに認め合う事のできる、共生の意識を育てていく事につながっていくのではないだろうか。

3 研究会から

夢1分科会

つくるのだいすき、かくのだいすき

発想を広げ、豊かな心をはぐくむ造形活動

授業者 帯広第二ひまわり幼稚園

三好 花、服部 正

「親子で土踏を作ろう」

帯広市立明和小学校

佐々木 忍

「こんな〇〇あったらいいな」

授業者 十勝町立佐倉小学校

大坪美千代



大地1分科会
「ふれて、かんじて」



人分科会

「日本画の制作
自然の造形に学ぶ」

「みたこと 感じたこと」

幕別町立白人小学校

高島智哉樹、金岡 陽子、笠谷 和子

「どうさんにのった ぼく・わたし」

◆分科会のまとめから

幼稚園、小学校低学年の授業実践をもとに、遊びながら膨らむイメージを具現化する過程でわき上がってくる自由な発想を広げる工夫や達成感・充実感を味わえるための手だてを模索しました。これからの授業は、一人一人が違ったこと・好きなことを選択していく事が大事になり、これが発想を広げ豊かな表現につながる。そして最終的には人の作品を見た時にその人の思いを受け止めていける豊かな心を育てていく事が大事と、分科会でのまとめがなされました。

大地1分科会

身近な自然とのふれあい

「五感にひびく造形活動」

授業者 上士幌町立北門小学校

野原 圭介

「ふれて、かんにて」

提言者 帯広市立森の里小学校

中塚 雅春

「とうもろこし、とったよ」

「収穫した喜びを版画で表現する」

北海道教育大学附属釧路小学校

中島 健朗

「ざいりょう物語」

「学校の森で見つけた素敵な宝物」

◆分科会のまとめから

みて、きいて、ふれて、感じた新鮮な喜びや感動を、規制の枠にとられず感じたままに自由な気持ちで表現する醍醐味を味わう事で、子ども達の創造力が養われると考え設定された分科会です。「造形活動を楽しんでほしい」「発想や構想のエネルギーを高めたい」「創造のエネルギーを持たせたい」という願いと共に、北海道・十勝の雄大な自然の中で育つ子ども達の五感を揺さぶり、表現活動への意欲を高める題材とは何か、また、図工科の学習活動を通して、子ども達のどんな力を育てていくのかを明確にしていこうという意見がまとめられました。

夢2分科会

「空間(光)を感じる」

「創られた夢の世界に、新たな自分を探す造形活動」

授業者 帯広市立若葉小学校

阿部 飛鳥

「心の中のこそう『思い出の光の森』」

提言者 帯広市立啓北小学校

佐々木智穂

「どの子も満足できる物語の絵の指導」

「『白羽のツル』で空間のイメージを広げる」

滝川市立東小学校

中澤 孝仁

「共有空間のデザイン」

◆分科会のまとめから

光に演出を加えた空間づくりや、個々の作品を展示したふれあい空間のデザイン、基礎基本を重視した空間表現を取り上げ、表現する喜びを他と分かち合い、自らが課題意識を持ち、主体的に取

り組むための支援や課題設定のあり方を考察しました。

図画工作に求められている物は何かを考えた時「喜ぶ」「楽しい」「豊か」がキーワードになるという事が分科会では打ち出されました。個々の思いを大切に、その思いを表現した喜びを味わわせる事。また、活動そのものが楽しい事が一番大切になる事。さらに、その活動を通して、豊かな情操を育てる事の重要さを確かめた分科会でした。

大地2分科会

「素材のよさを見つける」

「素材からふくらむ発想を生かす造形活動」

授業者 幕別町立幕別中学校

嵐田美智子

「ぬくもりを感じて」

提言者 帯広市立帯広第一中学校

上田 美紀

「楽しい空間」

「流木を生かしたオブジェの制作」

旭川市立東明中学校

渡辺 万紀

「様々な素材を使ったランプシェードづくり」

◆分科会のまとめから

本分科会で取り上げられた題材は、自然素材に制作者の意図を加える事で、素材の持つ素材さと人のぬくもりが感じられる「あたたかい作品」に生まれ変わる事に着目した内容でした。自然の形や色、材質感の中にある心とまぜる美に気づかせるとともに、素材と人の融合によりつくり出され

たものが、生活に果たす役割についても感じさせることを目的にした題材の価値について話し合われました。

生徒のがんばりが表に出る場面づくり、指導者と子どもの信頼関係の大切さ等、言葉や行動での励ましの姿勢の大切さについて話し合われました。また、作った物にいかにか愛着を持たせるか。大切に作り、大切にするという事。実用性のある物を作る事の難しさとその重要性等も話題となりました。

人 分科会

～現在・過去・未来・人から人へ

～地域や伝統の文化を未来に発信する造形活動～

授業者 帯広市立川西中学校

加瀬谷真理

「日本画の制作・自然の造形に学ぶ」

北海道立帯広柏葉高等学校

村上 陽一

「私のカブセル」

提言者 札幌市立手稲中学校

石川 早苗

「外に出よう、感じよう!」

芽室町立上美生中学校

白戸 さゆみ

「現代アートといふものをしてみむとて」

「現代アート展「デメーテル」に触発されて」

◆分科会のまとめから

地域や伝統に根ざした多様な表現技法の学習。また、新たな文化の歴史を刻む「現代美術の開拓者」への気づきなど、過去と現在、未来をつなぐ題材が展開されました。

日本人のアイデンティティ、現代アートと環境アート、デジタルとアナログ等、時代の変化とともに多様化する表現方法と造形表現の広がりを話し合いながら、伝えていくもの、生み出していくもののそれぞれの価値について話し合われた分科会でした。

また、中学校美術としては「時数確保」という大きな課題が話し合われた分科会でもありました。

4 帯広・十勝大会を終えて

第五十二回帯広十勝大会実行委員長 齊藤 隆博

振り返りますと、第五十二回全道造形教育研究会帯広・十勝大会は十三年振り四回目の開催でした。そのため、美術関係者一同喜びと共に身の引き締まる思いで準備に取り組んだ事を懐かしく思い出します。お陰様で全国大会札幌大会の翌年にもかかわらず全道各地から四百名近い参加者を得る事が出来ました。

当時、私たちは帯広、十勝に点在する地域素材を活用し子供たちの自主性や創造性を育てる授業をどのように編成して行くかの願いのもとに、本大会テーマ「広い大地に紡ぐ夢」、研究主題を「豊かな感性を育む造形教育」としました。そのわらいは生活環境の相違、そして校種の特性を踏まえて、造形教育のあり方を探ることでした。

また、特色としては、初となる幼稚園の授業に父母参加型の授業を取り入れ、幼稚園、小学校、中学校、高校、さらに複式校の授業を帯広市立広陽小学校1校で授業公開を実施したこと。分科会も「夢1、夢2、大地1、大地2、人」としました。

具体的には遊びの要素を重視した造形活動、地域に目を向け、その特性を生かす造形活動、五感に響く造形活動、自分探しに向かう造形活動、素材から膨らむ発想を生かす造形活動、地域や伝統文化を未来に発信する造形活動と、大切にしなければならぬ要素を取り入れた授業実践をいたしました。その結果、参加された先生方から、しっかりと地域性に結びついたものが多い。帯広十勝の先生方の熱意あふれる意欲的な実践と新鮮な発想による授業であった。などと評価され、本当にやってよかったという気持ちで一杯になったことを記憶しています。

また、美味しいワインと十勝の自然を満喫していただき、ワイン城からの素晴らしい夕日を眺めながらの充実した交流会を実施することが出来ました。翌日は、美術館や国際現代アート展の視察も企画した大会でした。その時お世話になった連盟役員の皆様や参加された先生方に深く感謝とお礼を申し上げます。近々大会が開催予定と聞きますが、是非帯広十勝の造形教育と美術文化や自然に再会していただけますようお願いしております。



夢1分科会

「こんな〇〇あったらいいな」

第53回 空知大会



大会シンボルマーク

日時 二〇〇三年七月二九日
会場 滝川市立東小学校

第53回全道造形教育研究大会 空知大会 第40回全空知子どもの作品を語る会

(つくる喜びを実感できる造形教育)



会期 2003年7月29日(水)
会場 滝川市立東小学校

1 研究主題について

数枚の子どもの作品がある。私たちの意図が映し出されている。これでよいのか…と不安を持つ。それは子どもとの制作活動を通じて、誰もが考えるところであろう。

どんな本を読んでも、目の前の子どもたちに当てはまるかどうかが見えてこないことも多い。

描かれる、創られる子どもたちの作品の中に、それぞれの溢れる思いを教師たちが語り、認識し、そこからまた新たな発見と課題を見出し、明日の子どもたちとの関わりにつなげていくものとして大事にされ始めた。

こうして、「空知美術教育研究会」(以下「空美研」)が生まれ、過去三十九回開催されてきた。様々な立場・年齢で構成される空美研は、子どもの作品を中心に据えることで、参加者それぞれが同じ目の高さで実践を深めてきた。

現在もそのスタイルが継承されている理由として誰もが参加でき、純粹に子どもを語ることができること。そしてそこから、教師と子どもたちの関わりがくっさりと浮かび上がることによって自身を認識し、日常私たちがとらえる感動、迷い、疑問などを率直に交流しあい、そこから多くのことを学び取ることができるといふ実りある会であることを物語っている。と自負している。

それは、個々人の意欲的な自主研修と磨きあいの場所であり、図工・美術に携わる教師として、また、子どもの教師としての自己確立の場と認識するところでもある。

そして、専門性を磨きあう場として、未来を生き抜く力を持つ子どもに育てるために何を学ばせるかを実証し、より確かなものにするものでもある。

全道造形空知大会を開催する上で、この数年間の「語る会」から、多くのなかまが意識し大切にしていたことや課題に立ち返り、子どもたちに必要な力が何かをまとめ、その上で研究テーマを設定した。

2 研究主題の具現化

本来、造形活動は理屈抜きに楽しい事であるはずである。自分たちの生活の中からテーマを見いだし、自分なりの表現方法を選択し、納得がいくまで制作活動にとりくみ、達成感を味わう、そうした造形活動の過程の中にこそ図工・美術として学んでいく大きな価値があるはずだし、そうした造形活動を支援する上での「多様性」こそ重要であると考えた。

人と人とのコミュニケーションを図る場合、その都度便利な方法をとれば良い。しかし、人と人が直接「接する」機会が失われると、対象の「存在」意識は大きく変化することが考えられる。物や人と直接接するということは自然なことであるが、今の子どもからは失われつつあることを認識しなければならぬだろう。また、今の子どもにとって五感を通して見たり聞いたり判断したりする機会が大変重要であると考えた。

以下の現状分析に基づき、現在「図工・美術」に求められている題材（教材）の選定について大会テーマを以下の三つのキーワードにまとめてみた。

① ふれあう

作品や対話を通して人（教師・他の生徒）と接し、お互いを理解し認識しあう、あるいは物と直接接し、さわり、育て、加工し、特性を理解するといった実生活・実体験を大切にしたい題材（教材）を選定し、子どもにも実感を得た理解をさせ、人間相互が想いを伝えあう行為を大切にしたい。また、人（自己身近な人）をテーマにすることで、自己の内面や他人の人間性を探求し、より深く理解するとともにお互いの存在を認め合うことにつながる。このような活動が単なる空想にとどまらず、より深い関係を築き上げると共に、そのものの本質をより深く探求していくことにつながる。また、実体験からわき上がったナイーブな心情を大切にしたい。

② さぐる

素材や表現方法を試行錯誤しながら葛藤し、自己決定し、想いを巡らせる行為を大切にしたい。また、ある程度抵抗感のある「物」を素材として選定することで、より上記の活動が深まるものと考えられる。素材の抵抗感がある程度強くなれば、その素材を自分の意図する形に加工していく過程で創意・工夫をしていかざるを得ない。また、そうした活動の中で素材の特性を知り、その存在感をより確かなものにしていくことができると考える。

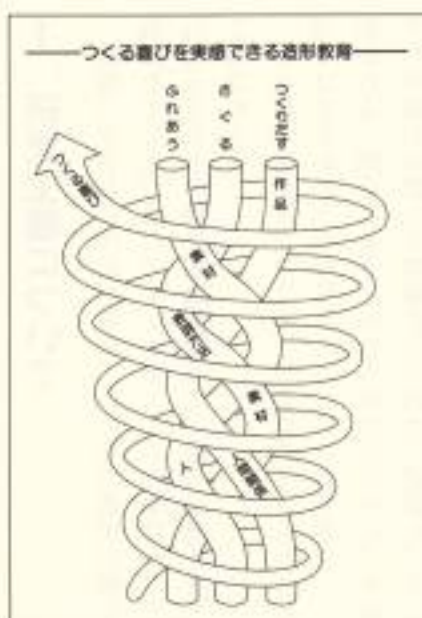
③ つくりだす

造形活動を通して作品を作り出す喜び、自己表現を通して自己を客観的に観察する力を養う。作品鑑賞などを通して自分以外の考え方やものの見方などの個性に接し、理解し、共感しあう中から人間関係をつくりだす。

生活に密着した題材（教材）に関わるということ、単なる空想にとどまらず、より深い関係をつくりだすと共に、そのものの本質をより深く探究していくことにつながる。素材の抵抗感がある程度強い方が、その素材を自分の意図する形に加工していく過程で創意・工夫をしていかざるを得ない。

また、そうした活動の中で素材の特性を知り、その存在感をより確かなものにしていくことができる。自己表現することで、自己の内面や他人の人間性を探究し、より深く理解するとともにお互いの存在を認め合うことにつながる。

三つのキーワード「ふれあう」「さぐる」「つくりだす」は密接に関連し、相互に影響しあうものと考えられる。



3 研究会から

(1) 公開授業

公開授業						
学年	表示名	題材名	授業者(学校名)	授業時間	分科会	
小学校	低学年 (2年)	粘土	「ムニユムニユ ～うれしいものをつくろう～」 吉田 淑 滝川市立東小学校	9:00～9:45	小学校 低学年	
	中学年 (4年)	絵画	「リンゴの木の下で」 桔 梗 智恵美 深川市立深川小学校	9:05～9:50	小学校 中学年	
	高学年 (5年)	構成	「All for One. One for All!」 中 澤 孝 仁 滝川市立東小学校	9:10～9:55	小学校 高学年	
中学校	1年	デザイン	「美しい形を さぐってみよう」 乙 丸 聡 史 岩見沢市立明成中学校	9:00～9:50	中学校 (さぐる)	
	2年	絵画	「わたしのいる情景」 伊 藤 記 子 岩見沢市立清園中学校	9:05～9:55	中学校 (ふれあう)	
	3年	工芸	「心の面々」 岩 田 智 弘 沼田町立沼田中学校	9:10～10:00	中学校 (つくりだす)	

(2) 分科会参加者から

素材とどんな風に向き合わせるか、どんな描きぶりをかけるか、きつと色々考えられたのだろうと思います。「小麦粉粘土の魅力」を子どもたちは存分に感じていたことでしょう。

(低学年 留明からの参加者)

写生する時の子どもの意欲をかきたたせるヒントをいただくことができた授業でした。

用紙も、絵本サイズの色画用紙も使って、楽しく興味を持って描けていたように思います。

(中学年 岩見沢からの参加者)

個人の作品が集まることで、お互いの作品が調和することを知った児童は大喜び。

最後に作品の前で記念撮影をするなど、活動意欲を高める配慮もなされ、好感の持てる授業でした。

(高学年 函館からの参加者)

様々なカラージュのための材料から感情表現をする授業ということで生徒たちも一生懸命に取り組んでいて、とても素晴らしいものだと思います。とても参考になりました。

(中1 夕張からの参加者)

絵画的手段で心の内面を表現することは、とても難しい作業ですが、学級全体がみごとに描ききょうとしていくことに感心しました。今時の生徒にここまで自分を見つめさせることは大変ですが、そこを

実に緻密な指導で持っていたと思います。

(中2 釧路からの参加者)

子ども一人一人が具体的な場面から感情をイメージするところから出発している点が面白かった。教師側の寄り添い方や、フォローによって授業をこえ、子どもにせることのできる広がりのある授業だったと思う。

(中3 当別からの参加者)



4 大会を終えて

- ・ふれあう
- ・さぐる
- ・つくりだす

この三つの観点を生かした教材(題材)を設定し、子どもが「何を」「何で」「どのように」制作するかを試行錯誤しながらとりくむ制作過程を大切にしたい授業を展開することが、「つくる喜びを実感できる造形教育」にむすびつくものと考え、六つの公開授業を実践した。その反省の中で、以下の六つの点について共通した話題となっていた。

- ・子どもの実態に応じた題材を設定する。
- ・題材設定の理由(題材観)を明確にする。
- ・子どもとの対話を大切に作る。
- ・子どもが制作に没頭できる題材とする。
- ・制作過程で、子どもにも選択肢を与える。
- ・教師の思いをおしつけない

「子どもの作品を語る会」については、基調でも書いたように、描かれる、創られる子どもたちの作品の中に、それぞれの溢れる思いを教師たちが語り、認識し、そこからまた新たな発見と課題を見出し、明日の子どもたちとのかかわりにつなげていくものとして過去三十九回開催してきたものである。空知美術教育研究会は、子どもの作品を中心に据えることで、参加者それぞれが同じ目の高さで実践を深めてきた。今回の分科会討議記録を見ても、全道から

集まってくださった方が子ども作品を通して純粋に子どもを語り、そこから、教師と子どもたちのかわりがくっきりと浮かび上がることによって自身を認識し、日常私たちがとらえる感動、迷い、疑問などを率直に交流しあい、そこから多くのことを学び取ることができたのではないかと思う。

分科会では、「授業反省」はもちろんのこと「作品を語る会」においても、「ふれあう」「さぐる」「つくりだす」という三つの観点が重要な要素として関わっていると感ずることができた。そういった面から判断すると、私たちが整理した三つの観点は当を得たものであったことが立証されたのではないかと思う。

しかし、これら三つの観点の内容を充分満たした題材を設定するということとは、



が自分の想いを自分なりに表現できる楽しい造形活動の場」として残していくためにも意識していかなければならないと感じている。

寺内定夫先生の講演は、日本が直面している競争社会の現実を鋭くめぐり出し、その中で子どもたちがいかにもがき、苦しみ、あえぎ生きているか具体的に事実を通して語ってくださった。

「小さなもの、かすかなもの、ほのかなもの、弱いものなどの存在に寄り添う」この美意識こそ争いの意識に立ち向かう人間の良心である、と強調されていた。われわれがめざす美術教育の果たす役割は、こんなにも重たいものなのだと感じた。

第54回 旭川大会



大会シンボルマーク

第54回 全道造形教育研究大会 旭川大会



豊かに感じ
おもいをふくらませ
あらわす喜びを

- 会期 2004.7.28 (水)
- 会場 旭川市立神楽中学校

日時 二〇〇四年七月二十八日
会場 旭川市立神楽中学校

1 研究主題

豊かに感じ おもいをふくらませ
あらわす喜びを

生の造形教育
↳身体で感じ、感性を磨くための
出会いを求めて

2 研究主題の具現化

「感じる自分」

私たちが実践している「造形教育」の中で、もっとも重要なことは「子ども一人一人が『感じる』力を十分に発揮する」ことです。

子どもたちは、この「感じた」自分を通して、「自分」という個性を見つけ、自己存在のアピールというかたちで、さまざまな方法を駆使しながら「自分」を表現しています。

「感じる」ことは、「相手やもの（対象）」に興味をもつ（対象の持つオーラに惹かれる）ことから始まります。興味があるからこそ、相手を「感じよう」とするのです。最初は何気なく、少しずつ自分から、そして積極的に…。

子どもたち一人一人が、自分なりに「感じている」「感じようとしている」その時こそ、本当の意味での「自分自身（子ども）」にとっての価値を見つけだそうとしている「出合いの時」なのです。では、「出合いの時」は、いつなのでしょう？

子どもたちの姿を見ていると、興味あること（もの）には、いつまでも飽きることなく接して（いたい）という姿が見られます。これは、時代も年齢も関係なく、普遍的な「子どものあるべき姿」ではないでしょうか。すなわち、子どもにとっての『出

「生」とは、この絶え間ない「出合い」の中で生まれている「自然で、素直な行為（反応、声など）」それは衝動的なものであり、止めることができないであろうもない「反応」なのです。「生の造形教育」とは、すなわち、体そして心から湧き出る「生」を、教師の支援によって、子どもにとって価値のある造形表現に結びつけていくことにはなりません。

「生の造形教育」

「生」とは、この絶え間ない「出合い」の中で生まれている「自然で、素直な行為（反応、声など）」それは衝動的なものであり、止めることができないであろうもない「反応」なのです。「生の造形教育」とは、すなわち、体そして心から湧き出る「生」を、教師の支援によって、子どもにとって価値のある造形表現に結びつけていくことにはなりません。研究主題である「生の造形教育」を具現化するにあたり、重要と押さえたことは、「身体（しんたい）で感じる」ことです。「体」ではなく「身体」です。そこには、「体」という『五感』を伴った存在に、さらに「心」という『その子なりの』、それまでに得てきた価値が加わっているのです。ここでは、コンクリートの「ザラザラ」感が、「お父さんのおひげ」になり、「校庭の木の肌」になります。身体で感じることで、一つのもの、二つにも三つにも、様々な意味合いに変わっていく、新しい価値観として獲得することができるのです。

そのような出合いこそが、「感性」子どもの感受性、感情、そして思いを自分なりに表現する力」を高め、よりよいものに磨き上げていくのです。

「豊かに感じ おもいをふくらませ」

「あらかわす喜びを」

このテーマには、造形活動の基本的なプロセスの中で、自分を見つけ、そして自分自身を表現する喜びを獲得してほしいという願いが込められています。

「豊かに感じる」のは、「私」≡児童生徒自身です。教師は「豊かに感じる」ための、対象との「生な出合い」を演出する必要があります。導入段階での「稲妻にうたれたような、激しく衝動的な対象と

の出合い」そして、「実際の造形活動の中で、対象とのかかわりから生まれてくる、じんわりと、そして身体にしみ込んでくるような出合い」が必要になってきます。

子どもたちは、最初の『生な出合い』を通して、自分なりに対象を感じ、価値を獲得しながら、活動を進めていきます。児童生徒に何を身につけさせたか、常に教師は目標に戻りながらも、子どもの思いや願いを常に把握し、子ども自身の能動的な「生な体験」「生な思考」を支援していきます。この時の適切な支援（見取り）と個性の把握、ねらいの明確化、指導の柔軟化、指導と評価の一体化等こそが、子ども自身の造形感覚や創造力、技能等を発揮させ、自分にあつた表現方法を見つけ出そうと試行錯誤する姿として表れてくるのです。これが子ども自身が「おもいをふくらませ」ている状態と考えます。

ただし、一人で表現を進めることにも限界があります。適切な場や方法で、教師だけでなく、友との交流をも通して、自らの「感じる」を確認し、よさや違いに気づくことも大切です。これらのことが、かけがいのない個性や特性を自覚し、自己実現の喜びを感じると共に、相手の立場に立って感じる事ができる感性を育てていきます。これらの支援が、さらに「あらかわす（ことの）喜びにつながっていく」と考えます。

3 研究会から

五十四回の大会では、「生の造形教育」を研究主題として、「生な出合い」を大切に、「生な体験」「生な思考」等プロセスを重視した研究を進めました。公開授業と分科会では、幼稚園、小学校表現！・

Ⅱ、中学校表現・鑑賞、高校において、研究実践の成果を紹介することができました。

① 分科会「幼稚園」

① 授業者から、授業風景
「わくわくタイム」

旭川わかば幼稚園4歳年中組
二クラス合同の保育でしたが、普段から年中オーブンスペースにして二クラスで遊んでいるため違和感なく、入り交じって遊ぶ姿が見られました。「どきどき・わいわいわいのぐらんど」

旭川わかば幼稚園5歳年長組
二クラス合同の保育で、たくさんの絵の具、大きな紙を使って全身で感じ、発見し、工夫して遊んでほしいと考えました。園でも年に一度ボディペインティングをしているので、予想していた遊びは、ほとんど子どもたちから出ていました。また、思いもつかなかった面白い遊びも発見していました。

② 助言者より

幼稚園部会を携わるたびに思うことは、先生方がものすごく活気やバイタリティーがある。保育は、子ども一人一人とりあえず体験して嫌がらないで取り組むことが大事である。しかし、今日の保育は全くはみ出る子どもが出ない。普段から先生方が取り組まれている証拠である。

① 分科会「小学校・表現Ⅰ」

① 授業者から、授業風景

「クモさんになって」 旭川市立末広小1年
「クモさんになって」をキーワードに場の設定を森、林などをイメージしながら、壁や床に木を配置して、クモが表れそうな環境にしてみた。その結果、子どもたちは、主体的に空間に挑み、空間の変化を身体で受け止めていた。

「アレレ、いしをつみあげていくと」

上富良野町立江鏡小1・2年

活動が「石を積む」というシンプルなものだけに、この題材の学力について議論を重ねた。行為を通して石という素材を体で受け止め、感じる力、考える力、味わう力を蓄積していくこととした。子どもたちは、自然発生的に素材に浸りながら、自分の表現を作りだしていた。

① 「ブラックライトの世界」 旭川市立旭川小5年
普段、何気なく見ている身近な素材に、蛍光塗の具を塗り、ブラックライトの光を当てることによって、全く違って見えることから「遊び性」のある活動が展開すると考えた。子どもたちは、自分の好きな場所を見つけ、思い思いの活動に入っていた。

② 助言者より
・遊びだからどこまで教師がかかわればいいのか、準備はどこまでしたらよいかというところは、園工美術教育が何を育てるのかにかかわっている。
・評価は、子どもの力をどう伸ばしていくかにつながる評価、指導者がどうかかわっていくかという評価でなければ意味がない。
・もっと子どもの心から出発しようというのが、造形遊びのスタート。造形遊びそのものは、自分の生命的な躍動からスタートさせようとするもの。

(3) 分科会「小学校・表現Ⅱ」

① 授業者から、授業風景

「あそびにおいてよ わたしの島へ」

旭川市立朝日小2年

事前に教師のつくった島で思う存分楽しむという体験をさせたことが、自分の島をつくることに對して大きな期待を高めたと思う。本時では、「もっと素敵な材料のあるところへ旅に出た」と

いう場面設定をし、子どもたちは新しい材料との出会いにより、イメージは広がり、さらに島を築く工夫をしながら活動していた。

「どこでもドアを開いてみると……」

旭川市立陸雲小3年

「生な出会い」として実物大のドア、自分の作品をスクリーンに大きく映し出し、その中を自分が入り込むという活動を取り入れた。子どもたちは、ただスクリーンに映し出された世界に入り込む行為のみでなく、材料を持ってスクリーンに映った作品の上に付け足すという工夫も見られた。

② 「あさひかわ彫刻散歩」 教育大附属旭川小6年
本題材は「暮らしの中の作品などのよさや美しさ、表現の意図などに関心を持って鑑賞する」ことを目的にしており、「彫刻の街・旭川」の地域特性を生かした題材と感じている。

それぞれの彫刻のよさ、美しさに出合った子どもたちは、作品に語りかけ、形を真似たり、質感を確かめるように触れていました。

② 助言者より

・子どもたちの五感を生かして素材と触れあう場、他者との関わりを通して思考する場の設定が大切である。

・「やってみよう」という表現のチャンスを提供する方法として、装置や教師の言葉による演出が大切である。

(4) 分科会「中学校・表現」

① 授業者から、授業風景

「木が語りかけるもの」 旭川市立神楽中1年

本題材では、「素材や材料との出会い」を発想の起点と考え、十分に「彫る」「削る」という木との対話する時間を確保した。本時では、工作用ナイフの扱いに慣れはじめ、木を彫ることの楽し

さを感じている様子や試行錯誤しながら素材と向き合い、制作に熱中している姿が見られた。しかし、思い通りに彫れるまでに時間がかかりすぎた生徒も見られた。

「水を感じて流れを視る」 旭川市立緑が丘中2年
本題材は、「枯山水」の空間構成の仕方や考え方をもとにして、石、砂利、粘土を材料に「水無き所に流れを感じる」というデザインを試みた。授業では、粘土を使いやすい硬さにまで練ったり、見た目が綺麗になるように平らにしてみたり、「早く石を置いてみたい」という声も聞かれた。

「変容する版の魅力(コラグラフ)」

旭川市立東明中2年

「生」の視点から考え、既成概念にとらわれにくい「曲」を聴かせて版表現することとした。もう少しメロディーやリズム感のある曲を選曲すべきかもしれない。しかし、生徒それぞれ既成概念にとらわれることなく、自分の内にあるものを作品に表すことができていた。

② 助言者より

・「生との出会い」は、美術の原点である。つくる前にどう感じるかということを大事にしていかなければ、創造の芽とまらないであろう。

・今回の旭川大会の「生の造形……」の中に多分に造形遊び的なものを感じる。素材と戯れる、先に行為がある等はそれを表している。

(5) 分科会「中学校・鑑賞」

① 授業者から、授業風景

「共有するまなざし」 旭川市立春光台中2年

「生」の視点から、作品に直に向き合っていてじっくりと観察することにより、作品の本質に迫ろうとする力、作品との対話、他者との対話、自分と

の対話を通して今、ここで自分なりの意味を生み出す力等が大切と考えている。

授業では、二つの作品について自分なりに感じたことを発表し合う対話型の鑑賞方法は、鑑賞の授業の全てではないが、有効であると感じられた。

② 助言者より

・鑑賞領域は、新しい学習指導要領で重視されているものの一つである。旭川では、対話を中心とした鑑賞の能力が高まっていると感じた。

(6) 分科会「高校」

① 提言から

提言1「壁飾りの照明器具」 旭川東高

銅板打ち出しによるレリーフの壁飾りであるが、照明としての用途もあり、七宝焼きを一部に使用するという課題である。授業時数は一単位のため年間二十三時間程度。一年間で課題はこれ一つしかできない。

提言2「教科内ジャンクシヨンの試行」 旭川藤高

学校設定科目の実践として、「総合芸術科目」の授業を展開している。選択生徒は、工芸で抹茶茶碗をつくり、美術で和紙に日本画を描き、書道で短冊に筆を走らせ、和服の着付け、音楽で琴を練習し、最後に茶室に見立てた教室でお茶を味わいながら書と絵と琴を鑑賞するという四科目全てを体験できるといふ発表。

提言3「卵の形を利用した立体表現」 旭川工高

自然から美しい形を学ぶことをテーマに、卵のかたちを削らせ、磨かせる。卵というかたち(原型)をもとに発想を広げ立体表現する。完成後、作品を拡大してスクリーンに映し、鑑賞し合うという実践。所要時間 八時間。

② 助言者より

・昔から比べると生徒の質も大きく変わってきて

いる。手先の不器用な子、作品レベルも相対的に落ち込んできている。このような中で教師の存在はますます重要であり、生徒への指導、助言に真摯な姿勢で臨まなければならない。

・藤高の実践は、一面にこだわらず総合的、立体的で、まさに五感にフルに働きかけるような感性を揺さぶる体験授業である。生で感じることでできるもっとも理想の形態のように感じられた。

4 記念講演

演題

「いま・ここに生きる根源的学びとしての

子どもの造形行為の可能性」

講師 西野 範夫 氏 元上越教育大学教授

【概要】

現在は、私たちが信じていたものが、ガタガタと崩れてきていて、大人が自信を失っているし、迷っている時代でもある。

そして、対応できずに過去のよい点を思い出したり探し求めている気がするが、それではなかなか解決はしないだろう。

自分の巨根を取り払って相手を受け入れることが大切であり、今日行われた授業の子どもはこの姿がたくさんもっていた。

自分が、自分自身の身体とかかわって変わっていく。周りの行為や他者との行為のかかわりながら生きていく。このようなことを繰り返していくことで「生きる力」がついていくのだと思う。

私たち大人社会、子どもたちの行っている姿から学んでいかなければならない。私たちは、「いま・ここ」に生きているが、過去にも、未来にもその時その時の私がいて、次々と自分の「いま・ここ」が

変わっていく。自分がどんどん変わっていく。今後このような環境で子どもを育てていけば、明るい見通しがもてるだろう。

5 大会を終えて

今大会には、全道各地から四〇〇名を超える参加をいただき、有意義な研究大会にすることが出来ました。旭川での大会は十一年ぶりということで、前回の大会運営にかかわった先生方も少なく、手探りの状態で大会準備を進めてきました。幼稚園・高校、更には上川造形教育研究会の全面的な協力を得て、十二の公開授業と六つの分科会を開催する運びとなりました。今大会では、「生の造形教育」を研究主題として、「生な出合い」を大切に、「生な体験」「生な思考」などプロセスを重視した研究を進めて参りました。公開授業と分科会では、小学校表現Ⅰ・Ⅱ、中学校表現・鑑賞の各領域別部長を中心に研究の推進、ブレ授業実践の成果を紹介できたものと思います。分科会におきましても、児童・生徒の変容ぶりや興味の持続などの報告がありました。また、幼稚園、高校分科会におきましても活発な話し合いがなされ、実践の交流ができたものと思います。

西野範夫先生のご講演からは、子どもの造形教育の可能性について多くのことを学ばせていただきました。「旭川の子どもの心は柔らかい」と授業での子どものよさについてふれていただき、大会運営者一同が大きな勇気をいただいたところです。

全道各地から参加された皆様との熱い議論の中、私たちの進むべき方向への貴重なご意見や示唆を与えていただいたことに深く感謝申し上げます。

今後も旭川らしさを追求し、子どもたちの感じる力や素直な表現力を伸ばしていきたいと考えています。

第55回 函館大会



日時 二〇〇五年七月二十八日
会場 北海道教育大学附属函館中学校
北海道教育大学附属函館小学校
北海道教育大学附属函館幼稚園
函館市芸術ホール

北海道教育大学附属函館幼稚園
函館市芸術ホール

全道造形教育研究大会
2005. 7. 28 函館大会



めざめる感性(こころ)きらめく個性(かたち)
地域空間がいざなう造形活動のひろがり

会場：北海道教育大学附属函館中学校 函館市芸術ホール

研究主題

めざめる感性(こころ)きらめく個性(かたち)
「地域空間がいざなう
造形活動のひろがり」

1 研究主題について

今日の変化の大きい社会にあってこそ、豊かな情操を育む造形教育の果たす役割を再認識し、発信していく必要がある。そのためには、もの美しさに感動する素直な心呼び覚まし、豊かな自分づくりを目指すことが大切である。

子どもたちにとって身近な環境としての地域空間に焦点をあて、そのよさや美しさに気づき、感動するような活動を展開することにより、感性を磨き個性を伸ばしたいと考えた。

ここでの「感性(こころ)」とは、「様々な対象・事象からよさや美しさなどの価値や心情などを感じ取る力」や「美しさや命の大切さ、悲しみ、人情などの心的な価値を素早く感じとれるということ」である。そこで本大会では、美しさや心情、夢、希望、憧れなどとともに、興味・関心・意欲・態度を含めて、感性をより多面的におさえ「感性(こころ)」ととらえた。そして、「個性(かたち)」とは、子どもが題材・材料・地域から受けた刺激によって「感性(こころ)」がめざめそのイメージを独自の手法で、創造的に創意工夫し、その結果を表出させたものあるいは表出に至るまでの一連の行為とおさえ「個性(かたち)」ととらえた。

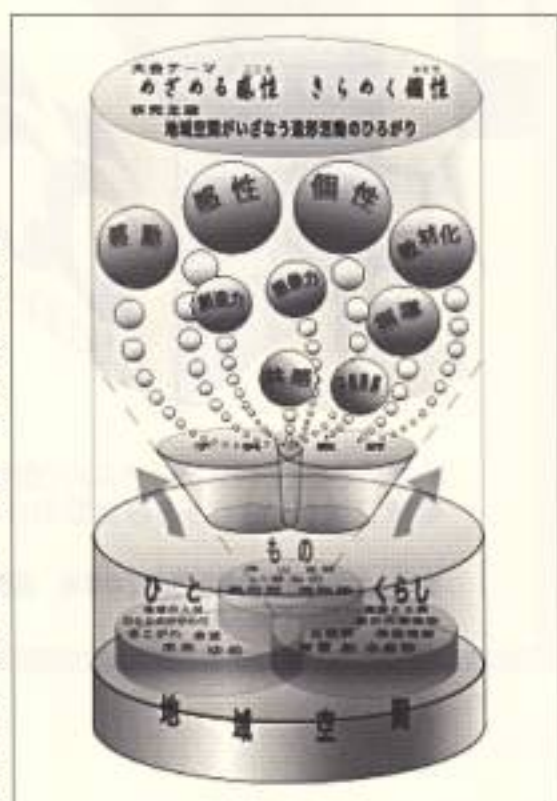
つまり、「感性(こころ)」は、潜在的に子ども一人一人が、持ち合わせているが、それに気がつかず、十分発揮できずにいることが多く見られる。そこで、何らかの造形的な刺激を与えていくことによって、自分自身のよさに気づき、こころの扉を開きさまざまな事象にかかわっていくことを目指した。これらをもまえ、子ども相互の活動や、表現のよさ「個性(かたち)」を認め合うことで、互いの「感性(こころ)」が研ぎすまされ、個性のきらめきにつながるものとおさえ、大会テーマを設定した。

そして、感性を揺さぶり、いざなうような風景、情景、心情を与えてくれる函館、道南地区の地域空間に目を向け、子どもや教師が地域に存在する空間、場所、人材施設、文化風土などと深くかわり、それらを題材、テーマ、素材として効果的に活用することにより、表現や鑑賞の活動をより豊かなものとしていくことができると考えた。

2 研究主題の具現化

地域空間を「ひと・もの・くらし」という三つの視点からとらえ直し、子どもの美的感受性や発想・構想力や、創造力を育み、個性に応じた心豊かな造形活動を展開し、研究主題の具現化を目指した。

このような活動が成り立つためには、
①地域空間がいざなう感性(こころ)の育成



- ・地域空間への興味・関心・五感を生かした創造的な造形活動を楽しもうとする態度や心の育成、また鑑賞活動の充実と様々な見方、感じ方の深化
- ②地域空間がいざなう個性(かたち)の伸長
 - ・創造的な造形活動の基礎・基本的な能力を育み、子どものよさや可能性を見いだす地域空間の活用
- ③地域空間から感受し、自ら創造的な発想力や構想力を働かせ、創意工夫し表現する力の育成
- ④地域空間を生かした題材開発
 - ・地域空間を活用し、様々な視点からの教材化
 - ・学習指導の展開
 - ・多様な授業形態とそれに伴った評価の工夫総合的な学習の時間との関連

3 研究会から

地域空間「ひと・もの・くらし」の授業記録

◆ひと・ものからのいざない

「うみだーうみだー!」(3・4・5歳児)

(小林恵理子・中山利広・太田洋子教諭)

グラウンドを海に見立てて遊んだ。3歳児は新聞紙を素材にタコを、4歳児は発砲トレーを鱈に見立てた魚を、5歳児は「海に行くには?」の問いかけに、ペットボトルから船を作り、そこから、さまざまな遊びに発展。また、年長の子は、作った船を年少の子に貸してあげるなど、子ども同士の間でさまざまなかわりもみられた。指導者による環境構成や支援によって、実体験や仮想体験から、子どもたちの意欲をふくらませ、豊かな感性と個性を育んだ。

◆ひとからのいざない

「私たち街づくりデザイナー」

(小6年・西館純教諭・橋山聡教諭)

近隣二校のコラボレーションで、十年後の函館をイメージし、互いの発想のよさを認め合いながら、「函館のよさを伝えよう」というテーマで、共同でポスターの制作を行った。二校の指導者の創意に満ちた協働体制によって、昭和小の子と附属小の子が、合同体育のドッチボールやミニ運動会を通して出合う演出も興味深かった。複数校で一つの授業を行うという斬新な取り組みとなった。

「田辺三重松に学ぶ」(中2年・齊藤悦子教諭)

函館にゆかりのある作家、田辺三重松氏を取り

上げた。道立函館美術館から資料を提供してもらい、作品と人をつなぎながら調べ学習を展開し、グループによるプレゼンテーションを行った。そして、ゲストティーチャーとして、田辺氏に師事された地元画家、三箇三郎氏を招き、知識中心の鑑賞ではなく作家の心情や生き方に重きをおいた授業が構築された。三箇氏の「感謝の言葉」が感銘的で、道徳的な側面もあり、生徒にとって記憶に残る授業であった。

◆ものからのいざない

「光と風のハーモニー」

～またたく光で夜をかざろう～

(小4年・水島賢久教諭)

身近で加工しやすい、紙コップと豆電球で風によって幻想的に瞬く光を放つ「風灯」を製作。子どもたちは、函館の夜景に参加するために、完成作品を持ち寄り夜に集い鑑賞会を開いた。総合的な学習の時間「函館の魅力」と理科の学習で学んだ電気とのつながりを意図的に計画した。指導者の柔軟な発想と子どもの興味関心の高い光と風をあわせた地域素材で大きな話題提供となった。

「なまら函館ビーアール大作戦」

(3年・佐々木壮一教諭)

函館の歴史や風景をテーマにコンピュータによるアニメーション制作を行った。構想をふくらませ、星と五稜郭のように、アニメーション・フラッシュの特性、変化をイカす展開がなされた。生徒の評価カードには「すごい」「みんな函館が好きなんだ」「PRになって感動した。」と書かれており、函館からの「いざない」の成果が十分に見

られた。

◆くらしからのいざない

「函館・元町・スローアーカイブス」

(小5年・山田光教諭)

「西部地区をこすり出してみよう」という活動に端を発した、小学校高学年の興味・関心を十分に配慮した教材開発ができた。函館の歴史ある町並みからのイメージをじっくり見詰め、「写真・絵・こすりだし」の三つの複合素材を取り入れ、元町にある教会での写生会と写真撮影、ターマツグラフ(アート鉛筆)を使ったこすり出しを実践した。子どもたちが地元よさを感じ取り、製作過程を大切にしたい、共同制作の実験的な授業として、一石を投じた。

「縄文の灯」

(中2年・九千房政光教諭)

函館銭亀沢地区は縄文土器が出土することもあり、これをヒントに縄文時代の人になりきっての土器制作をテーマに据えた。この教材を開発するにあたり、指導者が日夜試行錯誤しながら、地元の粘土にシャモットを混ぜて焼成することにとり着いた。地域にある粘土で本当に器が作れたという感動が、生徒に大きな喜びを与えた。製作したランプシェードの鑑賞では、ろうそくの灯りが器から漏れ、自然な光の空間を演出した。教室の電気を消して、ろうそくを灯したとき、生徒から出た歓声は本物の感動であった。「美しさの原点とは何か？」を考えさせられる、誠実な取り組みであった。

4 講演について

演題

「発見」と「共創」の学びをデザインする

—情報デザインが媒介する造形教育と地域コミュニティー

講師

智財創造ラボ主任研究員

NPO法人ヒューマン・センター・デザイン・イニシアティブ理事

NPO法人グリーンマップ・ジャパン運営委員

函館マルチメディア推進協議会幹事

武蔵野美術大学デザイン情報学科非常勤講師

渡辺 保史 氏

造形教育は、地域社会の中でこれからの新たな新しい学びのスタイルを創出することができるか。それを考えるとき、欠かすことができない重要な発想と方法を提示するのが「情報デザイン」という領域である。これは、地域生活の中に潜在している隠れた価値を発見し、その価値を異分野と異世代の知恵と経験のつながりあいから生まれる協働によって、さらに高めていくことである。こうした造形教育の新たな可能性を、函館で行われた子どもたちのアートプロジェクト「ハコデジアート探検隊」の実践報告をもとに、講演した。

アートプロジェクト「ハコデジアート探検隊」では、「見つけよう形！楽しもう色彩！発見、私たちの函館」を合い言葉に、大会テーマにもとづいて、地域と造形、地域とデジタルアーカイブを連携させたアートプロジェクトを実施し、造形大会に関わる指導者を含め子ども感性をゆさぶり、個性がきら

地域芸術で感性広げよう

デジタルカメラを使い
映像作品制作

市内小中生43人

小中学校美術教師らでつくる函館市美術教育研究会は十一日、市内の小中学生を対象に初めて、「ハコダテアート交流展」を西部地区の「函館市立大森小学校」で開き、児童がデジタルカメラで撮影した映像作品を



作りに挑戦した。

開かれるのにはなみ、地

域を舞台にした芸術活動

七月二十八日に開催で

金道造形教育研究大会が

で発表、生徒の感性を引

き出すと試みた。

この日は四十三人が八

グループに分かれ、小学

生は「画のように見える

もの」、中学生は「夏を

感じるもの」をテーマに、

西部地区で撮影。

その後、函館大函館校

で撮影した映像をパソコン

上で再生、観覧の魅力を

伝える映像作品や、画像

を印刷して切り抜いたコ

ラージュ作品を作った。

参加小生の加藤大真

君は「西部地区は変わった

デザインの建物が多く面白

かった。アイデアを出

し合っていて、楽しい作業に

なった」と満足そうだった。

今回の取り組みは函館

研究大会で発表され、作品

はインターネットで公表

される。(佐々木文彦)

函館の魅力を伝える映像

作品を作る子供たち

めくような内容のテーマの具現化を図った。

初夏の函館駅前地区から、元町・青柳・末広地区にかけて、市内の小中学生や北海道教育大学函館校の学生により、参加者八十六名で実施された。デジタルカメラを手に、電車や徒歩で青柳町から函館公園、西部地区の教会、元町公園、金森倉庫、駅前・朝市を散策した。小学生は「ハコダテ百面相く色と形で探す・カオ・かお・KAO」自然、建物、道路、壁など様々なものの中にひそむ「顔」のように見える色や形などを目をこらして見つけ出し撮影した。中学生は「函館、夏発見！再発見！く色と形で感じ

とろう夏の季節感」をテーマに自然や建物などから、夏を感じさせる色彩や形、夏の光と影、それらの材質感や表面の細かな様子などから、美しさやおもしろさを見つけ出して撮影した。そして、大学生の協力で、コンピュータ上で撮影データとメモをもとにフォトフォーカーを使った感性豊かな作品に仕上げWEB上で公開することにした。

5 大会を終えて

事務局長 横岸澤英二

第五十五回全道造形教育研究大会函館大会は、北海道教育大学附属函館小学校・中学校・幼稚園・特別支援学校が共存する広大なキャンパス内で開催されました。

今大会の研究テーマ「めざめる感性(こころ) さらめく個性(かたち)」は、函館大会関係者の総意により生まれ、研究部を中心に研究主題「地域空間がいざなう造形活動のひろがり」が設定されました。私たちが目指したのは「子どもたちにとって、身近な環境としての地域空間に焦点をあて、そのよさや美しさに気づき、感動するような造形活動を展開することにより、より一層感性を磨き個性を伸長すること」でした。

図工・美術の時間は、子どもたちにとって大好きで楽しい時間です。子どもが自由に表現し「授業って楽しい」と実感することのできることも大切な

時間です。そこにあるのは、子どもたちのキラキラした目、想いをかたちにするワクワクした心、それを手助けする私たち大人・環境。子どもは夢中になって自分たちの世界を創ります。

感性(こころ)がめざめたとき、何かに没頭し無心になる姿があります。個性(かたち)がきらめいたとき、達成する嬉しさに満ちた顔があります。最後に、小さな手でつくられた宝物のような作品と感動が残ります。作り手が楽しむからこそ、その作品に出会う人に感動を与えるのです。

授業づくりは日夜進められ、授業者の熱意と研究会の勢いを感じました。幼稚園・小学校・中学校、合わせて七つの授業を公開することができました。また、たくさんの方々の理解と協力で、多くの提言とご助言をいただくこともできました。研究内容は、七つの公開授業全てに集約されました。研究の成果は子どもたちの生き生きと活動する姿を思い浮かべていただければ、おわかりのことと考えます。

分科会では、皆様からの率直なご感想やご意見をいただきありがとうございました。この大会を通じて学び合ったことをもとに、豊かな情操つまり「人間として大切な心」を思い出させる造形教育の果たす役割を再認識し造形教育の重要性を家庭に、学校に、地域に発信していただくことを願っています。

最後に、大会開催にあたって、北海道教育委員会、函館市教育委員会、渡島美術教育研究会、樺山造形教育連盟、函館市幼稚園協会関係機関等には、絶大なご支援ご協力を賜りましたことに対し心よりお礼申し上げます。

第56回 札幌大会



大会シンボルマーク

日時 二〇〇六年七月二六日・二七日
会場 札幌市立澄川西小学校
札幌芸術の森

第56回 全国造形教育研究大会札幌大会



真の表現
確かな表現
造形教育

1日回：札幌市立澄川西小学校 / 2日回：札幌芸術の森

Sapporo
56th.

2006.07.26-27

北海道造形教育連盟・札幌市造形教育連盟

研究主題

楽しさあふれ、確かな表現を
実感する造形教育

1 研究主題について

「美術」は一部の才能のある人間にとってのみ必要なものであり、一般的な人々の生活とは無縁である、という閉じられた考え方があります。この考え方は、興味や能力のあるものが選択し学習すればよい、という考え方につながりかねません。ですから

〈造形教育を「ひらく」〉

- ・美術・図工が楽しく、自分とのかかわりの深い活動であると感じ取れるようにする
- ・個性と共同性を補完し合いながら、豊かな人間性と深い教養を育む価値ある教育活動であることを社会や保護者に子どもの姿で説明していく

必要があると考えます。そのためには、

〈「すくすく」育て〉

- ・伸びやかな自己表現を保障しながら、適切な造形刺激を与えていくことで基礎・基本を育てる
- ・自分なりの価値を求めて楽しく表現していく指導を

〈「つくるの大好き！」な子ども〉

- ・自ら進んで楽しく取り組むことから真の自己表現の喜びを経験させていく
- ・伸びやかな自己実現を保障していく

が必要になると考えます。

「造形のWA」による題材の考え方

【3つの扉の考え方に基づく題材開発】

私たちは、実際の授業づくりに向けて「造形のWA」をつくり、各題材が研究理論のどこに位置づくのかを確かめてきました。この「造形のWA」は、実践者が自分の題材開発傾向をふり返る手立てとなります。ですから、偏りのない年間カリキュラムづくりのもとになると考えます。「造形のWA」から、今の子どもの実態に即した連盟独自の領域論も構築していきたいと考えています。

〈全道造形教育研究会／札幌大会研究主題〉

楽しさあふれ、確かな表現を

実感する造形教育

研究主題を実現する題材の要件

「楽しさ」…五感を働かせ、造形的な楽しさが感じられる題材

「確かな表現」…造形的な思考力や表現力が高められる題材

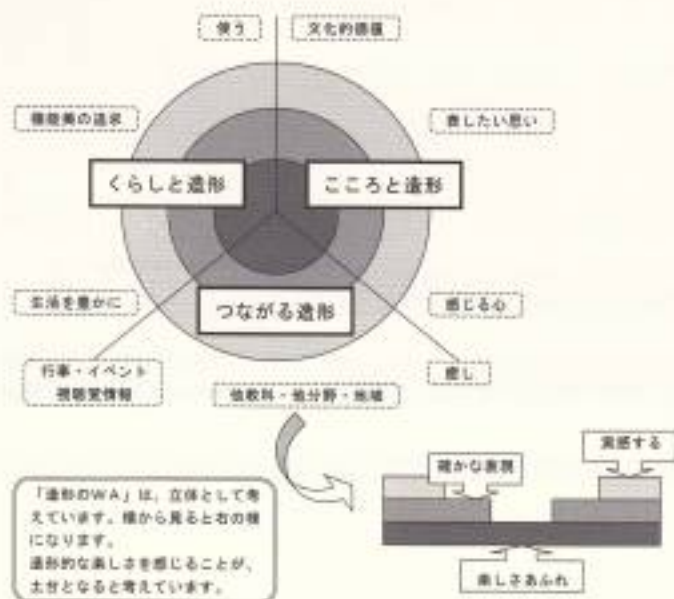
「実感」…よさや課題を自覚することから、有能感や効力感を高められる題材

2 研究主題の具現化

Ⅱ 発信する造形教育の必要性Ⅱ

文部科学省の調査によると、小学生の約八割の子が「図工が好き!」とアンケートに答えているようです。対して、「学校教育において造形教育が必要である」と答えた保護者は約三割という結果です。

このような現状に対して、「造形教育の価値や意義を積極的に発信していく」ことを起点として本大会は開催されました。大会を終えた今、その成果と課題を整理することで今後の研究につなげてい



したいと思います。尚、これから、本大会における公開授業を受けた児童に対するアンケートの結果・分析も行い、子どもの側に立った成果と課題も整理していきたいと考えています。

(1) 基本コンセプトについて

本研究大会は、「北海道の子どもの現状を捉えるためのアンケート」をもとに、もっと「子どもたちがへつくるの大好き」と、楽しみながら熱中する授業をつくり、子どもたちに造形の素晴らしさを感じ取らせていきたい。もっと「保護者や教師、社会(地域)に造形教育のもつ価値や意義を発信していきたい。」という思いから出発しました。ですから、教材化の視点を身近な生活や子どもたちの学習体験に求めたりしました。また、芸術の森など地域の施設との連携を強めたり、全校児童による造形活動や音楽とのコラボレーション、総合的な学習との関連などを図ったりすること、また野中真理子氏を囲んで造形について語り合うことで、子どもや保護者、社会(地域)、そして何よりも教育に携わる教師に造形教育の価値や意義を発信できたと考えています。今回

の取り組みは、新聞や「子ども未来博」などでも取り上げられました。小さな一歩かもしれませんが、人や文化、地域とつながることで、造形教育の素晴らしさを外に向けて発信していくことができたと考えています。

(2) 公開授業・提言について

一番の成果として挙げることはできるのは、多くの参加者のみなさんから「授業がよかった!」、「研究の主張と授業に整合性があった。」という意見や感想をいただいたことだと考えています。その陰には、「責任者を中心とした授業づくり、検証授業、細かな打ち合わせといった部会で作る授業という取り組みがありました。授業者一人に完全に任せてしまうのではなく、時間のない中、部会で検討を重ねたことが大きかったと思います。だからこそ、「よい授業を子どもにプレゼントしたい!」という授業者の思いが実を結んだのだと思います。特に、全校造形の取り組みは、連盟以外の先生をも取り込んでの取り組みとなりましたが、福島先生を中心とした澄川西小学校の先生方の力により、すばらしい造形ワールドが生まれたと思います。

しかし、我々からだけの見方ではなく、各授業を一緒に創り上げてくれた子どもたちの感想をアンケートという形で集約し、その分析を行う中で、本大会で主張した（へつくるの大好き）、（確かな表現の実感）がどの程度実現されたのかを謙虚に検証していきたいと考えています。

(3) 課題別分科会（三つの扉）について

幼稚園、小学校、中学校、高等学校という校種の壁を取り払った「扉」という課題別分科会の考え方は、平成八年の札幌大会（札幌市立山鼻小学校会場）から継続研究してきたものです。「八つの扉」、「五つの扉」、そして今回の「三つの扉」とその中身と数を見直しながら進めてきています。今回は扉の数を精選し、「三つの扉」とすることで、「主張が分かりやすくになった。」という意見もいただきました。幼稚園から高等学校まで子どもの発達に寄り添った授業づくり、研究理論づくりはやはり連盟の宝であると再認識しているところです。

また、今回は、子どもに対する指導にも重きを置いたので、より授業に直結した考え方になったのではないかと考えています。

しかし、「くらしと造形」、「こころと造形」、「つながる造形」という扉の持ち方には、「この三つは次元の違うものであり、並列することが難しかったのではないかと」、「つながる造形は何とつながるのか絞ったほうがよかった。」など、課題の持ち方について意見もいただいています。



研究部としては、今後、継続研究を重ねなが

ら、現状の造形教育を考えた時にもっとも大切にしなければならぬ要素やコンセプトを洗い出していきたいと考えています。

(4) 研究紀要について

コンパクトでありながら、授業と研究の主張を上げることで研究紀要であると考えています。大学の講義の参考資料として活用されているという嬉しい事実もあります。

しかし、細かいところでは、論の進め方に粗さが目立ちますし、言葉の吟味や研究理論における授業の位置づけにも粗さがあったと考えています。終了してしまっただけですが、（へもうひと手間かける）ことができたのではないかと考えています。

(5) 研究部の活動を中心とした運営面について

今回は、幼稚園、小学校、中学校、高等学校の各部会の協力体制によって成立した大会とを考えています。研究部のコンセプトを各校種で具現化しながら取り組むことができたと考えています。特に、中学校の先生方には、研究の中核を担う業務を多く遂行していただきました。小学校を中心とした大会運営から、小学校と中学校が引っ張っていく大会へと進化した取組であったと考えています。

多くの先生方の力をお借りしての大会であったわけですが、一部の人が仕事が偏った反面、より多くの方に力を十分に発揮していただくために業務の分担のあり方など、運営面での課題も浮き彫りになりました。

3 研究会から

(1) 大会日程及び授業者等一覧

1日目(26日:水) 札幌市立澄川西小学校の日						
指導・助言: 文部科学省初等中等教育所教育課程課 教科調査官 奥村 高明 氏 ネットワーク部会指導・助言: 全国造形教育推進委員会 藤安 啓二 氏						
9:00	10:30	11:10	12:20	13:30	16:00	18:30 20:30
開会式 開会式授業者公開	開会式 授業者発表	授業者発表 授業者発表	授業者発表 授業者発表	授業者発表 授業者発表	授業者発表 授業者発表	授業者発表 授業者発表
2日目(27日:木) 札幌芸術の森の日						
9:40 9:50	10:30	12:00	13:20	15:00		
入場開始	開演 PMFと造形表現の コラボレーション	開演 「トントンギコギコ工の時間」 上映	開演 野中真理子監督 トークショー	開演 「トントンギコギコ工の時間」 上映		
クラフト工房発表の特別講座 ● ガラス・陶芸・染色など ● 「クラフト工房」体験 ポティベンティングで彫刻に大冒険!						

公開授業および提言と分科会 (扉)

階	題材名(授業者・学年)	授業者	提言テーマ	提言者	助言者	運営
造形(1)1F	「とんだ?とんだ!」 (小学2年)	八子 晋嗣 (山崎南小)	「生活に 生かせる粘土」 (小学5年)	松本 和彦 (美音小)	寺嶋 文憲 (東米里中)	●運営 山 薫 (上野幌南小) ●司会 大高 雅子 (平岡緑中) ●記録 新見亜矢子 (平岸高台小)
	「つなげて、すてきな ながめて、きれい」 (小学4年)	岩井 久樹 (二条小)				
	「カラフルな 本焼き皿」 (中学2年)	八子 正人 (美音中)				
造形(1)1F	「Bくみ わくわくランド」 (幼 年長)	佐々木瑠美 内田 芳恵 (なかのしま幼)	「遊びの必要感や イメージが 心を動かす」 (幼 年中)	川口いづみ (白樺幼)	結村 豊 (南水小)	●運営 坂田 悟 (光南小) ●司会 石川 早苗 (高の丘中) ●記録 椿野 衣江 (美音中)
	「むくむく わくわく」 -たぐりたぐり たぐり- (小学2年)	池田 武彦 (丹摩小)				
	「彫刻美術館の 音楽会」 (小学3年)	森實 祐里 (三角山小)	「水墨画で心を はぐくむ」 ～基礎演習から 表現へ～ (中学3年)	高橋久美子 (磯村野中)		
	「思いをかたちに」 (中学2年)	市川 雅星 (屯田北中)				
	「映像メディア表現」 (高校後進校)	川上 勉 (白樺高)				
造形(1)2F	「すみにし つながるネット」 (小学全校児童)	澄川西小全教員 (代表者藤島由紀子)	「どろんこパーク」 (小学3年)	三浦 麻紀 (三角山小)	菅原 清貴 (前田北小)	●運営 八田 博之 (中央小) ●司会 向井 正樹 (あいの里南中) ●記録 小野 博史 (東山小)
	「古代からの おくりもの」 (小学4年)	磯部 雅之 (常盤小)				
	「絵文字で伝えよう」 (中学1年)	館内 徹 (豊野中)				

(2) 授業の成果と課題

〈幼稚園〉

〈年長〉題材名「わくわくランド 海で遊ぼう」

なかのしま幼稚園 佐々木瑠美、内田よしえ
自分のペースで虫、動物、魚などを作り、それを
介して友達と遊ぶことで、イメージを広げ、自分た
ちの世界を表わしていくという楽しさが、一人一人
の自信になったように思われる。



クラス全体が造形活動に意欲的に取り組むようにな
った。技術や完
成度にこだわらず
に、遊びのなかで
イメージを広げて
作ったり、描いた
りすることが、の
びのびとした発想
を広げた。
このような自由
な態度をほかの活
動にも活かしてい
きたい。

〈小学校〉

〈小全〉つながる造形「すみにしつながるネット」

澄川西小学校 全職員

同じような活動を他の場所でも一度経験し楽しんでい
た子どもたちは、安心して楽しんで活動することができ
た。日通しがもたらす友達と一緒に活動できたりするこ
とが楽しめた要因であると考えられる。反面、場所が限られ



〈中2〉
 題材名「カラフルな本焼き皿」工芸（やきもの）
 発案中学校 八子 正人

釉薬の水分量を減らして色が濃くなるようにしたが、塗りにくくなっ
 た。本焼きした色
 はきれいに出了。
 割れたり、色が垂
 れる作品もなかっ
 た。発色が制作時
 と異なるので、一
 様に驚いていた。
 もっと、より美
 しくと発展的に考
 える生徒には、色
 数が少なく、時間



たことによる活動
 の制限があったり、
 大会の日程の都合
 で、じっくりと自
 己鑑賞に浸る時間
 がとれなかったり
 など、運営面との
 関係で子どもたち
 にさらに満足感を
 味わせる機会が与
 えられなかったこ
 とが残念である。



もなく、形も画一的なので、やや不満気味であった。
 また、発想の広がらない生徒には、デザインの中途
 半端さがそのまま出てしまった。

(3) 造形活動とPMFとのコラボレーション

世界を舞台に活躍するPMF交響楽団の演奏を聴いて、子どもたちがイメージした形を大きな三角形の立体物を中心に表現していくという活動です。曲を聴いて自分のイメージを形にするという活動は学校の授業の中でも取り上げられていますが、①生の演奏で即興という組み合わせはなかなか実現できないものです。さらに、②異年齢（今回は小学生と中学生が一緒に同じ目標に向かって取り組みました）の子どもたちがコ



(4) トントングコギコ図工の時間

「こどもの時間」「トントングコギコ図工の時間」の映画監督、野中真理子さんと全国造形教育連盟委員長・富安敬二さん（立教大学文学部教育学科教授）をお迎えして図工の時間を見つ

コミュニケーションを取りながら活動するということが新しい試みです。
 夢のコラボレーションが芸術の森で実現しました。

〈小学校〉

☆曲を聴いて自分たちのイメージを布に染めるという方法で表現する。
 ☆身体表現や装飾による表現など、様々な表現があることを知る。

〈中学校〉

☆三角形をユニットにして立体構成をする。
 ☆音や曲を色彩と形で和紙に表現する。

陶芸工房 ガラス工房



土をさわっていると不思議に何となくほっとできますね。



何もない資材の中にも真新しい子どもたちの実感が溢れり！

染色工房



思っていたイメージ通りの仕上がりになったかな？

(5) 夏休みクラフト工房

有意義な時間であったと参加した先生からの感想も聞かれました。



野中監督・富安委員長トークショーの様子

めてきた熱い思いや造形教育へのメッセージをたくさん語っていただきました。司会進行は今大会の副大会長である毛馬内閣夫先生でした。一時間ほどのトークショーでしたが、内容の濃い

芸術の森で毎年、夏休みと冬休みの年二回行われるのが小中学生を対象とした「クラフト工房・特別講習会」です。内容も豊富で「染物」「手織り」「七宝」「陶芸」「ガラス」など、子どもたちが普段はなかなか体験できない多彩な表現手法に挑戦できるので好評です。

今回の第五十六回大会に合わせて、その活動を一人でもたくさんの方に見学してもらおうと企画しました。

(6) ネットワーク部会

たくさんの方の参加者に支えられながら、札幌大会を開催することができました。みなさんからいただいた貴重なご意見をもとに、今後も研究を進めていきたいと思っています。遠方よりのご参加、ありがとうございました。

ネットワーク部会におきましては、課題別分科会と並行して話し合いをしました。春の委員総会の前に行った会議の中で札幌大会での話題を確認したこともあって、各サークルで行っている日常実践や事業、またその中で課題となっていることなどを持ち寄りながら参加していただきました。また、今回はこの会議の中で、文部科学省・奥村高明調査官と全国造形教育連盟委員長・富安敬二先生をお招きし、全国的な流れ、イギリス視察の話をしていただきました。当初予定していた時間は全部で一時間でしたが、みなさんの熱い思いで大幅に時間を延長させていただきました。

その中で確認されたことや今後の課題になったこと

と（レセプションで話題になったことを含む）を報告したいと思います。

4 大会を終えて

私たちは、造形教育を軽視する傾向に対し、警鐘を鳴らします。大会で創り上げた全ての授業と様々な取組みを通し、未来に訴えます。造形教育を軽視することがあれば、人の心は栄養失調になる。子どもたち同士、子どもと教師、子どもと保護者等それぞれが理解しあい、教育を通して少しでも豊かな未来を築けたらと思います。その絆を支える要の一つに造形教育がなれたらと願っています。

最後に、大会集録を編集していただいた造形連盟の仲間に、深く深く感謝いたします。

●「造形・札幌21」実践事例集も大会に合わせて発行されました。



第57回 釧路大会



大会シンボルマーク

日時 二〇〇七年七月二六日
会場 釧路市立芦野小学校

第57回全道 造形教育研究 大会釧路大会



■釧路大会研究テーマ
「できた!」「いいね!」の喜び息づく時間を求めて
■釧路大会研究主題
つくる喜び・感動する心をつなげていく造形教育

会期:平成19年7月26日(木)
会場:釧路市立芦野小学校



北海道造形教育連盟
全道造形教育研究大会釧路大会実行委員会

研究テーマ

「できた!」「いいね!」の
喜びが息づく時間を求めて

研究主題

つくる喜び・感動する心
をつなげていく造形教育

1 研究主題について

「つくる喜び」と「感動する心」は、まるで呼吸のように循環しながら子どもの中で高まっていく。物質的豊かさに恵まれた環境は一方で子どもたちの精神的豊かさを危うくしている。私たちは、図工・美術の時間は、学校生活の中で自分の「思い」や「願い」を形にする喜び、それを他者から認められるという喜びを直接体験することができる数少ない時間のひとつと位置づけ、子どもたちが「できた!」と喜び、「いいね!」とその感動を伝え合う姿を求めてきた。

しかし、全道的に図工・美術の専門教師が減少しており、「学校に専門の教師が一人もない」、「図工では何を教えて良いのかわからない」という声が大きくなってきている。



この大会で提示した「釧路スタイル」は、小学校から中学校までの九年間の統一モデルカリキュラムであるが、特別な環境も専門的な技術や知識

もいらない、普通の設備があればいい、子どもと教師が共に体験しながら書き加えていっていいという、飾らないシンプルなスタイルにこだわっている。それはむしろ長い年月そういう状況の中で実践を積み上げてきた私たちの集大成でもあり、それが厳しい環境の中で図工・美術教育に取り組んでいる仲間（専門でも、専門でなくても）にきつと役に立つと考えたからである。

本大会において幼稚園から高校まで十一の公開授業を行うことができたのも「つなげていく造形教育」の現れである。

2 研究主題の具現化

視点Ⅰ：釧路スタイル

図工・美術では、他教科と比較して「教師が何をすべきか」が教師の裁量に任せられる部分が大きく、それが「なにをどう教えて良いのかわからない。」等の現状を生み出している。それを解決するために、学習を進める上での基本的な考え方や指導内容を具体的に提示していく必要があると考えた。

「くしろスタイル」には、①九年間の単元配当例、②年間指導計画、③各題材の題材名及び学習目標、④主な学習活動の内容、⑤観点の評価規程が明記してある。

これにより図工、美術の活動に一貫した系統性を持たせ、且つ共通の題材を複数の教師が複数の学校・学級で実施し、共同で題材の研究を行えるというメリットを持たせた。



視点Ⅱ：学習活動を進めていくための三つの

ポイント

「くしろスタイル」では、各題材の評価規程四観点の中から、発想、構想の能力、創造的な技能、鑑賞の三観点を各活動時間の学習の重点として考えた。

○発想・構想の能力「かんがえる・くふうする」

子どもたちは、題材を前に、どうやって表そうかと「かんがえる」。そして、実際に活動しながら「くふうする」。これは、活動の始めから終わりまで内面で繰り返して行われている。それを教師がみとり、支援していくことで、より深まり、子どもたちの表現は高まっていく。

○創造的な技能「かく・つくる」

子どもたちの思いやイメージの広がりなど「心の学力」「みえない学力」を「作品や活動」みえる「学力」として表出させるものの一つが「創造的な技能」かく・つくる」力である。それを伸ばしていくためには教師が道具の使い方、表現技法を正

しく理解し、段階的に継続的な指導をすることが必要になる。

○鑑賞「みる・かんじる」

みることとつくることが循環する中で「かんじるころ」が育まれ、それによってイメージ化されたものが有形化されていく。つまり、美の価値と出会う第一歩が「みる」ことであり、美術は見ることから始まり、見て感じ、見て知るといふことになる。

私たちは実践を通して、「子どもたちがその時間でやるべき事」と「教師が重点的にみとり、評価し、支援する事」を具体化した。（関心・意欲・態度に関しては、ほぼ全ての段階に設定している。）

視点Ⅲ：ポイントのみとり、支援していく

「ふりかえり」

子どもたちは自分なりに実感したり、納得したりし、それを生かしながら主体的に表現していく。それは「ふりかえり」の姿であり、そこには「つくる喜び」と「感動する心」のサイクルが潜んでいると考えた。

そこで、「ふりかえり」を子どもたちと教師が互いに把握し理解することができ、次の活動に生かしていく方法の一つとして、ワークシートやポートフォリオの活用を選択した。

これにより、活動の中からあらわれる素晴らしい「ふりかえり」を活動に十分生かすことができると考えた。

3 研究会から

・授業について

《幼稚園》

「ダイナミックに〇〇！（育てた野菜の葉を使って）」【年長】

授業者：北村 香里、金行 宏江
（大楽毛よしの幼稚園）



体験農場ハウスで収穫した野菜の葉っぱなどを使って海・川・陸・空の生き物たちを作ってダイナミックに絵を完成させた。仲良くしっかりとした活動に参加者の評価が高かった。

「世界に一つだけのおみこしを作って遊ぼう」【年長】

授業者：上村 晴奈、丸山明佳利
（愛国フレンド幼稚園）

季節を感じながら、おみこしの土台にグループで協力して飾り付けをし、オリジナルのおみこしを完成させた。最後は体育館でみんな元気におみこしリレーで遊び体験を深めた。

《小学校》

みる・かんじる

「ならべてならべて（絵の具からの色水づくり）」【一年】

授業者：岩口 玉季（釧路市立鳥取小学校）

赤青黄の三色を使って自由に色水をつくりカプセルに入れて工夫して並べた。子供なりに「きれいな」のこだわりから、自発的に美的秩序が表れる様子が見られた。

かく・つくる

「みてみておはなし〜ふしぎなたまご〜」【三年】

授業者：佐藤 幸（釧路市立芦野小学校）

物語から、不思議なたまごや、そこから何が生まれるかを膨らませ、絵の具やいろいろな画材で描きコラージュした。画用紙をはみ出すほどの創造性あふれる作品が並んだ。

「自然からの贈り物」【六年】

授業者：国井 彩子（釧路市立美原小学校）

前年からクラスで集めた流木や素材を使って、グループで創作。自然の形が生かされた動物、音楽隊などが並んだ。小六ながら、のこぎりや小刀など上手に扱っている姿に、指導力や児童との関係の良さが高く評価された。

かんがえる・く・ふうする

「コロコロゴラート」【四年】

授業者：佐藤 円（釧路市立芦野小学校）

ビー玉を転がして進む面白い迷路を作る。自分



の考えた仕掛けを作るために、素材や切り貼りを夢中で考え工夫する姿が見られた。ヒントコーナーを設けての支援がユニーク。

「ものくるあーと〜水墨画に挑戦〜」【六年】

授業者：亀岡 朗子（教育大附属釧路小学校）

歴史の授業と関連づけて水墨画を導入。技法を一つずつ体験し、その中からモチーフや技法を考え、工夫を加え、宇宙や森、海などの独創的な水墨画が制作された。

《中学校・高校》

みる・かんじる

「日本の仏像彫刻のよさ・西洋彫刻のよさ」【二年】

授業者：杉山 浩彰（釧路市立美原中学校）

前時に仏像のスケッチをするなど準備をしておいてから、掲示された資料を見ながら西洋と日本の彫刻を比較していった。ワークシートで効果的に視点が定まり、全体交流では文化思想の表出の違いについて深まった。

かく・つくる

「抽象彫刻」【二年】

授業者：更科 結希（釧路町立遠矢中学校）

紙パックで型をとった石膏ブロックを、自分の心をテーマに形にしていた。事前に油粘土でエスキーズをつくっておいて、六面図からの荒削りの指導がユニークだった。



「切り絵アート」【2年選択】

授業者：竹本 万亀（銚路星園高等学校）

四角や三角、アーモンド型などの単純な組み合わせによって抽象的で複雑で見応えのある切り絵が出来上がっていった。授業の設定がよく、生徒の実態が考慮されており、意欲的にアートが体现されていた。

「かんがえる・くふうする」

「イメージの箱」【1年】

授業者：免田まゆみ（銚路市立鳥取西中学校）

一文字からイメージを広げた、ウレタンと透明プラ板を組み合わせたアートボックスで、中学一年生とは思えない創造性豊かで完成度の高い作品が出来上がる。一〇〇円シヨップで手に入る素材で実用性にも優れていた。

・分科会から

日常の実践をもとにした七つの提言が発表され、それぞれの視点について活発な議論が展開された。「研究理論と授業、提言が一本化されており、わかりやすかった」や「小・中・高の授業に対する考え方がしつかりとつながっている」という声を多数いただき、「くしろスタイル」を基本とした授業づくりが間違っていないことを再確認した。

特別支援分科会

速矢小・富原小での実践事例をVTR紹介

紹介者：篠木 麻希（銚路町立富原小学校）

今回は初めての試みとして特別支援教育の分科

会を設け、日常の授業の様子をVTRで公開した。

図工・美術の学習は通常の学級と特別支援学級・学校が同じ視点で研究することを可能にするという考えから実現したもの。この考え方は、今後の造形教育研究大会でも継続してほしい。

「みる・かんじる」分科会

提言：日野 道子（浜中町立貫人小学校）

「子ども達がお互いの作品を見てその良さを感ずる手だてとしての問いかけ」

提言：花輪 大輔（教育大学附属銚路中学校）

「美術館における対話型鑑賞教育モデルの開発」

「かく・つくる」分科会

提言：木田るみ子（銚路町立富原中学校）

「ドライポイント」

提言：上野 秀実（銚路東高等学校）

「絵本の制作」

「かんがえる・くふうする」分科会

提言：岩崎 愛彦（千歳市立千歳小学校）

「魅力的な題材」から「魅力的で考える活動」へ

提言：森川 沙織（銚路市立大葉毛中学校）

「超現実絵巻」

4 大会を終えて

多くの参加者を迎え、銚路の夏としては最高の天候のもと、無事大会を終えることができ、また、昨



年の札幌大会からの「新しい流れ」を来年度の石狩・北広島大会へとつなげることができたという手応えを感じた大会であった。

今後は、「くしろスタイル」の指導内容、評価の方法などの実践を重ねる中で継続して加筆修正を行っていききたい。将来的には、各地域、学校、学級で「くしろスタイル」を下敷きにした「〇〇スタイル」が構築され、その地域や子ども達の特性にあった図工・美術の学習が展開していくことで、子ども達が「できた!」と喜び、「いいね!」と感動する声や思いつきが生まれる教室や美術室をもっと増やしていきたいよう研究を進めていきたいと考えている。

第58回 いしかり北広島大会



大会シンボルマーク

日時 二〇〇八年七月二八・二九日

会場 北広島市立大曲東小学校
大地太陽幼稚園

北広島市ふれあい学習センター
(夢プラザ)



第58回 全道造形教育研究大会 いしかり 北広島大会

豊かな心と確かな力を育む造形教育を！



2008.7.28-29

28日 北広島市立大曲東小学校 大ホール棟後側
29日 北広島「夢プラザ」

<http://iart.main.jp/>



北海道造形教育連盟 石狩造形教育協議

研究主題

豊かな心と確かな力を
育む造形教育を！

はじめに「研究大会の目的」

- ◆学習指導要領改訂前、残念ながら「図工美術教育」の価値は低学力論のかけで、ほとんど注目されない状況にあった。美術教育界においては、すぐれた実践や研究が多数なされているにもかかわらず…。
- ◆さらに、「図工の指導はよくわからない」「どう教えるの?」という先生が小学校には意外と多く、中学校では免許外による指導が多いという実態もある。
- ◆この状況に、美術教育の研究団体として教室で課題を抱えている先生方のため何かしなければならぬ。同時に、造形教育の持つ教育的な価値や魅力も伝えたい。
- ◆そこで、私たちは全道の先生に「図工美術の基礎が学べる研究会」と題した案内状を配付した。「美術教育支援」、それがこの研究会開催の大きな目的のひとつである。
- ◆参加された先生方がこの研究会に触れることによって、子ども達がより充実した図工・美術教育を受けることを願っている。

1 研究主題について

① 「美術教育界での位置と研究主題」

「授業何やる?」「どうやるべきなの?」。この素朴な問いに答える大会にしたい。

そのためには、

- 「育みたい力」を明確にする。
- 「心を育てる題材」を用意する。
- 子どもと題材との出会いで意欲を引き出す。
- 子どもの思いや学びをしっかりと受信する。
- これらを繰り返すことで、子どもの中に「豊かな心と確かな力」が育まれていく。
- さらに、子どものために充実した「環境」や「教育課程」を準備する。

② 「心を育てる題材」

「豊かな心を育てる」ために最も大切なことは、どのような題材を設定するかということである。石狩では、「心を育てる題材」を提案した。これは新たな題材開発をするのではない。既存の題材でも「心を育てる」題材にできる。ここが大事な点である。よくある題材でも、設定の仕方によって子どもの学ぶ内容や意欲がまるで違ったものになる。中学校の自画像等はその設定理由により、子どもの学ぶ内容が全く違う。題材設定の理由を本気で考え、この「心を育てる題材」の中で「育みたい力」を育てる。それは、「描かされる絵」と「描く絵」は全く違うからである。

③ 「育みたい力」

学習指導要領での教科の目標は四観点で示されている。石狩ではこの四観点で示されている力を高めるための「核となる具体的な力」を「育みたい力」とした。

ここにあげた「育みたい力」は、一九九五年に発表された石狩の研究(基礎基本ABC)をベースに多

関心・意欲・態度
楽しむ
追求する
つなげる
発想・構想の力
広げる
深める
見通す
つくりあげる力
比べる
選び、決める
バランスをとる
使う
鑑賞の力
感じとる
自己理解
他者理解

数の研究や実践の中から知恵を集め、まとめあげたものである。美術教育の目標に照らした場合、ここにあげた力が全てではなく、特に大事なものを厳選した。育みたい力が核となり、関連しあいながら資質や能力を高め、豊かな心と確かな力を育んでいくことにつながるが、体験を通して、繰り返していく中で育まれていくものである。

この研究では、「育みたい力」を具体化して考えるために「子どもの言葉」を例として示した。これらの言葉は子どもの主体的な意思が働いているときに出てくる言葉である。この研究は「育みたい力」がどう育っているのかを子どもの姿から(子どもの頭や心の中で何がおこっているのか)評価してみようとする提案でもある。

最近の授業研究では、子どもの活動の様子をビデオや写真、行動観察記録をもとに検証することも行われている。「どのような作品か、ではなく、何が育っているのか」ということが大事だからである。この「育みたい力」は「生き生きしていた・熱心にやっていた」という見方を具体的に示したものである。つまり、「子どもの心や頭の中で何が起きているのか」を想定している。また、子どもの絵をもとにしたギャラリートークなどは、絵を通して子どもの姿、学びを知る場でもある。

④ 「教師の受信」

小さな子どもの絵は「心の窓」「子どものお話」

などと言われている。

しかし、基本的には学年が進んでも同じである。子どもの発信を受けとめる教師の感性も高めたい。

教師のこの感性をみがければ、授業はよりおもしろくなる。目の前で子どもは素晴らしいことを思い、考えており、その子らしさが見える。子ども理解のために図工美術の時間は貴重な時間であり、子どもの作品は生きている証なのである。そしてより大事なことは、授業中の子どもの動きやしぐさ、つぶやきなど、子どもの学びを発見することである。



図工・美術の時間が学級経営につながるとよく言われるが、これは図工・美術の授業の中で、「共感する、受容する」ということがその一つの要因だからである。これが、美術教育は人間形成に大きく貢献すると言われるゆえんでもある。

⑤ 「環境」

「環境が人間をつくる」という言葉がある。しかし、意外と語られていないのがこの「環境」である。環境が子どもを育てるといことは、幼稚園で使われる「環境の構成」という考えから学びたいことである。

環境には人とモノがある。この環境づくりが実に重要であることから、本研究大会の指導案に「環境の構成」という項目を入れた。また充実した例として、北広島市の大地太陽幼稚園の環境づくりを紹介しておきたい。

2 第58回全道造形教育研究大会「いしかり北広島大会」

授業者・提言者・ワークショップ講師・助言者・司会者・記録者・運営委員一覧

◎授業（幼：幼稚園、特：特別支援学級、小：小学校、中：中学校、高：高等学校）

校種	授業者	学年	司会者	記録者(運営委)	助言者
幼1	全職員(大増太陽幼稚園)	全児	高松 摩衣(札幌市平和幼)	鈴木 秀幸(江別市対羅小)	伊藤 善彬(道造速観園)
特別支援1	森正人、村上英枝、佐藤芳幸、中田浩子、山本賢祐、矢代ゆかり、羅目敏江(北広島市大曲東小学校)		小森 政美(北広島市広葉小)	石川 祥大(千歳市北栄小)	植木 則子(札幌市常盤小長)
小1	松本 圭正(北広島大曲小学校)	3年	田中 美穂(千歳市緑小)	白沢美知子(江別市いずみ野小)	佐友 俊郎(江別市江別小長)
小2	鈴木 礼二(北広島東部小学校)	4年	淵馬いく恵(江別市上江別小)	塚原智穂子(江別市いずみ野小)	土井 善範(札幌市鴻城小長)
小3	佐伯 晶宣(江別市第三小学校)	4年	駒場 雅子(当別町西当別小)	松原 和枝(石狩市南郷小)	櫻田 豊(札幌市星置東小長)
小4	中村 安奈(北広島北の台小)	5年	前田 尚子(石狩市八幡小)	和田 陽一(千歳市桜木小)	今 裕子(札幌市福住小長)
小5	熊谷 宏子(千歳市高台小学校)	6年	豊田 治子(江別市豊穂小)	渋谷 広美(千歳市桜木小)	安藤 信行(江別市第三小長)
中1	西村 司(北広島緑園中学校)	1年	平井 宣子(江別市中央中)	江田 光子(江別市大森中)	加藤 隆(旭川市台場小長)
中2	野口 裕司(恵庭恵み野中学校)	1年	榎森ふさ美(北広島市広葉中)	田邊 律子(恵庭市恵庭中)	村瀬 千穂(教育大学教授)
中3	山内菜穂子(北広島東部中)	2年	橋渡 真紀(石狩市樽川中)	宮内 朝代(千歳市青葉中)	奥田 泰朗(網走市共栄小頭)

◎提言

校種	提言者	司会者	記録者(運営委)	助言者
幼稚園	三浦真奈美(札幌いなづみ幼稚園)	高松 摩衣(札幌平和幼)	板木 静子(江別市中央小)	伊藤 善彬(道造速観園)
特支	阿部 陽子(千歳北栄小学校)	石川 祥大(千歳市北栄小)	小森 政美(北広島市広葉小)	植木 則子(札幌市常盤小長)
小学前半	平山 一弥(千歳市北栄小学校)	田中 美穂(千歳市緑小)	村田 静己(石狩市緑苑台小)	釜田 恵児(江別市大森小長)
	山口 浩(千歳市東広小学校)	淵馬いく恵(江別市上江別小)	山田 順子(江別市第三小)	佐友 俊郎(江別市江別小長)
	宮田 珠世(札幌市円山小学校)	駒場 雅子(当別町西当別小)	菅藤 俊夫(北広島市大曲小)	土井 善範(札幌市鴻城小長)
小学後半	岩崎 愛彦(千歳市千歳小学校)	前田 尚子(石狩市八幡小)	佐伯 晶宣(江別市第三小)	安藤 信行(江別市第三小長)
	湯浅 大吾(札幌市伏見小学校)	中澤 孝仁(岩見沢市第二小)	中村 安奈(北広島市北の台小)	櫻田 豊(札幌市星置東小長)
	土橋 直美(更別村上更別小学校)	前田 治子(江別市豊穂小)	熊谷 宏子(千歳市高台小)	今 裕子(札幌市福住小長)
中学前半	川名 義美(当別町当別中学校)	平井 宣子(江別市中央中)	藤山 千文(千歳市真町中)	塚野 昭臣(札幌市福穂中長)
	大高 雅子(札幌市柏中学校)	榎森ふさ美(北広島市広葉中)	村中 幸治(石狩市聚富中)	奥田 泰朗(網走市共栄小頭)
	佐藤 博行(江別市江陽中学校)	橋渡 真紀(石狩市樽川中)	山田 宏則(千歳市富丘中)	藤田 光泰(千歳市富丘中長)
中学後半	井上 哲義(江別市第二中学校)	浅田 聡(江別市野幌中)	西村 司(北広島市緑園中)	加藤 隆(旭川市台場小長)
	中島 圭介(旭川市東光中学校)	水野 一英(札幌市宮の森中)	天谷 道子(恵庭市恵明中)	佐藤 祈(三笠市新報内小頭)
	工藤 由香(恵庭市柏陽中学校)	野口 裕司(恵庭市恵み野中)	松尾もと子(恵庭市恵北中)	村瀬 千穂(教育大学教授)
高校	松井 茂樹(北海道立北広島高校)	中野 崇(石狩市望来小頭)	池田 元治(千歳市桜木小頭)	伊藤 光悦(北理大学講師)

◎ワークショップ

番号	講座名	講師	運営委員
1	水彩入門	竹津 昇(千歳市東千歳中)	松原 和恵(石狩市南郷小) 小野寺理恵(石狩市八幡小)
2	版画入門	濱野三喜男(千歳市北郷小)	吉田 博(江別市豊穂小) 鈴木 礼二(北広島市東部小)
3	簡単なアニメ制作	野口 裕司(恵庭市恵み野中)	山田 宏則(千歳市富丘中) 西村 司(北広島市緑園中)
4	ハンドペイント	伊藤 善彬(道造速観園)	相尾 美和(北広島市西の里小) 佐伯 晶宣(江別市第三小)
5	子どもの絵のチャットトーク	山崎 正明(千歳市北斗中)	村中 幸治(石狩市聚富中) 工藤 由香(恵庭市柏陽中)
6	授業実践資料一提言で使用のピアノ		村田 静己(石狩市緑苑台小) 松本 圭正(北広島市大曲小)
7	DVD一石道造制作実技指導		岩田ひとみ(江別市第三中) 斎島 裕二(北広島市西部小)
8	教材・教科書業者コーナー		高橋 康宏(江別市第一中)
	ネットワーク会議		岩崎 愛彦(千歳市千歳小)

3 記念講演

講師 東京未来大学 大橋 功氏
演題 「授業づくりで大切なこと」



4 研究会から

研究会終了後、山崎正明研究部長は「私達が変わったことは授業の中で育みたい力を意識するようになったこと、授業を見る目が変わったこと」と述べている。研究会から公開授業の一部を紹介する。

◆幼稚園「つながる人と自然、ようこそ大地 太陽ひろばへ！」

園の慣れ親しんだ自然の中で本気で遊ぶ、安心して気持ちを開放的に存分に楽しむ、をねらいとし、「土の村・森の村・はらっぱの村」での授業を公開した。参観者からは「素晴らしい保育」との感想をいただいた。また分科会では、小学校とのつながり、絵の描けない子、絵の具の扱い等が話題となった。助言者からは、「感動が原点、素材な体験活動、手先の運動、遊びを大切に」と貴重なお話をうかがった。

◆特別支援学級「あつめよう、ならべよう、何に見えるかな？」（自立活動・造形遊び活動）

児童にとって身近で様々な素材の遊具を利用して自由に造形遊びを展開した。これまで週に九十分程度の造形活動「てしごと」を学習しており、特別支援教育の自立活動という指導領域の中に位置する学習として計画した。参観者からは、「教育の原点を見たような気がした」との感想をいただいた。また分科会では、「イメージをふくらませる手立て、子どもに対する言葉かけ、教師の気を付けていること等が話題となった。助言者からは、「だめ、いけないとい

う禁止用語が無く、意欲的な活動が展開されていた。自立活動と造形活動それぞれの教育課程をふまえてしっかりとした授業構成することの大切さ」が話された。

◆小学校4年「あすかの森はワンダーランド」 （絵に表す）

学校近くの飛鳥山公園の森から発想し、自分達だけの楽しい森を考え絵に表す授業である。参観者からは、「参観者が見ていて楽しいので、描いている子どもたちはもっと楽しいと思う」との感想をいただいた。また分科会では、グループ学習での児童の編成、評価、ダイナミックな活動への取り組み等が話題となった。助言者からは、「育みたい力が何かはつきりし、誰でもできるという観点での親切な指導案であり、教師は一度このような仕事をしておくべき、授業でのアイデアもよかった」と評価していただいた。

◆中学校2年「マイ ハート」 （スクラッチ技法による心象風景）

進級に伴う学級編成での人間関係づくりや部活動での指導的立場になるこの時期に様々な心が揺れ動き悩み込む生徒が少なくない。この様々な思いを通常技法である陰影・黒を描き加えるのではなく光・白を加える逆の表現方法に取り組ませる授業である。参観者からは「黒が白くなる魅力的な題材である」と感想をいただいた。また分科会では、「用具の扱い方、思いの引き出し方、光のテーマの難しさを話題となった。助言者からは、「授業開始の引き締めが良い。授業は生徒指導の成立が大切。表現の線を生徒にどうわからせるか」というお話をいただいた。

5 大会を終えて

幕田充泰大会委員長（千歳富丘中学校長）が連盟報に「予想を大幅に上回る参加をいただいた。参加者の『これからも頑張っていこうと思った、元気・パワーをいただいた』との声にやってよかった」と述べている。提言、助言で全道からお手伝いをいただいたこと、二日日程で授業、提言、ワークショップ、講演と内容の濃い研究会にできたという点では、満足いくものであった。研究の課題については、その後も石狩管内教育研究会図工美術部会として、研鑽を続けているところである。



第59回 上川・旭川大会



KAMIKAWA
ASAHIKAWA
大会シンボルマーク

日時 二〇〇九年七月二十八日
会場 旭川市立永山中学校

第59回 全道造形教育研究大会 上川・旭川大会



身体で感じ・心はずませ・創造する喜びを
□会期 2009. 7. 28 (火)
□会場 旭川市立永山中学校
<http://zoukeinet.web.fc2.com/>

1 研究主題

身体で感じ・心はずませ・

創造する喜びを

～「いま・ここ」で「つなげる」

造形教育を求めて～

2 研究主題の具現化

(1) はじめに

子どもたちの感性は、磨けば磨くほど光り輝く原石のようなものです。より輝かせるためには「そこにあるものを感じる」ことにとどまらず、感じている時点で途絶えることなく進行している活動中の現実・モノやコトに関与している子どもたちが子どもたち自身の能動的な行動で得られる現実、すなわちアクチュアリティを、子どもたちに与えることが大切になると考えました。

そのために子どもたちが身体で感じとっている五感や、過去の経験から得た知識を生かす、つまり身体で感じる出合いをさせなければなりません。出合いによって、「なんだか楽しい」「これっておもしろい」など心を動かし、心はずませていきます。それは最初の出合いの場面だけではありません。

○素材に浸ること、心はずませる。

○友人や先生など、他者との交流で心はずませる。

○自分なりに新しい意味（価値）を獲得したことで心はずませる。

その後のプロセスの中にあるさまざまな場面において

て、子どもたちが心をはずませるように活動を設定し、支援することで、子どもたちは自ら追求する方法を考えたり、表す技術を自分のものにしていこうとしたりするなど、創造への意欲を高めることができるのです。

創造する創造活動とは、新しい意味(価値)を見いだすプロセスや瞬間のことです。子どもたち個々によって、その場面はさまざまであり、個に応じた創造が起きて初めて、子どもたちは自分なりの感じ方・考え方・やり方を強く意識したり実感したりするといえます。それは、言い換えると「自己のあり方を探り見いだす価値判断の力」を身に付けようとする行為そのものなのです。その行為を通して子どもたちは「実践力」を身に付けていきます。そのような創造活動を体験して子どもたちは、「楽しい」「おもしろい」「できた」「うれしい」「もっとやってみよう」というように、さらに興味関心を高めて創造活動を愛好していくようになるはずで、喜びをそして、それを連続と「つなげる」ことにより、子どもたちにとって学びの時間、学習の場は「喜び」を見いだす瞬間の連続になります。子どもたちが見いだした「喜び」は、造形活動が「好き」という純粋な思いにつながり、増幅・深化されていきます。

(2) 研究主題について

「身体で感じる」出合い。「心はずませ」深める思考。新しい意味(価値)を見いだし生み出される「創造」。「喜び」を得る一連のプロセスで出合い・感じることが出来る新たな自分。造形活動のプロセス全体が、アクチュアリティを感得し、獲得する場となります。知識・理解を机上で積み重ねていく教

科とは異なる「学びの姿」が私たちの教材にはありません。自らの身体で「モノ」に触れ、「コト」と向き合い、自分なりの受け入れ方で感受し、経験から想起し、実感しながら見る・考える・表す。目の前のひとりの子ども。かけがえないその個には、それぞれの歴史があります。どのようなことに遭遇し、経験し、何を見、感じてきたのか。それらの総合体としての個ですから、モノ・コトの見方・感じ方・考え方・好みも違ってきます。そのような子どもたちが集まっているのが学習の場で、その時点で、ここでしか存在・成立しない学びの時間です。同じモノ・コトを前にしても異なる反応、受け入れ方、想起するもの・されること。このような差異が集まった場で繰り広げられる、一つ一つの瞬間、学びがもつ意味は重要だと私たちは考え、着目することにしました。

私たちは、このような差異がぶつかり合い、からみ合い、影響し合う「いま」という時間的側面、そして様々な出合いと学びが生じている場として「ここで」に着目し、それらの時と場で獲得される様々な要素や学びとともに、子どもたちの「出合い」と「思い」と「喜び」を、「わたし」と「あなた」と「みんな」を、「きのう」と「いま」と「これから」を、連続と「つなげる」ことが、造形教育における「生きる力」を育むことにつながると考えています。そのために、教師側ができる最大の働きかけを行います。「出合い」と「思い」と「喜び」を「つなげる」出合いによる感動を、表現への意欲の高まり・思いの深まりにつなげる。思いの深まりを創造の喜び、そして表現が好きという感情につなげる。「わたし」と「あなた」と「みんな」を「つなげる」

なげる」つなげる子どもたち個々の内的な思いを、他者との対話交流などによるインタラクティブでつなげる。そして広がる共感につなげる。「きのう」と「いま」と「これから」を「つなげる」過去の体験や子どもたちが身に付けていることに、いま、ここで獲得するアクチュアリティや、造形教育独自に子どもたちに身に付けさせることができる能力を積み重ねて、活動を通じた成長と生きる力の獲得につなげる。

以上三点を強く意識して、研究の内容を工夫することにより、私たちが目指す子ども像に近づくと、考えるのです。目指す感性豊かに出合い、感じ、考え、思いや美を追い求め、自己と他者とのつながりの中で新しい子ども像意味(価値)を見いだし、造形活動の喜びを味わう子ども。

(3) 研究の内容について

- 視点1 身体で感じる題材の設定
- ① 身体で受け取る題材開発と追求
- ② 地域や文化のよさを実感する題材の開発と追求
- 視点2 心はずませる活動場面の設定
- ① 子どもの心を揺り動かす出合いの演出
- ② 思いをふくらませる活動場面と支援のあり方の追求
- ③ 他者との対話の工夫
- 視点3 新しい意味(価値)を獲得させる活動場面の設定
- ① 工夫や試行錯誤により、思いや美を追求する活動の設定
- ② 造形活動の基礎を適切に身に付けさせる指導
- ③ 他者との対話の工夫

視点4 個に応じた指導

- ① プロセス全般で個の見方・感じ方・考え方を伸ばす支援の工夫
- ② 特別支援教育のノウハウを生かした支援の工夫
- ③ 指導と評価の一体化

3 研究会から

本大会における研究は、前回の旭川大会における研究主題「生の造形教育」を振り返り、子どもたちの生きる力をより育むための新たな課題を探ったことが、ひとつの出発点でした。部員全員にアンケートをとり、子どもたちの現状、そして「どのように育ててあげたいか」というような部員たちの思いを反映させながら、前回大会の研究内容で継承すべきもの、改善すべきもの、新たに意識するべきことを考えた末、本大会テーマ「身体で感じ・心はずませ・創造する」喜びを、研究主題「いま・ここで」「つなげる」造形教育を求めて」をまとめました。

本研究自体は四年次計画であり、本大会の公開授業は三年次の「積極的な実践交流」にあたるものですが、現段階での上川・旭川の研究を発信することで、借越ながら北海道の図工・美術に携わるさまざまな方々の一助となること、また私たちにとても貴重な勉強の場となることを期待して本大会を迎えました。

(1) 公開授業について

各領域では、授業者を中心とし、大会テーマ・研究主題を基にして二年前から授業実践、評価・改善を繰り返して、領域ごとの視点と具体的な学習内容を



明確にしていきました。その過程を通し、研究主題の理解、造形活動のあり方、支援方法などを、各部員が共有し、共同研究を進めることができました。

(2) 提言について

本大会では、提言のほとんどを、各公開授業を作り上げてきた領域別部会の部長および部員が担当し、本大会に向けての研究概要を総括する内容で行いました。公開授業は日々行っている研究の一端として押さえており、そのため研究の全体像をお伝えすることがとても重要と考えたからです。結果として、よりわかりやすく上川・旭川の研究をお伝えすることができたのではないかと思います。

また、他地区や美術館からの発表もいただき、とても充実した内容になり感謝する次第です。

(3) 分科会について

領域毎に七つの分科会を設定しました。討議の柱は「感性豊かに出合い、感じ、考え、思

当日は、各公開授業とも大会テーマに設定した「身体で感じ・心はずませ・創造する」喜びを子どもたちに実感させるものになったと思います。また、授業を通して明らかになった課題もありますので、今後の改善に向けてさらなる授業作りを進めていきたいと考えています。



工夫する形で設定しました。

それぞれ、多くの方にご参加いただき、とても活発な研究討議を進めることができました。公開授業に關しての質問に始まり、貴重な鋭いご指摘、実践なさっている学習活動を紹介してくださるなど、実に意義深い時間となりました。

4 「つなげる・広がる連携講座」・「題材屋台」

実行委員会中心に、二つの試みを行いました。研究主題から考えると、「いま・ここで」生きる子どもたちにとって、地域や文化との「つながり」は不可欠です。「つなげる・広がる連携講座」は地域の美術館とどのようにつながり、どのように生かしていくかを考える提言として提言していただければ幸いです。

「題材屋台」については、どんな題材をどのように教えていけばいいのか分からないという思いを持っている先生方のヒントになれば、という考えで設けさせていただきました。どちらも、多くの方のご参加により、盛況の内に終えることができました。

(1) 連携講座

北海道立旭川美術館、旭川市彫刻美術館、北海道教育大学旭川校との連携の中で教育機能を持つ地域の関係機関と私たちの造形教育との関わり方について積極的な交流と情報発信の場としていきたい。

A 「美術史利用のススメ」 二階視聴覚室

講師 中村 聖司 氏

道立旭川美術館・学芸課長

B 「彫刻はむずかしい？」 一階多目的教室

講師 鎌上 翠 氏

旭川市彫刻美術館・学芸員

C 「授業に活かせるアートゲーム」 体育館

講師 南部 正人 氏

北海道教育大学旭川校・准教授



(2) 「題材屋台」

- ①木工バンドでアート
- ②キャラクタートーク講座
- ③絵本作りトレーニング
- ④ステンドグラスのペンダント
- ⑤コラグラフ
- ⑥ミニ彫金七宝
- ⑦花畑工場
- ⑧グルーガンで遊ぼう
- ⑨ひろがる・つながる糊棒造形
- ⑩シルバークレイでつくる

5 大会を終えて

昨年の七月二十八日に行われた上川・旭川大会は、全国、全道各地から四〇〇名もの皆様のご参加を得て無事終了することができました。ここに厚くお礼申し上げます。

五年ぶりに旭川で行われた全道造形教育研究大会ですが、今回は上川と旭川の仲間が一緒に開催する初めての研究大会となりました。

上川・旭川大会は、子どもたちの身体で感じる対象との出会いや、他者とのかわりを大切にしながら感性を大きくむぎみへの支援を通して、子どもたちが新たな意味や価値を見いだし、「創造する喜び」の獲得をめざす取組でした。

この実践に向けて、大学や美術館など地域の教育的機能をもつ関係機関との連携が実現したことは、これからの造形教育のあり方の一つとして示すことができたのではないかと考えています。

大会当日の授業では、緊張しながらも、自分の感じたことを言葉に出して発表したり、できあがって



いく過程をグループで確かめ合いながら完成に近づけていく子どもたち、鑑賞の授業では、作者のサブライズ登場に目を輝かせ、作者と積極的に交流する姿など、様々な場面で体験的なプロセスを大事にした授業づくりに取り組んできた実践の一端を見ていただくことができました。また時間のない中ではありましたが、題材屋台には多くの先生方にご参加をいただき、明日の授業につながるヒントを持ち帰っていたのではないかと思っています。

研究協議についても、どの会場も多くの参加者の皆様によって私たち上川・旭川の実践を全道各地の実践と結びつけていただき、熱心な協議の場となったことに重ねて感謝申し上げます。


本研究大会の成果と課題については、昨年の十月に行われた実行委員会総会及び研究各領域部会での協議をふまえ、別頁に掲載しています。このまとめが、ご参加をいただきました皆様の造形教育活動に少しでも資することを念じております。

研究大会は、人と人を近づけ大きなエネルギーを生み出します。本研究大会は、研究テーマにも通じる上川と旭川の仲間がつながり、造形教育という共通の活動を通して、全道の皆様とつながりの輪をひろげることができた大会だったと実感しています。

全道各地よりご参加をいただいた皆様、そして関係機関各位、授業の公開や提言、助言を快く引き受けていただきました次回開催地・函館市をはじめ上川管内、旭川市の幼稚園、各小中学校、高校、大学の教職員の皆様、児童生徒、保護者の皆様に、改めて心より感謝を申し上げます、大会終了のお礼と報告にかえさせていただきます。

第60回 函館大会

6 全道造形教育研究大会
函館大会

0	創造!	
th		ときめき!
感性と知性の出会い	心うるおす造形活動	実感!
<small>主催 北海道造形教育連盟 函館市美術教育研究会 共催 函館市立昭和小学校 函館市立陽南小学校 後援 北海道教育委員会 函館市教育委員会 協賛 函館市立昭和小学校 函館市立陽南小学校</small>		平成22年7月28日(水) 会場 函館市立昭和小学校 太陽の子幼稚園



大会シンボルマーク

日時 二〇一〇年七月二十八日
会場 函館市立昭和小学校

(全体会・小中学校公開授業・講演・分科会)
太陽の子幼稚園
(幼稚園公開保育)

○大会テーマ

創造! ときめき! 実感!

○研究主題

～感性と知性の出会い 心うるおす造形活動～

[主催]

北海道造形教育連盟 函館市美術教育研究会

[主管]

第60回全道造形教育研究大会函館大会実行委員会

[後援]

北海道教育委員会 函館市教育委員会 渡島美術教育研究会

檜山造形教育研究会 函館市幼稚園協会

公 開 授 業

校種・学年	分科会名	題 材 名	授 業 者
幼稚園	年中	かたちづくりとき 夏だ！海だ！！	稲垣 絵梨（太陽の子幼稚園）
	年長	ひびきあうとき キャンプだホイ！！	小川原 愛（太陽の子幼稚園）
小学校	1年	かたちづくりとき ともだち いっぱい	堂前 智子（函館市立昭和小）
	4年	ひびきあうとき 光でうつし出す世界より	水島 賢久（函館市立中の沢小）
	1年	つながるとき わくわくこうせつえん	中谷 文武（函館市立高丘小）
中学校	1年	かたちづくりとき 100色色相環に挑戦！！	佐々木 壮一（函館市立的場中）
	3年	ひびきあうとき 心を動かす形をつくろう	九千房政光（函館市立旭岡中）
	3年	つながるとき 母校の歴史に名を刻め！ ～50周年モニュメントを考える～	櫻井 純（函館市立深堀中）

分 科 会

番号	分科会名	提 言 者	助 言 者	司 会 者	記 録 者
1	幼稚園 かたちづくりとき ひびきあうとき つながるとき	吉野 貴子 （函館市立戸井幼稚園）	小平 征雄 （道教育大学函館校教授） 佐藤 篤正 （亀田ゆたか幼稚園長）	小林 恵理子 （道教育大学附属函館幼稚園）	阿部 真琴 （函館市立五稜中）
2	小学校 かたちづくりとき	山田 光 （函館市立あさひ小） 松田 恭子 （道教育大学附属函館小）	村國 壽英 （八雲町立相沼小校長） 谷口 光伸 （江差町立南が丘小教頭）	佐郷谷 滋 （函館市立中の沢小）	西 貴子 （函館市立千代ヶ岱小）
3	小学校 ひびきあうとき	小笠原 博子 （函館市立あさひ小） 橋本 英子 （帯広市立広陽小）	細川 敬太郎 （北斗市立久根別小校長） 篠原 寛 （札幌市立西小校長）	三品 充子 （函館市立中央小）	久保杉 由佳 （函館市立あさひ小）
4	小学校 つながるとき	赤坂 巖男 （函館市立中の沢小） 石岡 寿子 （松前町立白神小）	山本 良子 （函館市教育委員会事務局総務課主任） 船橋 恭二 （七飯町立大中山小教頭）	高島 純 （七飯町立大沼中総務谷分校）	後藤 博子 （函館市立上湯川小）
5	中学校 かたちづくりとき	木村 麻岐 （北斗市立浜分中） 中井 一夫 （道教育大学附属旭川中）	佐藤 昌彦 （道教育大学札幌校教授） 泉 雄大 （稚内市立天北中教頭）	笠松 英治 （函館市立戸倉中）	林 弘実 （函館市立湯川中）
6	中学校 ひびきあうとき	眞鍋 幸恵 （上士幌町立上士幌中） 平井 歩 （札幌市立啓明中）	花岡 康成 （今金町立種川小教頭） 西岡 裕英 （道教育大学附属函館中教頭）	岩館こずえ （函館市立亀田中）	米田 康子 （函館市立湖見中）
7	中学校 つながるとき	冨尾 拓 （道教育大学附属函館中） 山崎 正明 （千歳市立北斗中）	仲井 靖典 （函館市立雲雲中教頭） 佐々木 幸 （道教育大学訓導校教授）	三谷 龍司 （函館市立北中）	長峰 詠子 （函館市立西中）

講演

演題

「子どもの世界をとらえるまなざし」

講師

国立教育政策研究所教育課程センター教育課程調査官
文部科学省初等中等教育局教育課程課教科調査官

奥村 高明 氏

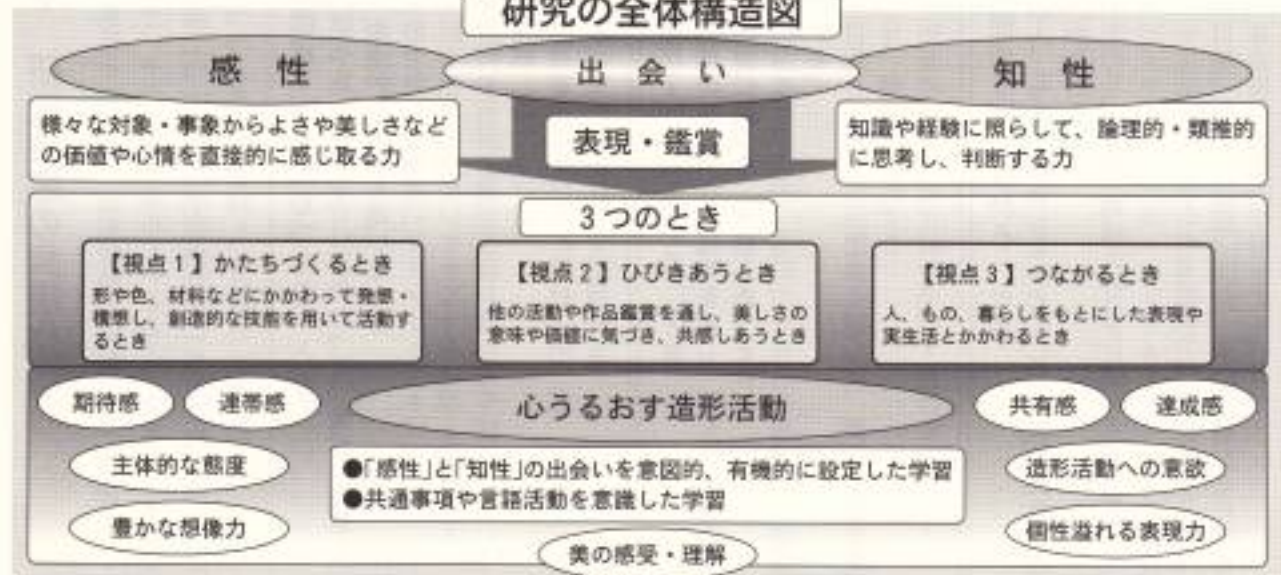
プロフィール

宮崎県内小中学校教諭、附属小学校教員、宮崎県立美術館学芸課主査を経て現職。二〇〇八年告示の小学校学習指導要領図画工作や二〇一〇年通知の学習指導要領改訂に携わり、これまでに各都道府県政令市等で美術教育に関する講演や研修会指導を行っている。

著書論文多数、近著に「子どもの絵の見方（東洋館）」「造形活動における相互行為分析の視座（日本美術教育連合）」「上野行一との共著で「モノリザは怒っている」鑑賞する子ども（まなざし）」「淡交社」」「テートの美術館活用術」鑑賞教育の手引き」（美術出版社）」「出版準備中」等がある。



研究の全体構造図



1 研究主題について

大会テーマ
創造！ときめき！実感！

研究主題
**感性と知性の出会い
心うるおす造形活動**

本研究大会を開催するにあたり、私たちは、子どもたち自身が、自分なりの美しさをみつけ、つくりだそうとすること、造形体験や相互の認め合いから喜びを味わうこと、活動が実生活に生かされると体感することが、造形的な資質や能力の育成を図る上で大切であると考えた。

そして、子どもたち一人一人の人間性を磨き、生涯にわたって必要とされる豊かな情操を培っていくことが、やがては未来社会を豊かで実りあるものにしていくという確信のもと、造形教育の果たす役割や重要性を広く発信していくことをねらい、本大会テーマ・研究主題を設定した。

「創造！」

自分なりの美しさをつくりだそうとすること

「ときめき！」

自らの造形体験や相互の認め合いから得られる

喜び

「実感！」

美を求める行為が達成感や造形活動が実生活で生かされることの体感

私たちは、これまでの研究の中で、造形教育における「感性」を以下のように定義付けてきた。

「感性」とは
様々な対象・事象からよさや美しさなどの価値や心情を直接的に感じ取る力

しかし、よさや美しさを感じ取る心がそなわっていても、技能が十分でない場合や、美的な価値について相互に認め合ったり共感し合ったりすることが十分でなく、表現や活動に生かされていない場合も多くみられた。

そこで、造形活動をさらに活性化させるために、「知性」に着目し、以下のように定義付けてみた。

「知性」とは
知識や経験に照らして、論理的・類推的に思考し判断する力

より豊かな表現や活動を生み出すためには、この「感性」と「知性」を意図的かつ有機的に関連付け、一体化させて指導することが重要であると考え、「感性と知性の出会い」とした。そして、子どもたちが、授業を通して達成感、共有感、必要感を味わい、造形活動が実生活において生きて働くことを実感する瞬間の積み重ねを「心づくるおす造形活動」とおさえた。

「感性と知性の出会い心づくるおす造形活動」とは
学習において、感性と知性の出会いを具体性をもって意図的、有機的に設定し、子どもたちがもっている感性や知性を揺さぶり、心に働きかけていくこと

2 研究主題の具現化

感性や知性は、造形活動の両輪として機能すること、その特性を高めていくことができる。そこで、図画工作・美術の学習内容を「感性と知性が出会う三つのとき」に整理し、研究の視点とした。

【視点1】かたちづくりのとき

- 形や色や材料などにかかわって、発想・構想し、創造的な技能を用いるとき
- ・形や色などを用いてイメージする。
- ・形や色などを用いてテーマを発想・構想する。
- ・材料や用具の適切な取り扱い方や技法について理解し身につける。
- ・共通事項に注目した題材（色、形、イメージなどの美的関係性）で学習する。

【視点2】ひびきあうとき

- 自他の活動や作品鑑賞を通し、美しさの意味や価値に気づき、共感しあうとき
- ・自分なりの美的、造形的な見方を発見し、認識する。
- ・自他の活動や作品鑑賞を通して、美的価値を発見、創出、追究する。
- ・相互の感じ方の比較や受容・批評などをする。

【視点3】つながるとき

- 人、もの、暮らしをもとにした表現や実生活とかがわるるとき
- ・友だち、家族、地域人材などに関わる表現をする。
- ・バリアフリー、ユニバーサルデザイン、機能性や生活などにかかわる表現や探究的学習をする。
- ・自然、歴史、伝統、文化、国際理解などに関わる表現や探究的学習をする。

3 大会を終えて

事務局長 瀧本 伸幸

第六〇回全道造形教育研究大会函館大会が、全国および全道各地から多数のご参加をいただき、盛会のうちに終了しました。造形教育に情熱を傾注される皆様のご尽力に、衷心より感謝申し上げます。さて、このたびの大会では、人間にとって不可欠である「感性」と「知性」を有機的に関連づけた実践に取り組みました。

具体的には、「共通事項」「言語活動の充実」「地域素材・伝統文化」など今後、重要視される内容を意識しながら、幼稚園二、小学校三、中学校三の計八つの公開保育・授業、そして十三の提言を行い、新学習指導要領の完全実施に対応した授業構築のあり方を提案させていただきました。

公開保育・授業では、学ぶことに喜びを感じ、つくりだしながら美しいのかを考え、実生活に生かそうとし、心をうるおす子どもたちの姿をご覧いただきました。また分科会では、今日求められている造形教育のあり方について、多くの皆様の貴重なご指導とご助言をいただきました。

本大会で得られた成果が、次年度、札幌における全国大会に引き継がれ、今後の造形教育の発展・充実につながっていくものと大いに確信しております。大会開催にあたり、講演において造形教育の今日的な課題について貴重なご示唆をいただきました文部科学省初等中等教育局

教育課程課教科調査官 奥村 高明先生をはじめとし、北海道教育委員会、函館市教育委員会、渡島美術教育研究会、檜山造形教育研究会、函館市幼稚園協会、他、関係機関等には、絶大なるご支援とご協力を賜りましたことに、厚くお礼申しあげます。





造形



ひろば



ずっと 気になっていいることを
書いてみたくなりました



札幌市立光陽小学校長

土井善範

○手間ひまって 時間と労力をかけること……

とっても大事なんだから

「あの有名シェフおすすめの 誰にでも簡単につくれる レシピで あなたも名コックに……」というようなフレーズが雑誌の表紙に踊っています。解説のとおり材料を用意し、分量も時間もすっかりと守れば、そこそこおいしい料理が出来上がるといふわけです。「かんたんアート! (かんたんふ)」
「インスタント・アール」等々もあるようです。「手間ひま掛けずにアーティスト気分が味わえる……」。忙しい現代人の一時の楽しさの享受や癒しにはうってつけの言葉が並びます。もちろん、遊びの要素もあるのです。全否定はしませんが、片手間といった感じがします。なにせ忙しくて疲れていて時間がないのですから。「簡単・インスタント・難しくない・あまり考えなくていい」
「時間が必要ない・便利・楽(らく)・それなりの気分が味わえる」というよう

うな価値観が世に現れて久しい。このような世の価値観の中で、子どもたちが暮らしているとしたら……と考えた時があります。いや、実は今もその考えは進行形で、世の中の簡単・便利・考えなくて楽(らく) 指向は全然おさまりません。本来、手間ひま掛けなければならぬことと、手間ひまかけなくともよいことが混然となり、やみくもに子どもの成長の土台となる生活や遊びにまで影響を与えているとしたら……。手間ひまや時間がかかることをいやがり、面倒くさいと感じる子どもがいるとしても当然のことと思わなければいけません。ああ……しかし、嘆いても、叱ってもどうにもなりません。そこからの出発となります。保護者にお話する機会があれば、生活の中で一つでも「手間ひまをかける」大切な経験を子どもに必要なことを伝える必要があるのではないのでしょうか。

今の子どもたちには、ちょっとした手間ひま(時間と労力が必要)をかけることで、楽しい造形活動ができることから始めて、喜びや満足感を大切にしていって、やがてすっかりとした構想を基に、主張のある表現へと導いていく必要があると思います。

○すごい仕事してるんだという自覚と誇りを

我々ももっと全面に出してもいいんじゃないかな。私たちは未来を担う子どもたちの成長にかかわる大切な仕事をしていきます。そして、さらに私たちは「人間の魂の発露である。造形」にかかわる仕事を担っている「こと」に、もっと誇りを持たなくてはいいかと思えます。難しい言い回しになりますが、私は子どもが「造形」という深く美しい世界に触れて、

楽しく、ひたむきな学びの中で、自分がより自分らしくあることへの認識を高めていく道程ではないかと思えます。そこへと導くのが私たち教師の役割と思えます。「自分を表現することが楽しい」というこの個々の自覚(自覚)を促すことを意識して授業に臨まなければならないと思います。もう少し言うとうと、「アイデンティティ」の確立に大きくかわわっていると云えるでしょう。ですから、みんな同じレシピで「ハイ・チョイ、一丁上がり!」と云う、ただの「物作り」、「作品」ができればよいというものではありません。ここに大きな落とし穴があるので。教師が言った通りに描いたからいいわけではありません。一人ひとりの思いやこだわり(魂の発露)があるのかどうかを探る必要があるのではないのでしょうか。

○「知」と「情」という両面で「学び」を

ずっと考えてきたんですけれど……

私は、時折「うまく描かせるコツは何かありますか?」という質問を受ける時があります。そのような時、「子どもの思いをふくらませること……。」と言いますと、がっかりする方が多いようです。①「しなさい②次にここからこのようにしなさい③まだうしてはいけません……。」のような描かせ方を知りたいようなのです。まさに、インスタントですね。これでは、子ども自身が発見したり、工夫したり、色の選択をしたりといった学びが成立しません。本来の造形とはほど遠いところのものなのです。これじゃまるで料理教室のレシピ集めですね。

また、もう一つ、コツではありませんが「授業の中で、いつも「情」と「知」を同時に大切にしてい

います。そのような窓を通して見てみると、普段とは異なった見え方ができます。」と言います。これも、分かりづらいことですが、「情」は感覚や情緒・感情、「知」は知識・知性、造形文法といった思考領域を指します。例えば、実際、自分で絵を描く時、いつもこの画面で揺れ動くことに気づきます。設計図があつて順番に進めていって完了、完成になるわけがない。そこにヒントを見付けたのでした。最初は、感覚で描いていたのが、ふと考える。もっとこうしたいという欲求がでてくる。そこで思考がはじまる。主のものを目立つようにバックの色とタッチを変えよう……とか。でも、待てよ。構図で目立たせることはできないか……とか。この表現過程は、明らかに感覚と知性とで成り立っています。感覚的な子どもには、知的情報を。知的な活動傾向の子どもには、情的感覚的な刺激を。もともと本人が持っている傾向性をもとに、互いのよさがスパイスとなつていくんじゃないかと。

子どもたちの中にも、この両面は濃度の差はあるとしても、場面、場面で、あるはずです。私たちのかわりのポイントもここにヒントがあります。題材の出会いを大切にしているのは、感覚的に「あ、すこい。面白そう。」「あれ、不思議だな。」などの好奇心や美的な感動を引き出すことを大切にしているからです。「どうしたら……？」は方法や材料など知的な思考の流れです。いろいろな学習には大抵の場合、このような両面が 幾度となく表れています。子どもの感覚や思考に沿った学習の流れや支援を心がけることが、充実した学習には欠かせないのではないかと思っています。

「時間の庭」を回想する



北海道教育大学岩見沢校准教授

阿部 宏行

教職生活三十年余りを経て、今思うことは、造形教育連盟の一員に加えていただいたことが、自分の人生を豊かにしたということ。私にとっての「時間の庭」は、人との出会いでした。教職に就いて出会った子どもたち、同じ職場を共にした同僚たち、そして、造形教育連盟を通して出会った全道・全国の仲間たちが、「時間の庭」で鮮やかな色彩を放ちつつ咲き誇っています。

六十年の時を刻んだ北海道造形教育連盟の多くの方々から学んだことが、今の「わたし」をつくりあげています。

平成二十一年四月から現在の職場に就き、六十年前の北海道造形教育連盟黎明期の様子を記念誌でひも解きながら、多くの先達が苦心された跡を知る機会を得ました。設立の秘話、第九回の全国大会が札幌で開催される経緯、会の発展充実へ貢献された方々の思いなど、先達一人一人の使命感や情熱に圧倒されます。

私自身は新卒四年目の昭和五十五年に札幌市立手稲東小学校で研究部会委員会の研究授業を公開したのをきっかけとし、その後、研究部などで多くのこ

とを学ぶことができました。

平成十一年の第四十九回の全道造形教育大会（オホーツク大会）では、「コロコロアート」で、絵の具の付いたビー玉を画用紙の上で転がす楽しさを網走の子どもたちと共有することができました。今も、子ども理解をねらいとしながらコロコロアートを全道各道各地で実技研修会を通して行っています。子どもの「いいこと考えた」というつぶやきを賞賛や能力の発揮ととらえ、その一層の授業改善につながるよう先生達に訴えています。これも、つくりだす喜びを探究する造形教育連盟の研究に関わることで身につけた、子どもを見る目であり、子どもの心に寄り添う指導を考へることだと思っています。

今後も、北海道造形教育連盟が、充実・発展するよう戮力ながら尽したいと思っています。これから「時間の庭」に咲く花は、彩り鮮やかで人生を楽しませてくれることでしょう。

子どもたちに真の楽しさを



札幌市立福権中学校教頭

勝田 真 塩

このたび、北海道造形教育連盟が発足六十周年を迎えることに、深く感動を覚えています。戦後の混乱期の名残がある中、フリーズドライなど様々なイ

インスタント食品の開発が始まったり、テレビが普及しラジオが変わって主要なメディアとなっていた時代に、私たちの先輩が子どもたちのために本連盟を立ち上げられた情熱と研究を繋ぎ続けてきた六十一年の重みを感じたからです。

造形教育連盟と私との直接的な出会いは最近なのですが、思い起こしますと、小学校五・六年生の時にさかのぼります。当時の担任は、鹿嶋健先生でした。図画工作の時間を、私たちはとても楽しみにしていました。というのも、鹿嶋先生は、私たちに思う存分、つくったり描いたりさせてくださり、そして、たくさん褒めてくださったからです。学校周辺の防風林にいたり道庁へ出かけたりにして水彩でじっくり絵をかきました。割り箸や竹籤で橋をつくったり、ひもづくりで好きな形の焼き物をつくったりもしました。軸葉を掛けて焼き上がった葉は輝いていて、子ども心に感動し、今でも大切にしています。銅版を打ち出して共同で卒業作品を作ったことも、その感触とともにすてきな思い出として残っております。描いたりつくったりすること、様々なものを触りながら自分の形を生み出していく真の楽しさを、鹿嶋先生に味わわせていただいたと感謝しています。その喜びは、私の原点であり、今も心の中に、決して失われることのない輝くものとしてあります。

恩師の鹿嶋先生が、本連盟の活動に尽力されたことを知ったのは、私が教職についてしばらくしてからのことでしたが、造形活動の素晴らしさについて学ばせていただいたことに心から感謝しています。六十周年を迎えるに当たり、諸先輩の情熱と志を受け継ぎ、次代へと研究をつなぐとともに、今後も子

どもたちに造形活動の楽しさを実感させていきたいと改めて思ったところです。

嗚呼「山水長巻」

対話型の鑑賞の学習を深めて



札幌市立稲陵中学校

高橋 久美子

墨で修学旅行の思い出を描いて、たいそう気を良くした稲陵の子どもたち。最初あんなに「えっ！水墨画？無理！」「えっ！実技テスト？無理！」「無理」を連呼していたのに、竹・梅・雀と水墨の用筆の練習を重ねるうちに、まんざらでもなく、「おれって、天才？」。

そうなのです。海にも山にも畑にも恵まれている稲陵の子どもたちは、実に豊かな感性をもっていたのです。稲陵中学校に着任してから早三年。わた

しはこの未知の可能性を秘めている子どもたちが大好きです。

子どもたちと一緒に、調墨をしたり、筆さばきの研究をしたり、共に学習する中で受験の悩みや、恋の悩み、友人関係の悩みなども飛び出しました。子どもたちの心に踏み込むいいチャンスをとくさんくれる美術の授業。生徒にとってもわたしにとってもかけがいのない大切な授業です。

「どうして週一時間しかないの」とうらめしそうな子どもたちと学習を進め、ついに雪舟を探求する鑑賞の授業に到達しました。校内研を利用して全教職員で子どもたちを観察して、対話型の言語活動がきちんとできているかを評価してもらいました。二年生の時の積み上げを受けての授業です。何が嬉しいのか、張り切って授業に臨み、概ね活発な言語活動ができました。写真のように、山水長巻の中を旅する高士になったつもりでストーリーをつくりあげていくのですが、登場人物になったつもりで、というのは鑑賞力を高めるためには効果的でした。指導室から勝田指導主事にもアドバイザーとしておいでいただき、生徒にも教師にも有意義でよい時間が流れました。楽しい授業も中身があればこそ、です。

雪舟については、山口県防府市の毛利氏博物館を訪ね、本物の「山水長巻（四季山水図）」を見ました。模写作品ですら国宝になっているという、高い話題性。ぜひ伝えたい日本人の伝統文化。これからも内容の豊富な鑑賞の学習を、たくさん展開していきたいと思っています。

授業を共につくる楽しさ



札幌市立幌南小学校

山 薫

私が造形連盟の大会に初めて参加させていただいたのは、第四十六回の札幌大会からでした。それまでは、造形連盟の授業も見ることがなかったため、一度に多くの授業が行われている様子や、校内のあちらこちらに子どもたちの作品が展示されている様子に、全道大会のパワーを感じました。

それから十年がたち、今度は自分が五十六回札幌大会の運営の仕事をしていただくことになりました。私が担当した課は「くらしと造形」。授業者や提言者の先生方と授業について何度も話し合いをもち、題材について考えていきました。そこで学んだことは、教材研究の大切さです。

二つの授業で素材となるものは、それぞれベツト

ボトル、ストローと、どちらも身近にあるものでした。子どもたちが、題材と出会ったときに「わー、やってみよう」「楽しそう」と意欲をもつには、どのような提示をしないとよいか実際に材料を手に取り、作品をつくりながら検討していきました。話し合いの中で、様々な発想や思ってもいない材料の使い方が生まれ、みんな子どものようにベツトボトルを飛ばしたり、ストローをつなぎ合わせて楽しんだりすることが思い出されます。大会まで日程が迫っている中でしたが、課の先生方と共に教材をつくり上げていくことの楽しさを強く感じました。多くの先生方の力に支えられて、札幌大会が無事に成功に終わったときは、大きな充実感がありました。

その後も、全道大会には毎年参加させていただいていますが、各サークルの特色ある授業に触れたり、ネットワーク部会で各サークルの情報や実践について交流し合ったりすることができるようにも造形連盟の素晴らしいところだと感じます。これからも、多くの授業から刺激を受けていきたいと思っています。



一冊の大会集録を手にして



札幌市立平岡中央小学校

東 尚 典

私の自宅の本棚に一冊の研究集録があります。連盟五十周年の翌年、札幌で行われた全国造形教育研究大会のものでした。この研究集録を手にとると、私にとって造形連盟とのかわりとの中で忘れられない数々の出来事が甦ってきます。

初めての全国大会への参加、そして、私はこの大会で広報局の一員となり、「研究集録」の担当という大きな仕事をいただきました。

当時の勤務校の運動会と日程が重なってしまい、実際の大会では講演会やレセプションなど一部の日程にのみ参加しました。

そして、多くの連盟員の方々が大会を終えた満足感と充実感、そして安堵感に包まれる中、集録編集の作業がスタートしましたが、当初の予想を超える大変さがありました。

全国の大会関係者には、大会時に広報局長の土肥先生が原稿依頼を済ませてくださっていました。ただ、授業者や記録者への授業反省、分科会報告などの原稿を依頼し、全道各地に散らばる連盟員の方々から原稿をいただくのは、思った以上に時間が必要でした。そんな中、ほとんど顔を合わせたこともな

い執筆の方から届いた原稿に「集録のお仕事、ご苦勞様です。遅れてすみません。」などの労いのメッセージが添えられていたりして、嬉しい気持ちになったことを思い出します。

また作業の中で一番時間を要したのが、講演会とパネルディスカッションの講演記録の作成でした。同じく広報局員の小林知広先生と二人で分担したのですが、遅々として作業が進まず、全てのテープを起し終わり規定のページ数分の原稿ができたときは、既に年が改まり、当初の発行予定時期を過ぎてしまっていました。

その後、校正段階でもいくつかの壁にぶつかかり、最終的に印刷に入ったのは既に年度も押し迫った頃。春休み中の土曜の午後、印刷工場に直接受け取りに行き、その足で郵便局から全通連の事務局に仕上がったばかりの集録を発送したことを今でもはっきりと覚えています。

集録の発行にかかわって、連盟の役員の方や先生方と一緒に仕事をした広報局の方々に大変なご迷惑をかけてしまったことは、今でも自責の念に堪えません。ただ、先輩の先生方が、担当者としての私の仕事の不手際を責めず、最後まで当たらせてくださったことは、私にとって貴重な経験となり、その後の連盟の仕事はもちろん、教員として仕事に向かう上で大切な教訓をいただいたと感謝しています。

集録に使う写真を選ぶため、今は亡くなられた小泉誠先生がご自宅に呼んでくださったこと、この時初めて一緒に仕事をさせていただいた中学校の中山龍雄先生には、ご縁があって次の全通大会でも広報部の仕事を支えていただきました。この集録の仕

事のおかげで、素敵な出会いに恵まれたのだと思います。

今でも、私の自宅には、段ボール箱一杯の大会の記録写真が、納戸の奥でひっそりと眠っていますが、来年、札幌での全国大会をひかえ、また全通の多くの連盟の方と一緒に仕事をさせていただき、全国の造形教育に携わる方々との素敵な出会いがあるものと楽しみにしています。

「子どもにつけたい力」



札幌市立中の島小学校

小野博史

ユダヤ人学校との交流をいかに図るか。これが、当時の私の抱える課題だった。

ニューヨーク日本人学校が、ユダヤ人の学校とキャンパスシェアを行って四回目。毎日顔を合わせ、こちらは「Hello」、こちらは「こんにちは」と、互いを意識した挨拶をしながらも交流は進展しない。貴重な機会をいかに子どもにも還元するかの手立てを模索していた。

しかし、解決策は自分にとって身近なところにある。

ニューヨーク日本人学校の図工は、アメリカ人教師が英語で授業を行うイマージョン教育である。そ

のアメリカ人教師が言うには、先方の学校のART科の教師と仲良くなったとのこと。そして、私と同じ課題を抱えていた二人のART科教師は、両校合同でARTの授業を行うこととした。まずは、一年生、さまざまな色や模様を紙テープを組み合わせて両国の民族衣装を飾り付けていく。そして、八年生（中学校二年生）粘土をつかって、南米のお守りを自分なりに作り上げていく。どちらも、共同作業にはしなかったが、完成に近づくにつれ、相手の作ったものへの興味が高まっていくことが感じられる。

何よりの変化は、授業後、互いの児童生徒がすれ違うときの声や表情が変わってきた。その後、行事や体育での交流が広がった。しかし、こう着状態を打破したのは図工である。きれいなものはきれいな、楽しいものは楽しい、ストレートに認め合えることができる図工ならではの良さが生きた。

ニューヨーク日本人学校では、他にも英語科、米社会科をイマージョンで行っていた。渡米したての子どものなかには、英語に対して抵抗感をもつ子どもがいることも事実である。しかし、三教科のうち、ART科の授業を拒む子どもはひとりもいなかった。みんなART科の授業には、ニコニコして出かけていく。

図工は、言葉の壁を越え、人種の壁を越え、わだかまりも越えた。グローバル化した世界に生きる子どもにも必要不可欠な力をつける教科であると確信している。

美術は心の運動



札幌市立米里中学校

細川 亜矢子

「美術は心の運動です。感動しよう。」——私の通っていた岩内第二中学校の美術室の黒板の横には、常にこの一言が書かれていました。

私は、描くことは幼い頃から大好きでした。でも、ものを「観ること」のおもしろさや、自分自身のつくりあげたものに向かい合う喜び・心地よさに気づかせてくれたのは中学校・高校の、美術の時間だったと思います。私の美術の先生方はクロッキー等を描くごとに、「このラインがステキだね」「この描き方がよくなったね」と、ほんの一言ですが必ず感想を伝えてくださいました。毎回のささやかな一言は、大きなはげみになりました。先生方からの言葉で、自分では気づくことができなかった新しい角度からの観方を知ることができました。自分の作品と、周りにある様々なものを、もっと観てみようという気持ちをもりました。そして、作品や身近なものから、新しい発見をするたびに、わくわくしました。

私は、感じたことを伝えてくれる人や、できたことを一緒に喜んでくれる人が傍にいることによって、表現することには、もっともっと楽しいことにかわるのだ！ということに気づきました。言葉をかけてくれる人の存在そのものが表現の幅を広げる手がかりになることにも。

そして私は、人にものを伝えることは得意ではなけれど、描くことだけでなく、誰かの表現のよさをみつけようとする気持ちを大事にしていきたいと思うようになりました。

高校を出て進学し、多くのすてきな出会いを経て、私は今、美術の先生をしています。まだうまくできていませんが、生徒たちみんなに、感じたことや、おどろきを伝えるのが私の目標です。子どもたちの発想には、本当にはっとさせられます。はずかしがらずに、大きな声を出して自分の素晴らしい発見を伝えることができる子を；そして堂々と表現できる子を、育てたいなあと思っています。

体を動かすと、身体が育って健康になるように、感動すると、心が育って心が豊かになると信じています。今、私が授業をしている美術室には、母校にあったものと同じ「美術は心の運動です」という言葉が書かれています。



全道大会との かかわりを振り返って



函館市立中の沢小学校

佐郷谷 滋

今回、六十周年を迎える造形教育連盟の記念誌原稿を依頼され、あらためて自分と造形教育とのかわりを振り返り、考えてみるきっかけをいただきました。

自分にとって、地元函館で開かれる造形教育研究大会は、その時々教師として、造形教育をとおして「どのように子どもたちとかわかっていくのか」を考える起点になりました。

「造形遊び」についての提言をさせていただく機会をいただいたときには、自分の実践を見直すことができました。さらに、提言の場では「造形遊び」についての考え方を集まられた先生方から聞くことができました。

他地域の大会へ参加し、幼稚園部会の司会を務めたこともありました。話し合いはもちろん、幼稚園教育をもとにしたものでしたが、自分の中では、幼稚園と小学校、そして中学校へと造形教育のつながりが意識されるものになりました。

こうした各地域の多くの先生方と実践をもとに直接話し合い、造形教育への思いを交流する場はとても貴重なものです。そして、そのつど自分の造形教育への思いを問い直し、確かなものにしていく大切な契機だととらえています。

また、前回の五十五回大会では部会の提言が主な仕事でしたが、今回の六十回大会では、全体をつくりあげ運営に取り組み立場となりました。その中で、印象に残ったのは、地元函館での大会をよりよいものにしようとする先輩方や研究会の仲間たちの姿でした。授業公開や提言をしよう先生方に「函館の造形教育の姿をいかに実践に組み込み」伝えてもらうのか、また他地域から参会していただく先生方に「函館の造形教育をどのように理解していただくのか」ということを熱く語り合い、時にはぶつかり合うものでした。

自分自身、造形教育研究大会に参加することで、様々な先生方との出会いがありました。一人一人の先生方の独自性に感化され、造形教育への思いを強く確かなものにしていくことができました。子どもたちの感性を育み、情操を涵養するとても大切な機会であり、これからも積極的に携わっていきたいと考えています。

回想



天塩町立天塩小学校校長

横溝 裕美子

初任地は稚内市であった。初めての子どもたち二人の三年生は純真で、新米の教師の多少無理な指導にもよくついてきた。子どもたちの絵は、了解を得て手元に保管しているが、細部まで良く見、時間をかけて描き、かなり上手だ。自由に奔放に描きたい子どもに、いろいろ技術を要求していいのか悩んだりしたが、子どもに「上手な絵を描かせたい」という思いがあった。この絵画たちは、その後何度も出しては眺め、私の教師生活と共にあった。

故郷留萌に転勤し、天塩町で多くを過ごした。昭和五十三年、隣町の遠別町で「作品を語る会」があるとの知らせがあった。小学生時代の恩師（熱心な版画の指導をいただいた）からだった。十五年ぶり

の恩師は昔と変わらず生き生きと子どもの作品について語っていた。こうして、留萌地方美術教育研究会に関わることになった。

その後の研究大会で、「大脳皮質の機能局在と巧緻性」について提言した。ピアノが上手に弾けても、雑巾が絞れない、鉛筆が削れない子どもがいる。ある一つのことが上手にできるからといって、器用さとは別で、他のことが上手にできるものではない、というものだ。その後は、色々なことを数多くさせることにした。低学年の担任の時は、画用紙の消費が多く、事務職員にいらまれたほどだった。

絵より工作を好む子どももいる。教室の隅に大きいダンボール箱を置き、材料を集めた。子どもたちの持ってくる何でもが素材になった。「動くおもちゃ」には一生懸命取り組ませ、紙バネ・割りピンを使用しての動きの面白さを子供に伝えた。最近では業者の教材開発も進み、キットを使用させている教師も多い。

自分が集めた材料をどう使おうかと考えて、子どもたちと取り組んだ図工の時間が懐かしく、いとおいしい思い出になっている。

六十周年とは、 本当にすごいこと



弟子屈町立昭栄小学校長

奥田 泰朗

私が釧路造形教育研究会に関わって、二十年ほどなので、六十年はたいへんな重さの年月の積み重ねであったと思われる。

唯一、私が誇れるのは、この二十年の間、全道大会すべてに参加させていただいたことである。何分、釧路は東の端っこに位置しているし、北海道の広さは皆さんも実感しているところであろう。ほぼ、丸一日の移動ということも、ままあるので、ひるんでしまうと途切れるはずだったが、とにかく、全道大会の魅力は、その土地に関わった活動を続けている先生方の授業が素晴らしいことに尽きるのである。

私なりの全道大会の思い出を、誤解を恐れずに綴ってみる。

三十九回の帯広大会から私の全道大会参加歴は始まっている。ワイン城のレセプション。町長のたぶんいつも言ってる「ワインは売るほどあるから飲んでくれ」と滑るギャグと、児童のレオタード姿のショータイム。呆然と見ていた札幌の方が、「おいおい札幌じゃ捕まるってばさ。」

次の苫小牧大会は、経験した中では、授業公開がない唯一の大会であった。レセプション会場のホテルに素直に泊まればいいのに、千円ケチったために、オンボロ旅館で同僚と汗まみれになった記憶がよみがえる。

飛んで、留萌大会は釧路からどの交通手段を使って参加するか、真剣に悩んだのを思い出す。とても良い町だった記憶があるのだが、さてどのルートで行ったのやら。

この二十年間で幸運？にも、釧路で開催された全道大会に二度とも深く関わらせていただいた。大会の二年ほど前から、普段の業務の他に取組むのだから、当たり前のように心身ともに忙しくなる。しかし、この感覚も慣れると案外心地よいもので、このような活動を拒んでいる人種には分けてあげるべきだろう。様々な財産をもらい続けた全道大会が今後も続くことを願っている一人より……



子どもの絵は聴くもの



旭川市立近文第一小学校長
渡辺盛二

二年生を受け持っていたころ、みんなで野山に出かけ、虫捕りをしたことを題材にして絵を描かせた。一人の女の子がトンボの絵を描いて見せてくれた。トンボの顔は大きく、眼は緑色、羽は小さく、足も小さく描かれている。トンボの周りには黄色や赤のきれいな花がたくさん描かれていた。絵だけ見ると頭でっちなトンボで、羽だって小さく上手に影が捉えられている絵ではない。野山にたくさん花が咲いていたわけでもないのにきれいな花が描かれている。どこか悲しそうだ。変だなあと思っ、て、「○ちゃん、どうして羽を小さく描いたの? どうしてトンボの周りに花をたくさん描いたの?」等いろいろ話を聞いてみた。するとその子は、「トンボが死

んじやってかわいそう。もう飛ぶこともできない。かわいそうだからお花をたくさん描いてあげたの。」と話してくれた。わたしは、頭の中のものもやしたものがいっぺんに晴れた。なるほどこの子は、死んだトンボを見て悲しい気持ちを描いたのだとわかった。だから、飛べない羽は小さく、トンボの足は縮めて、トンボの目も悲しそうだったのだ。この子は、トンボへの思いを大きな顔や花に表したのでした。わたしは一枚のこの絵が宝物のように思えた。芸術鑑賞では、音楽は聴く、絵は観ることを通して、自由に感じ取るのが受けての喜びであり感性です。しかし、子どもの絵は、子どもから話を聞いて、その心に寄り添わなければなりません。子どもの絵を丁寧に聴き、子どもの思いに共感することを私たちは忘れてはいけません。子どもの感性を育てるには、我々教師が豊かな感性を持たなければなりません。子どもの言動が荒々しく「いじめ」が社会問題化している教育情勢の中、まさに図工美術教育の果たす役割が大きいのだと声を大にして叫びたい。

みんなが楽しく学べる 図工の授業を目指して



苫小牧市立糸井小学校
宮下肇彰

自分の小学生の頃の図工の思い出といえば、低学年の頃、工作で自分の思い通り作れずいやになって保健室に逃げ出したこと、「普段と違う自由な色でぬりましょう。」という担任の指示で、太陽を緑色で塗り、「お宅のお子さんは、何か問題はありますか。」と家に電話があったこと、中学年では、写生会の絵で、割り箸ペンで使う墨汁を画用紙にこぼしてしまい、担任に交換してもらおうとしたら、「こぼした自分が悪いんだから、ふいて使いなさい。」と言われ、泣きながら絵を仕上げたこと、写生会で入選したら、友達から、「何でこれが入選なんだ?」と言われたこと。(確かに友達の方がうまかっ

た。担任に「子どもらしくていいんだよ。」と言われても納得できなかった。

悲惨な思い出しかでてこないのだが、なぜか図工が嫌いと思うことはなく、絵を描くこと（線描）は苦手でも、色をつけること（彩色）は大好きだった思い出がある。

「なぜ嫌いにならなかったのだろうか？」と考えてみれば、小さい時から好きで何時間でも描いていたこと、そこには自分だけの空想の世界があり、楽しい時間があったことが大きいと思う。

教師になってからも、専門ではないが、図工の指導が嫌いと思ったことはない。どんな教材を用意すれば楽しいと思ってもらえるか、どう指導すれば、みんなが満足できる作品になるか、教材研究することが楽しいと思う。そして、いろいろな資料を集め、作品展に出かけたり、夏休みに全校の子どもに声をかけ絵画教室を開いたり、合同の授業を率先して実践を積んできた。優れた実践家の先輩から学ぶ機会も増えた。

気がつけば、苦教研造形部会の役員となり、研修の講師となり、先生方を前にして話をする機会も増えた。これからもみんなが楽しく学べる図工の授業を目指し、図工が楽しい、好きだと言える子どもたちを育てていきたいと思う。

心を開く



旭川市立旭川小学校教頭
菅原良和

今から十年ほど前、我が子連れて、旭山動物園へ動物の絵を描きに行った。四年生の長男は妻の担当、一年生の次男の絵が気になりだした私は、「もっと大きく。」とか、「その線はこんなふう。」と、口ばかりではなく手には鉛筆を握りしめ、かなり描いてしまっていた。帰宅後、なかなかいい象の絵ができた満足する私に次男はこう言った。「お父さん、ぼくだって自分で描きたい線があった。」

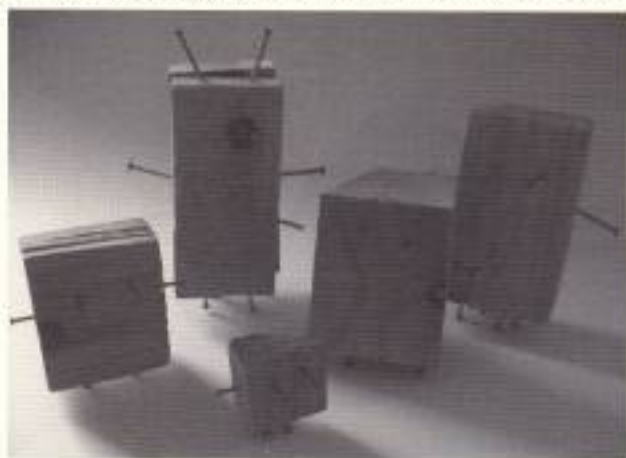
別なある日、次男が声を発しながら絵を描いている。私は、気づかれないよう、部屋に入り後ろからその絵をながめてみた。自由帳には、次男が描きたい絵がびっしりと描かれてあった。それは、声を発

して描くほど楽しいひとときだったのだ。動物園の絵は、「心を開く」こと無しに描かされた絵。自由帳の絵は、「心を開いて」描いた絵である。

土別の温根別小学校在任中に、全校児童二十五名で図工の授業を行った。題材名は「わくわく のび のび いきいき」というもので、一人に十枚、十センチ角の発砲スチロールを与え、ネオカラーで描かせる。私は何枚かの描き方の例を示したが、「こうしなさい」とか、「これはいけない」とかの指示は一切与えない。しばらくすると、楽しそうな歓声と共に、ユニークな絵が次々とできあがっていく。絵は自分独自の発想のものから、周りの子からの影響も受けて、多種多様なコラボレーションを展開する。子どもたちの表情は、題材名であり目標でもある。「わくわく のびのび いきいき」の通りとなった。こんな時、子ども一人一人の、「心が開いた」状況なのだろう。

私は、図工・美術の授業では、子どもの「心が開いた」状況にさせることに主眼をおいてきたつもりである。「心が開かれた」授業の積み重ねによって、子どもが自己実現に向かってくれることを願っている。

子どもに学び、互いに磨きあう
なかまに囲まれて



岩見沢市立第二小学校
中澤孝仁

わたしたちは、めまぐるしく変化する教育環境の中で、子どもに学び、なかまに学び、ともに磨き合い、確かめ合いながら自主的な研究実践活動を展開してきた。

空知美術教育研究会の活動の柱として行われてきた「全空知子どもの作品を語る会」は、今年で第四十七回を、また空知美術教育研究会も創立四十二年を迎えた。

その歴史を顧みると、様々な困難を苦しみながらも克服し、休むことなく大会を開催してきた先輩たちの苦労は計り知れないものであると推察する。

毎回の語る会にそれぞれテーマを設け、その共通のテーマと目的に向かって研究活動しつつも、会員個々の理念をぶつけ合い互いに学びあってきた空美第一世代。テーマや基調にとらわれず、語る会では各自のオリジナリティあふれる実践から学びあい、図工・美術教育の厳しい現状を交流し、少ない時数と戦いながらも共通の何かを模索していた空美第二世代。そして、全道造形教育研究大会滝川大会と共催で行われた第四十回以降、今につながる空美第三世代。その時々で言葉は違えども、同じことを語っているように私には思えてならない。

世代を通して半世紀近く変わらなかった語る会と空美。今後もその流れをあわてて変える必要はないと思う。なぜなら、長い間、変わらずに続いたこと自体が大きな意味を持つからであり、それはマンネリではなく熟成に近く、まだまだ会の原点として開催し、学ぶことが多々あるからである。

第三世代を一言で言えば【原点復帰】であろうか。いや【温故知新】に近いかもしれない。今まで通り、子どもに学び、互いに磨きあう仲間であり続けるとともに、造形連盟連盟のネットワークを通じた全道の仲間とのつながりをもとに視野を広げていく必要がある。

過去に習うところは習い、概念にとらわれず新しい試みを試行錯誤し、反省し改善していく。そんな当たり前のことを少しずつ行いながら、本気で子どもと心をおつけ合い、学びあい、高めあう空美と造形のなかまでいたい。

「六十周年の節目に」



帯広市立西陵中学校
根岸邦昌

一九八九年第三十九回全道造形研が帯広で開催され、授業者となった私は、中学校の子ども達を連れて大空小学校へ行き、小学校用のかわいいイスに座る子ども達と版画の授業を公開しました。私の全道デビューでもあります。

新任時より加入した十勝造形サークルは、当時四十名の会員を有し、今の私の年齢となる五十代の先生方から、美術教育の熱い指導実践を学ばせてもらいました。全道研に行く時は、開催地までスケッチ旅行をしながらの旅行を企画したり、一泊忘年会の次の日には、デッサン会を開催し、二日酔いで絵を描いた。お酒の好きな先輩達と本音を交えての美術談義はどんな講義よりも良かった私にはエネルギーとなりました。全道研の収録広告のほとんどが、帯広市内のスナックや居酒屋だったことが今でも笑い話となっています。

現在は、帯広市教育研究会図工・美術部会実践を深めています。

特にここ数年間では、実技研修の指導者として、北海道造形連盟の菅原清貴校長先生や小林知宏先生・

教育大学旭川校の名達英昭先生を招き、とても充実した内容で、研鑽を高めることができました。今後、全道の連盟の皆さんとの連携を深めながら、より大きな発展を期待しています。

最後になりますが、平成二十四年度には、全道造形教育研究大会が十勝と合同で帯広市にて開催されます。諸先輩達が築いてくれた十勝美術教育の財産と前回の大会から積み上げてきた実践を基に、十勝の子どもたちが図工美術に瞳を輝かせている姿を見ていただければ幸いです。

今後、今まで以上に北海道造形連盟にお世話になります。六十周年の節目あたり、更なる発展を御祈念申し上げます。



オホーツク造形教育連盟と私



北見市立常呂中学校長

光岡光彦

昭和四十九年に教師となった私は、オホーツク造形教育連盟の存在を全く知りませんでした。十年位過ぎた頃、次年度に美術の授業公開を控えていたこと、勤務校に近い湖陵中学校で開催された管内造形研究大会演別大会に参加したことが縁となり、それ以来会員となった記憶があります。翌年には、会場校であった校長先生に助言者で来ていただき大変お世話になりました。その後、平成五年雄武大会で授業公開を行いました。

平成十一年第四十九回全道造形教育研究大会オホーツク大会を網走で行いました。私は教頭二校目であ

りました。開催二年前までは中学校授業公開者には名前が挙がっていませんでしたが、半年が過ぎたと、予定していた先生の都合がつかなくなり、急に私が授業者に浮上りました。大会開催まで一年となった時でした・・・

授業者となり題材を何にしようかいろいろと考えたこと、夏休みでもあり全員参加は無理だろうから、三年生選択美術に決定した四月から生徒に予定を話し参加を呼びかけたこと、三十五km離れている会場へのバスの手配、同僚への引率協力のお願、保護者へのお知らせ、帰りにライメンの約束、結局全員が出席できたこと、今となっては全てが懐かしく思われます。

管内は斜里町ウトロから雄武町まで二四〇kmと広い地区です。年一回の研究大会、その後の交流会を続けています。連盟の長い歴史の中で先輩方や道連盟講師から作品づくりを教えていただき、たくさん

の財産ができました。第四十九回全道研究大会に向け引率した地、常呂町で再び動いています。これからの連盟の会員が力を合わせて担ってくれることに期待しています。

■ 平成22年度 北海道造形教育連盟名簿 ■

役員

役名	氏名	勤務校	住 所	電 話
会 長	菅原 清貴	札幌市立幌西小校長	064-0810 札幌市中央区南10条西17丁目1-1	011-561-2201
副 会 長	伝住 修一	江別市立野幌若葉小校長	069-0831 江別市野幌若葉町5-3	011-385-3131
“	渡辺 盛二	旭川市立近文第一小校長	071-8153 旭川市東鷹栖3線10	0166-57-4441
“	中村 吉秀	函館市立亀尾小中校長	042-0917 函館市亀尾町28	0138-58-4007
“	奥田 泰朗	弟子屈町立昭栄小校長	088-3271 川上郡弟子屈町熊牛原野27線東1	015-482-4007
“	富田 賢司	札幌市立札幌北中校長	007-0810 札幌市東区東苗穂10条3丁目16-20	011-791-1190
監 査	木村 伸仁	函館市立銭亀沢中	041-0263 函館市豊原町140-30	0138-58-2542
“	藤原 寛	札幌市立西小長	063-0827 札幌市西区発寒7条13丁目2-1	011-662-5227

本部常任委員

役名	氏名	勤務校	住 所	電 話
事務局 長	稲實 暲	札幌市立盤渓小校長	064-0945 札幌市中央区盤渓226	011-642-3223
次 長	中居 正光	札幌市立菊水小	003-0822 札幌市白石区菊水元町2条3丁目2-14	011-872-3084
“	川島 正夫	札幌市立幌南小	064-0921 札幌市中央区南21条西5丁目1-1	011-521-0214
“	東 尚典	札幌市立平岡中央小	004-0875 札幌市清田区平岡5条3丁目9-1	011-884-6541
“	福島由紀子	札幌市立幌北小	001-0019 札幌市北区北19条西2丁目1-1	011-726-2461
“	向井 正樹	札幌市立あいの里東中	002-8072 札幌市北区あいの里2条7丁目14-1	011-778-3025
“	金子 睦	札幌市立中央中	060-0034 札幌市中央区北4条東3丁目	011-241-6266
監事 会 長	今 裕子	札幌市立福住小校長	062-0043 札幌市豊平区福住3条5丁目1-1	011-854-1318
副 委 員 長	加藤 正幸	札幌市立北郷小校長	003-0834 札幌市白石区北郷4条5丁目	011-872-6467
会 計	三井 哲	札幌市立平岡中央小校長	004-0875 札幌市清田区平岡5条3丁目9-1	011-884-6541
次 長	高向 修子	藤女子中・高	001-0016 札幌市北区北16条西2丁目	011-707-5001
全道研究連絡部長	土井 善範	札幌市立光陽小校長	001-0905 札幌市北区新琴似5条11丁目4-1	011-761-2521
全道情報連絡部長	田口 和男	札幌市立厚別西小校長	004-0063 札幌市厚別区厚別西3条1丁目3-1	011-892-5757
庶務部長	箭内 浩之	札幌市立真駒内曙小	005-0018 札幌市南区真駒内曙町2丁目1-1	011-581-5291
副 部 長	吉伊 宏子	札幌市立幌西小	064-0810 札幌市中央区南10条西17丁目1-1	011-561-2201
“	中川 治	札幌市立伏見小	064-0918 札幌市中央区南18条西15丁目1-1	011-551-2771
広報部長	松本 和彦	札幌市立発寒小	063-0830 札幌市西区発寒10条4丁目1-62	011-661-2521
副 部 長	大高 雅子	札幌市立柏中	064-0921 札幌市中央区南21条西5丁目	011-521-2343
“	櫻田 悟	札幌市平和小	060-0023 札幌市西区平和3条8丁目2-1	011-663-4384
事業活動部長	八田 博之	札幌市立中央小	060-0041 札幌市中央区大通東6丁目12	011-261-6568
副 部 長	池田 武彦	札幌市立本郷小	003-0022 札幌市白石区南郷通10丁目南3-1	011-861-4128
“	濱口 裕子	札幌市立緑丘小	064-0810 札幌市中央区南10条西22丁目3-1	011-561-5118
北海道教育関係 担 当	岩崎 重明	札幌市立南月寒小	062-0024 札幌市豊平区月寒西4条8丁目2-1	011-853-9314
“	中村 麻紀	札幌市立厚別西小	004-0063 札幌市厚別区厚別西3条1丁目3-1	011-892-5757
“	保科 治恵	札幌市立南の沢小	005-0823 札幌市南区南沢3条2丁目18-1	011-571-1096
造形教室担当	ニッ山かおる	札幌市立上野幌東小学校	004-0032 札幌市厚別区上野幌2条4丁目5-1	011-893-5055
“	高松 摩衣	札幌ひまわり幼	002-8066 札幌市北区拓北6条2丁目6-12	011-771-7216
事業研修部長	石川 早苗	札幌市立宮の丘中	063-0033 札幌市西区西野3条10丁目9-1	011-662-6611
副 部 長	加藤 雅子	札幌市立屯田西小	002-0856 札幌市北区屯田6条10丁目3-1	011-773-6106
“	藪下 栄一	札幌市立藤野南小	061-2284 札幌市南区藤野4条6丁目26-1	011-592-2120

役名	氏名	勤務校	住所	電話
研究部長	湯浅 大吾	札幌市立伏見小	064-0918 札幌市中央区南18条西15丁目1-1	011-551-2771
副部長	森實 祐里	札幌市立屋置東小	006-0852 札幌市手稲区屋置2条1丁目6-1	011-694-7580
〃	水野 一英	札幌市立宮の森中	064-0951 札幌市中央区宮の森1条16丁目5-1	011-612-1147
キョウワク課長	小林 知広	札幌市立幌西小	064-0810 札幌市中央区南10条西17丁目1-1	011-561-2201
副部長	伊藤 聡美	札幌市立幌西小	064-0810 札幌市中央区南10条西17丁目1-1	011-561-2201
〃	小野 博史	札幌市立中の島小	062-0922 札幌市豊平区中の島2条1丁目1-22	011-841-1561
〃	山 薫	札幌市立幌南小学校	064-0921 札幌市中央区南21条西5丁目1-1	011-521-0214
〃	岩崎 愛彦	千歳市立千歳小	066-0047 千歳市本町3丁目4-1	0123-23-2183
〃	佐藤 祈	三笠市立新幌内小教頭	068-2137 三笠市唐松青山町140-1	01267-2-3073
〃	嶋影 哲弥	小樽市立入船小	047-0021 小樽市入船3丁目19-1	0134-23-5296
〃	渡辺 悟史	東川町立東川小	071-1426 上川郡東川町北町1丁目1-1	0166-82-4711
〃	庄子 展弘	旭川市立北星中	070-0865 旭川市住吉5条1丁目	0166-51-5491
〃	松岡 宏悦	羽幌町立羽幌小	078-4105 天塩郡羽幌町南5条5丁目1	0164-62-1040
〃	後藤 征秀	北斗市立上磯中	049-0156 北斗市中野通320-4	0138-73-2076
〃	木村 伸仁	函館市立銭亀沢中	041-0812 函館市昭和1丁目5-5	0138-41-4964
〃	谷口 光伸	江差町南ヶ丘小	043-0063 檜山郡江差町南丘町370	0139-52-5489
〃	大年 教子	むかわ町立鷗川中	054-0051 勇払郡むかわ町文京4-2	0145-42-5564
〃	大野 達也	室蘭市立水元小	050-0071 室蘭市水元町5-1	0143-44-3311
〃	宮下 肇彰	苫小牧市立糸井小	053-0816 苫小牧市日吉町4丁目12-6	0144-72-3912
〃	澤田 佳子	帯広市立第四中	080-0015 帯広市西5条南25丁目1	0155-24-3511
〃	小泉 佳一	幕別町立札内中	089-0553 中川郡幕別町文京町29	0155-56-2015
〃	花輪 大輔	教育大附属釧路中	085-0805 釧路市桜ヶ岡7丁目12-48	0154-91-6322
〃	塩浦 亜紀	網走市立潮見小	093-0042 網走市潮見4丁目111	0152-43-5814
〃	小野寺宏二	中標津町立広陵中校長	086-1010 標津郡中標津町東10条南7丁目1	0153-73-3161

常任委員

氏名	学校名	電話	氏名	学校名	電話
塚野 昭臣	稲穂中学校	長 011-684-4601	岡澤 邦彦	東栄中学校	頭 011-781-0278
谷山 圭子	あいの里西小学校	長 011-778-2130	柿崎 雅夫	前田北中学校	頭 011-684-0123
益村 豊	大谷地小学校	長 011-863-5790	阿部 時彦	藤野中学校	頭 011-592-1921
植木 則子	常盤小学校	長 011-591-8880	藤田 真塩	稲積中学校	頭 011-211-3861
石谷 正美	北白石中学校	長 011-871-2948	森 美由紀	白楊幼稚園	011-736-0764
池田 悦子	稲積小学校	長 011-685-3871	杉森久美子	中央幼稚園	011-251-6700
小泉 信嗣	陵陽中学校	長 011-821-1371	三浦真奈美	いなづみ幼稚園	011-683-3185
後藤 和司	平岸中学校	長 011-811-9585	上田 克美	さくすいもとまち幼稚園	011-873-2285
阿部 宏行	道教育大岩見沢校	准 0126-22-1470	堀口 基一	教育大附属小学校	011-778-0471
櫻田 豊	屋置東小学校	長 011-694-7580	宮田 珠世	円山小学校	011-631-3437
山田 宏司	青葉小学校	長 011-891-0491	平井 歩	啓明中学校	011-561-4168
古谷 壽郎	札苗小学校	長 011-781-2731	館内 徹	あやめ野中学校	011-592-1921
松原 和彦	北小学校	長 011-731-8381	高橋久美子	稲積中学校	011-683-3451
伊藤 正敏	開成小学校	長 011-783-4492	森岡 香子	稲穂中学校	011-684-4601
長谷川 右	札苗幼稚園	長 011-791-3703	齋藤 周	札幌旭丘高校	011-561-1221
橋詰 博	藻岩中学校	頭 011-571-6039	小林 充裕	東札幌小学校	011-821-6333
安木 尚博	川北小学校	頭 011-872-5422	細川亜矢子	米里中学校	011-875-5711
土肥 宏充	厚別北小学校	頭 011-894-3011	白井 真澄	二十四軒小学校	011-642-2855
澤波 隆信	西小学校	頭 011-662-5227	寺田 実	教育大附属中学校	011-778-0481
藤森 久美	手稲西小	頭 011-681-2853	毛利 聡	澄川南小学校	011-584-2115
葛西 実	平岡公園小学校	頭 011-885-9414	富樫 信博	藤野南小学校	011-591-4110

氏名	学校名	電話	氏名	学校名	電話
小野 泰裕	西岡北中学校	頭 011-853-2422	石垣あけみ	西小学校	011-662-5227
森長 弘美	前田中学校	頭 011-682-9611	氏家 珠実	西野第二小学校	011-664-0152
平野まなみ	西岡中学校	頭 011-583-3560	山室ゆかり	山鼻南小学校	011-532-8340
向 敏光	札幌中学校	頭 011-781-2221	本間 真理	西野小学校	011-662-5811
八子 晋嗣	真駒内南小学校	011-581-0221	多田 絵美	西岡中学校	011-583-3560
祖父江 瞬	中の島小学校	011-841-1561	椿野 衣江	真栄中学校	011-884-6561
菅 淳子	栄東小学校	011-753-2670	豊田 ゆき	屯田北中学校	011-775-5111
冨波 修	北園小学校	011-721-5245	中山 龍雄	星置中学校	011-686-3711
東 政美	豊平小学校	011-811-9588	潮川 欣子	八軒中学校	011-631-3517
隈本 一哉	屯田南小学校	011-772-0671	六本木祐司	山鼻中学校	011-531-9941
久保ふじ子	東苗穂小学校	011-781-9191	伊藤 尚	八条中学校	011-831-6145
高梨 美幸	平岡南小学校	011-884-1561	久蔵美和子	新琴似北中学校	011-761-5122
坂口 健	平岸小学校	011-811-8128	東野 留美	幌西小学校	011-561-2201
大門 沙織	元町北小学校	011-752-5902	川崎 綾芽	常盤小学校	011-591-8880
元茂 章子	南の沢小学校	011-571-1096	山崎 久子	西陵中学校	011-662-9323
千葉紗希子	和光小学校	011-736-7351	藤岡 真弓	手稲西小学校	011-681-2853
岡田 知之	石山小学校	011-591-8804	中 奈津子	南の沢小学校	011-571-1096
阿部 俊樹	手稲鉄北小学校	011-681-2287	高橋 倫子	栄南中学校	011-781-1260
今谷 孝	八軒北小学校	011-642-8603	則友 冴子	札幌北中学校	011-791-1190
小柳 雄嗣	発寒西小学校	011-661-0397	寺林 陽子	あいの里東中学校	011-778-3025
矢野 宜利	百合が原小学校	011-775-7680	下村 愛	東米里小中ひまわり分校	011-726-9776
沼田 玲子	北光小学校	011-721-0377	南 直子	開成小学校	011-783-4492
秋田 梨恵	元町北小学校	011-752-5902	佐々木維子	小樽市立桜町中学校	0134-54-6505
岩田 守代	栄小学校	011-731-2464	齋藤 啓代	小樽市立向陽中学校	0134-23-8158
橋本 祥子	藤野小学校	011-591-4110	櫻田 裕美	北広島市立西の里中学校	011-375-2843
石川 恭子	平和小学校	011-663-4384	市川 雅基	屯田北中学校	011-775-5111
柿本美奈子	伏見小学校	011-551-2771	佐藤 一明	札幌平岸高校(市)	011-812-2010
大町 香織	向陵中学校	011-611-4271	平向 功一	札幌稲雲高校(道)	011-684-0034
蒲谷 貴史	澄川中学校	011-821-9203	野切 卓	札幌市教育委員会指導主事	011-671-3416
北川 珠実	東月寒中学校	011-853-1520	仲嶋 貴将	北海道文教大学人間学部	011-742-1651
小林 秀史	東白石中学校	011-864-0984	杉浦 篤子	藤女子大学人間生活学部	0133-74-7431
今 千香	稲積中学校	011-684-1430	名達 英昭	北海道教育大学旭川校	0166-59-1368
佐藤 麗子	太平中学校	011-772-7961	岩井 久根	ベトナム(豊平小学校)	
越智 千鶴	太平中学校	011-772-7961			

O B

小尾 喬	002-8022	札幌市北区藻路2条5丁目18-6	011-772-3366
築地 正樹	063-0052	札幌市西区宮の沢2-2-2-10	
長野 祐平	069-0862	江別市大麻栄町26-8	011-386-2781

顧問

	氏名	郵便番号	自宅住所	電話
1	秋山 修世	042-0941	函館市深堀町27-1	0138-51-1992
2	阿部 賢一	090-0061	北見市東陵町96-12	0157-25-0031
3	石井 久	042-0954	函館市上野町19-8	0138-59-0857
4	石塚 深	059-0036	登別市美園町5丁目35-12	01438-4-8820
5	伊藤 恵	062-0053	札幌市豊平区月寒東3条18丁目20-20	011-851-8396

	氏名	郵便番号	自 宅 住 所	電 話
6	伊藤 英明	041-0801	函館市桔梗町337	0138-47-1594
7	伊藤 善彬	064-0913	札幌市中央区南13条西13丁目1-30	011-561-3823
8	内田 暢一	063-0814	札幌市西区琴似4条1丁目1-15-716	011-613-5758
9	繪面 和子	042-0931	函館市榎本町6-20	0138-57-1149
10	奥野 郁男	063-0841	札幌市西区八軒1条西2丁目4-1-701	011-614-6811
11	織田 達史	077-0214	増毛郡増毛町品中5丁目	0164-53-9130
12	鹿嶋 健	065-0020	札幌市東区北20条東6丁目2-24	011-721-5554
13	金井 秀男	064-0805	札幌市中央区南5条西25丁目2-28-203	011-532-4177
14	金谷 彌	042-0931	函館市榎本町13番地21号	0138-57-0685
15	窪田 恵子	006-0851	札幌市手稲区星置1条3丁目6-1-808	011-694-2627
16	桑田 正博	069-0833	江別市文京台58-22	011-386-8543
17	近藤 貴	041-0832	函館市神山3丁目39番5号	0138-32-5895
18	齊藤 隆博	080-0862	帯広市南の森西4丁目3番地15	0155-47-5203
19	佐藤吉五郎	006-0818	札幌市手稲区前田8条10丁目6-3	011-683-1054
20	佐藤 正幸	069-0237	空知郡南幌町栄町4丁目4-10	011-378-5242
21	佐藤 靖	002-0855	札幌市北区屯田5条2丁目4-25	011-771-2673
22	重山 恵	070-0053	旭川市3条西3丁目1-7	0166-27-3021
23	庄 栄一	006-0806	札幌市手稲区新発寒6条10丁目10-1	011-684-8542
24	芝木 秀昭	063-0062	札幌市西区西町南17丁目2-46	011-661-3277
25	白井 閑毅	069-0851	江別市大麻園町17-3	011-232-7646
26	角力山 旭	062-0934	札幌市豊平区平岸4条6丁目2-13	011-821-4053
27	関 建治	061-1355	恵庭市寿町2丁目33-10	0123-36-5726
28	高橋 諒治	077-0023	留萌市五十嵐町1丁目7-21	0164-42-4661
29	武田 誠	041-1122	亀田郡七飯町大川7-4-3	0138-64-3629
30	多田 紘一	003-0029	札幌市白石区平和通4丁目北1-19	011-863-3187
31	種市誠次郎	063-0821	札幌市西区発寒1条2丁目1-11-3	011-667-2267
32	寺嶋 文憲	062-0052	札幌市豊平区月寒東2条12丁目6-17	011-851-3594
33	寺本 吉明	082-0001	河西郡芽室町平和	0155-62-2106
34	出村 保	077-0033	留萌市見晴町1丁目18番地	01632-7-2034
35	土井 勝展	061-3212	石狩市花川北2条2丁目22	0133-74-7351
36	富田 泰	007-0844	札幌市東区北44条東10丁目3-1	011-752-6813
37	早弓 弘行	073-0021	滝川市本町1丁目7-23	0125-23-4828
38	宝輪 勝巳	085-0058	釧路市愛国東3-3-12	0154-36-8680
39	藤井 正治	067-0063	江別市上江別西町46-10	011-383-9188
40	船着 昭弘	007-0836	札幌市東区北36条東28丁目2-11	011-781-5552
41	松島 輝男	001-0853	札幌市北区屯田3条4丁目11-12	011-771-6191
42	三浦 敏勝	041-0836	函館市山の手3丁目13-1	0138-32-3070
43	三谷 哲司	062-0022	札幌市豊平区月寒西2条10丁目1-15	011-851-8557
44	宮川 誠一	005-0832	札幌市北の沢1909-118	011-571-6848
45	宗廣 義彦	069-0232	空知郡南幌町緑町2丁目4-8	011-378-1811
46	村瀬 千穂	002-8003	札幌市北区太平3条1丁目1-14	011-773-8628
47	森川 昭夫	001-0028	札幌市北区北28条西5丁目2-25-501号	011-709-5368
48	柳原 寿夫	070-0822	旭川市旭ヶ丘4丁目	0166-52-6086
49	山口 長伸	086-0205	野付郡別海町別海常盤町280 別海町教育委員会(教育長)	0153-75-2111
50	山宮 喬也	090-0836	北見市三輪549-33	0157-36-0114
51	吉田 倭雄	063-0035	札幌市西区西野5条1丁目3-7	011-667-9486
52	米谷 哲夫	064-0803	札幌市中央区南3条西23丁目	011-621-0793
53	和田 弘	061-1133	北広島市栄町2丁目2-3	011-373-4230
54	若竹 隆邦	041-0811	函館市富岡町3丁目22-6-704	

■ 地区サークル役員名簿 2010 ■

北海道造形教育連盟

札幌市造形教育連盟

役名	氏名	勤務校
会長	塚野 昭臣	稲穂中長
副会長	田口 和男	厚別西小長
"	谷山 圭子	あいの里西小長
"	加藤 正幸	北郷小長
"	益村 豊	大谷地小長
"	植木 則子	常盤小長
"	今 裕子	福住小長
"	土井 善範	北陽小長
"	石谷 正美	北白石中長
"	小泉 信嗣	陵陽中長
"	後藤 和司	平岸中長
"	阿部 宏行	教育大岩見沢校准
事務局長	櫻田 豊	星置東小長
次長	松原 和彦	北小長
"	橋詰 博	真駒内中頭
会計監査	山田 宏司	青葉小長
"	藤原 寛	西小長
会計部長	高向 修子	藤女子中・高
研究部長	森實 祐里	星置東小
広報部長	小林 充裕	東札幌小
事業部長	池田 武彦	本郷小
庶務部長	石垣あけみ	西小
ネットワ-ク課	山 薫	幌南小

事務局	札幌市立星置東小学校 (長)	櫻田 豊
	〒006-0852 札幌市手稲区星置2条1丁目6-1	
	☎011-694-7580	

後志教育研究会図工美術部会

役名	氏名	勤務校
委員長	嶋影 哲弥	小樽市入船小

連絡先	小樽市立入船小学校	嶋影 哲弥
	〒047-0021 小樽市入船3丁目19-1	
	☎0134-23-5296	

石狩造形教育連盟

役名	氏名	勤務校
委員長	伝住 修一	江別市野幌若葉小長
副委員長	釜田 恵児	千歳市千歳小長
"	島田 茂	江別市文京台小長
事務局長	池田 元治	江別市上江別小頭
次長	中野 悟	北広島市高台小頭
研究部長	山崎 正明	千歳市北斗中
研究員・ネット	岩崎 愛彦	千歳市千歳小
研究部員	佐伯 晶宣	恵庭市柏小

事務局	江別市立上江別小学校	池田 元治
	〒067-0066 江別市ゆめみ野南町9-3	
	☎011-380-1122	

空知美術教育研究会

役名	氏名	勤務校
顧問	内田 暢一	OB
"	佐藤 正幸	"
"	枝広 健二	"
会長	白井万寿子	滝川市西小頭
副会長	佐藤 新	三笠市新幌内小頭
"	鎌田 俊博	妹背牛町妹背牛中
事務局長	館山 唯郎	滝川市東小
次長	松井りおか	芦別市芦別中
総務部長	岩田 智弘	美唄市東中
研究部長	橋本 幸枝	岩見沢市明成中
事業部長	中澤 孝仁	岩見沢市第二小
広報部長	伊藤 記子	岩見沢市北村中
会計	竹田 睦生	岩見沢市岩見沢小
監査	伊藤 晃	南幌町みどり野小
"	池田 香奈	岩見沢市栗沢中
"	岩井 敦子	長沼町中央長沼中

事務局	滝川市立東小学校	館山 唯郎
	〒073-0014 滝川市文京町2丁目1-1	
	☎0125-23-1591	

上川造形教育研究会

役名	氏名	勤務校
会長	菅原 敏光	東川町東川第三小長
副会長	吉田 顯康	旭川市愛宕小長
“	菅原 良和	旭川市旭川小頭
“	鈴木 敏春	当麻町当麻中
監査	引地 俊夫	美瑛町美瑛中
“	加藤 隆	旭川市台場小長
事務局長	渡辺 悟史	東川町東川小
次長	妻沼 大也	旭川市近文第一小
“	鳥本 匡洋	東川町東川中

連絡先	東川町立東川小学校 〒071-1426 上川郡東川町北町1丁目1-1 ☎0166-82-2425	渡辺 悟史
-----	--	-------

旭川市教育研究会図工美術部会

役名	氏名	勤務校
顧問(会長)	渡辺 盛二	近文第一小長
部長	森 洋	啓北中
副部長	岡田 裕昭	永山西小
“	中村 靖	六合中
事務局長	吉野 法行	旭川中
次長(ネット)	庄子 展弘	北星中
会計	大山みのり	愛宕小
研究推進部長	成田 慎司	北門中
副部長	中島 圭介	緑が丘中
事業部長	畠山 勝	春光台中
副部長	井山 和博	永山南中
“	澤田 克之	忠和中
広報部長	村田 靖彦	東明中
副部長	妻沼 大也	近文第一小
地区委員	川原 潤	永山中

事務局	旭川市立旭川中学校 〒078-8281 旭川市東旭川南1条6丁目 ☎0166-36-1007	吉野 法行
-----	--	-------

留萌地方美術教育研究会

役名	氏名	勤務校
会長	斉藤 友昭	幌糠小
副会長	野島 操	初山別村豊郷小長
“	酒井 典子	留萌市留萌中
監査	工藤 臣	天塩町天塩中
“	久保なつき	羽幌町羽幌小
事務局長	村元 隆一	増毛町阿分小頭
次長	小西 共美	沖見小
会計	豊崎 東洋	緑丘小
研究部長	松岡 宏悦	羽幌町羽幌小
副部長	西村 徳清	初山別村初山別中
事業部長	滝本 都子	東光小
副部長	工藤 臣	天塩町天塩中

事務局	増毛町立阿分小学校(頭) 〒077-0131 増毛郡増毛町阿分116 ☎0164-54-2304	村元 隆一
-----	--	-------

渡島美術教育研究会

役名	氏名	勤務校
会長	黒田 雅世	北斗市茂辺地小長
副会長	細川敬太郎	北斗市久根別小
“	村岡 壽英	八雲町相沼小
監査	船橋 恭二	七飯町大中山小
“	白取 悟	北斗市沖川小
研究部長	高島 純	七飯町大沼中鈴蘭谷分
副部長	岡島 俊	鹿部町鹿部中
事業部長	亀山 厚子	七飯町大中山中
副部長	川村 麻美	長万部町長万部小
庶務部長	木村 麻岐	北斗市浜分中
会計	小山内久美子	七飯町藤城小
幹事長	後藤 征秀	北斗市上磯中
副幹事長	水口 司	北斗市大野中

連絡先	北斗市立上磯中学校 〒049-0156 北斗市中野通320-4 ☎0138-73-2076	後藤 征秀
-----	---	-------

函館市美術教育研究会

役名	氏名	勤務校
会長	中村 吉秀	亀尾小・中長
副会長	土谷 敬	附属函館中副長
〃	仲井 靖典	凌雲中頭
幹事長	瀧本 伸幸	日吉が丘小
〃	木村 伸仁	銭亀沢中
研究部長	西館 純	昭和小
〃	佐々木 壮一	的場中
事業部長	山田 光	あさひ小
〃	九千房 政光	旭岡中
庶務部長	柿崎 雄二	昭和小
〃	笠松 英治	戸倉中
経理部長	山形 弘枝	金堀小
〃	齋藤 悦子	桐花中
総務	横岸 澤英二	本通中

連絡先	函館市立日吉が丘小学校 〒041-0841 函館市日吉町2-34-1 ☎0138-51-7072	瀧本 伸幸
-----	--	-------

胆振造形教育研究会

役名	氏名	勤務校
会長	佐竹 秀行	白老町虎杖中長
副会長	佐藤 務	登別市幌別中長
事務局長	大年 教子	むかわ町鶴川中

事務局	むかわ町立鶴川中学校 〒054-0051 勇払郡むかわ町文京4-2 ☎0145-42-2283	大年 教子
-----	---	-------

十勝造形サークル

役名	氏名	勤務校
委員長	石割 章浩	音更町駒場中頭
事務局長	小泉 佳一	幕別町札内中

事務局	幕別町立札内中学校 〒089-0553 中川郡幕別町札内文京町29番地 ☎0155-56-2015	小泉 佳一
-----	---	-------

檜山管内造形教育研究会

役名	氏名	勤務校
会長	茶碗谷 稔	江差町江差北小長
副会長	高橋 栄二	奥尻町青苗小長
事務局長	谷口 光伸	江差町南が丘小頭
研究部長	鈴木 修一	厚沢部町鶴小頭
事業部長	晴山 泰文	乙部町乙部小頭
幹事	藤谷 毅	檜山区小倉山小
〃	山寺 潤	今金町今金小

事務局	江差町立南が丘小学校(頭) 〒043-0063 檜山郡江差町字南浜町370 ☎0139-52-0524	谷口 光伸
-----	---	-------

室蘭造形教育研究会

役名	氏名	勤務校
委員長	大野 達也	室蘭市水元小

連絡先	室蘭市立水元小学校 〒050-0071 室蘭市水元町5-1 ☎0143-44-3311	大野 達也
-----	---	-------

苫小牧市教育研究会造形研究部会

役名	氏名	勤務校
会長	宮下 肇彰	糸井小
副会長	山中 詩乃	鶴岡小
幹事長	松柳亜希子	拓勇小
理事	石井 浩昭	拓勇小
〃	吉田とし子	凌雲中

連絡先	苫小牧市立拓勇小学校 〒059-1303 苫小牧市拓勇東町4丁目8-1 ☎0144-57-2800	松柳亜希子
-----	---	-------

帯広市教育研究会図工美術部会

役名	氏名	勤務校
顧問	辻 敦郎	第五中長
部長	根岸 邦昌	西陵中
副部長	橋本 英子	広陽小
事務局長	梅津 美香	第二中
次長	森 好広	明和小
“	佐々木秀徳	第八中
ネットワーク	澤田 佳子	第四中

事務局	帯広市立第二中学校 〒080-2474 帯広市西24条南1丁目7 ☎0155-37-2010	梅津 美香
-----	--	-------

釧路造形教育研究会

役名	氏名	勤務校
委員長	奥田 泰朗	弟子屈町昭栄小長
副委員長	森 富輝	浜中町榊町小長
“	小野三枝子	釧路市釧路小頭
“	内山 博之	標茶町虹別小頭
“	志藤 英樹	釧路市興津小頭
事務局長	杉山 浩彰	釧路市美原中
ネットワーク	花輪 大輔	教育大附属釧路中

事務局	釧路市立美原中学校 〒085-0065 釧路市美原4丁目7-1 ☎0154-37-1171	杉山 浩彰
-----	---	-------

オホーツク造形教育連盟

役名	氏名	勤務校
委員長	吉田 寛	訓子府町訓子府小長
副委員長	石橋 一郎	西興部村西興部小長
“	中村 信之	清里町緑町小長
“	光成 英二	北見市端野小長
監査	光岡 光彦	北見市常呂中長
“	西村 榮基	斜里町斜里中長
事務局長	添田 好美	網走市中央小
次長	平岡 良一	北見市日吉小
研修部長	塩浦 亜紀	網走市潮見小

事務局	網走市立中央小学校 〒093-0084 網走市向陽ヶ丘4丁目67-1 ☎0152-44-7368	添田 好美
-----	--	-------

根室造形教育連盟

役名	氏名	勤務校
委員長	大井誠一郎	根室市花咲小長
副委員長	大溝 雅之	中標津町計根別中
事務局長	小野寺宏二	中標津町広陵中長
次長	小出 秀明	別海町中西別小
研究部長	外川 篤司	別海町上風連小
副部長	岩倉 真妃	中標津町西竹小
会計監査	吉村由紀子	別海町野付中
理事	長谷川恵美子	標津町川北中
“	吉田久美子	別海町中西別小
“	沼田しずか	中標津町中標津東小
“	木庭 さち	中標津町広陵中
“	大橋 則美	中標津町中標津中
顧問	山口長身伸	O B (別海町教育長)
“	清水 克美	“ (画家)
“	桐沢 享	“ (橋本の森美術館長)
“	細見 浩	“ (版画家)
“	鍋谷 尊之	“ (画家)
“	本川 勝敏	“ (写真家)
“	煤賀 克文	“ (版画家)

事務局	中標津町立広陵中学校(長) 〒086-1010 標津郡中標津町立東10条南7丁目1 ☎0153-73-3161	小野寺宏二
-----	---	-------

北海道造形教育連盟規約

1. 名称と目的

本連盟は、北海道造形教育連盟といい、北海道の造形教育の振興を図るをもって目的とする。

2. 事業

本連盟は、目的を達成するため次の事業を行う

- ① 研究会・講習会・展覧会等の開催及び後援
- ② 造形教育に関する教科書・教材・教具等の研究
- ③ 会報の発行
- ④ 他の造形教育団体との連絡提携
- ⑤ その他、本連盟の目的達成に必要と認められる事項

3. 会員

会 員 本道幼・小・中・高・その他これに準ずる学校の教職員

賛助会員 本連盟の目的に賛同するもの

4. 組織

地区サークル 本道各地にサークルを置き、会員は原則としてこれに所属する

本 部 本連盟の本部は、札幌に置く

5. 構成及び任務

①役員

会 長 1 名 本連盟を代表する

副 会 長 若干名 会長を補佐する

会 計 監 査 2 名 会計の監査をする

②委員

地区委員長 地区1名 地区サークルを代表する

地区委員 地区1名 地区サークルの連絡調整にあたる

(地区委員は、地区委員長を兼務してもかまわない)

常任委員 若干名 会長が委嘱し、本連盟の運営に当たる

顧 問 連盟の重要な問題につき意見を述べる

③部 長 各部推進の要として常任委員より会長が委嘱し、会務の分掌及び執行にあたる

6. 選 任

会長、副会長、会計監査は委員総会で選出する

地区委員長及び地区委員は、地区サークルで選出する

常任委員は会長の委嘱による

顧問は委員総会において委嘱する

7. 任 期

役員及び委員の任期は1カ年とする、但し再任を妨げない

8. 会 議

総 会 必要に応じ開催し、連盟事業につき協議する

委員 総会 役員、委員をもって構成し毎年開催する

役員を選出、予算、決算及び事業の年度計画等につき審議する

常任委員会 役員及び常任委員をもって構成し、連盟の事業を執行する

役員会会長、副会長、事務局長、会計により構成し、必要に応じ会の運営について協議する

部 長 会 本部役員、各部部長により構成し、必要に応じ各部事業等についての連絡調整を行う

9. 会 計

本連盟の会計は、会費・事業収入及び寄付金により執行する

会 費 会員は、一人 年額2,000円を納入するものとする

地区サークルは、年額10,000円を納入するものとする

10. 事 務 局

事務局は事務局長在勤の学校に置く

事務局長は常任委員中より会長が委嘱する

事務局には必要に応じで各部を設け、業務を分担する

事務局に事務局次長、会計担当を置く

11. 年 度

本連盟の事業並びに会計年度は、5月に始まり翌年4月に終わる

12. 規約の改廃

規約の改廃に当たっては特別委員会（規約改正委員会）を設け、規約改正案を総会に提出する本規約の改廃は委員総会の決議による

(平成6年4月29日改訂)

(平成19年4月28日改訂)

(平成21年4月総会にて改訂)

※2008年度 規約改正特別委員会により原案作成

全国図画工作・美術教育研究大会

第14回 全国造形教育研究大会
第15回 図画工作・造形教育研究全国大会
第16回 全国造形教育研究大会札幌大会

IN 北海道

【大会テーマ】
“わたし”を創る
～自立と共生の造形教育をめざして～

【授業実践テーマ】
「あったかい」をつなげ合う造形活動

【開催日】平成23年(2011年)7月26日(火)～28日(木)

【開催地】

札幌市

札幌市立新色小学校
札幌市立円山小学校
リアルライフアートミュージアム
札幌市民ホール 特

第1日目	午前	午後
受付開始 10:00～	開会式	札幌市立新色小学校 札幌市立円山小学校
第2日目	午前	午後
札幌市立新色小学校 札幌市立円山小学校	図画工作 造形教育実践発表	図画工作 造形教育実践発表
第3日目	午前	午後
札幌市立新色小学校 札幌市立円山小学校	図画工作 造形教育実践発表	図画工作 造形教育実践発表

お問い合わせ先
北海道造形教育連盟 事務局 札幌 室 札幌市立新色小学校 TEL:011-642-3221
FAX:011-611-0745
北海道造形教育連盟HPアドレス <http://hokkaido.jp/>
札幌 CG 協会 札幌 (札幌市立新色小学校 3号)

編集後記

「風よ、大地よ、夢よ、北からはじまる造形の未来」。十年前の札幌で開催された全道大会と同時間になった全国大会のテーマであったことを記憶している方々は、きっと多いことでしょう。造形教育の危機を感じつつ、風雲巻き上がるがごとく、北海道から全国に向けて授業実践に支えられた造形教育の発信をした時だったように思います。

以来、道内各地で開催される大会は、道内の造形教育連盟に集う会員と諸先輩の皆様が、子どもたちに「あらわす・つくる・喜び」を与え、「感じる心」や「感性」をはぐくもうとして実践を積み上げてきた十年間であったのだとの思いを強く感じ、顧問の先生のお話や全道各地の会員から届く原稿を読ませていただきました。

六十周年の節目を迎えた北海道造形教育連盟の記念誌編纂にあたり、私たち編集委員は、世代を超えて造形教育を愛する多く会員の方々の心に巡り合えた喜びを得ることができました。

奇しくも十年の時を経て、全国の造形にかかわる教師たちが、また北の大地に集うことになりました。それを目前にした今年の函館大会が、ちょうど六十回目の記念すべき全道大会となったこともうれいことです。

ここに編纂した「湧きあがる造形」は、全道各地の会員の熱き思いが水脈のように、これからも湧き続けることを願って名付けました。

湧きあがる北の大地の造形は、脈々と十年先・二十年先までも受け継がれ、がっしりとした大きな流れを築き上げていかなければならないと思います。

(六十周年記念誌編集委員会 加藤正幸)



北海道造形教育連盟60周年記念誌

「湧きあがる造形」

発行者 北海道造形教育連盟
代表 会長 菅原 清貴
事務局 札幌市立盤溪小学校
事務局長 稲實 順
TEL (011-642-3223)
FAX (011-642-3287)

連盟創立60周年企画編集委員会

今 裕子 (札幌福住小学校)
加藤 正幸 (札幌北郷小学校)
阿部 時彦 (札幌藤野中学校)
中居 正光 (札幌菊水小学校)

東 尚典 (札幌平岡中央小学校)
川島 正夫 (札幌幌南小学校)
福島由紀子 (札幌幌北小学校)
小林 充裕 (札幌東札幌小学校)
館内 徹 (札幌あやめ野中学校)

表紙・中表紙

(北海道教育美術展奨励賞作品)
レイアウト 館内 徹

印刷・製本

小南印刷株式会社
札幌市中央区北9条西23丁目
TEL (011-641-5373)

